

527

8



始



2.11.20

72

青乙の女

著—ウケ・ル・ムアリウ

譯 三 良 岡 藤



ア
ル
ス
・
ホ
・
ヒ
ユ
ニ
ア
ー
・
ラ
イ
ブ
ラ
リ
ー

4



4

青の衣の乙女

著—ウケル・ムアリイウ
譯 三良岡藤



スルア

大正
13. 5. 22
内交

527-8

アルス・ポピュラア・ライブラリーの刊行について

アルス・ポピュラア・ライブラリーは我々の煩雑な生活の上に善き慰藉と、快よき藝術的香氣を送らんとするものである。従つてこの叢書に包括せらるゝ世界文藝の名篇傑作は主として一般的なもの、興味中心のものであつて、現代文學なると古典的なるを問はず、高級なると通俗なるとを論せず悉く之を網羅し、或は藝術の奔漲る高踏的作品あり、或は變幻極まりなき探偵小説あり、或は科學小説の人情小説に隣し、或は傳奇小説の戀愛小説と肩を並べ、歴史小説、宗教小説、その他各異色を競ひ、ユーモアに富めるもの、哀切限りなきもの、怪奇なるもの、絢爛なるもの、輕妙なる、深刻なる、雄大、繊細、多種多様を極むるもので、實に世界文藝の自由奔放なる、一大管絃樂と云ふべきである。題してポピュラアといふ、文藝の一般化を以て理想とする以上價まに何人にも購ひやすき最低最廉を以てした。幸に清鑑を賜はらんことを望む。

青衣の乙女 目次

1

第一章	發端	二
第二章	腕環と手掌	一〇
第三章	圓柱廊のある家	二〇
第四章	女	三〇
第五章	無明の間	四〇
第六章	手と心臓と	五一
第七章	秘密は愈々加はつて來た	五七
第八章	知らない男	六六
第九章	暗黒の世界から光明の世界へ	七四
第十章	青衣の乙女	八一
第十一章	十月の十四日	八九

第十二章 これはあの男のだ……………二〇五

第十三章 鉛 筆……………二〇八

第十四章 發 覺……………二一五

第十五章 私の見たもの……………二二五

第十六章 奥の部屋……………二三二

第十七章 大理石の手……………二四四

第十八章 解き得られない秘密……………二五四

第十九章 見たこともない妻の話……………二六五

第二十章 昨日は？……………二七四

第二十一章 ゲツゲの話……………二八三

第二十二章 断たれた糸……………二九二

第二十三章 發 見……………二九六

第二十四章 名 手……………三〇三

第二十五章 エドナの正體……………三〇九

第二十六章 エドナの申込み……………三二〇

第二十七章 大 計 畫……………三二六

第二十八章 二つの言葉……………三三三

第二十九章 謎……………三四八

結 末……………三五八



の
乙
女

第一章 發端

ウキルフオード・ヒートンといふのは私の本名ではありません。では何故私がこの名前や世に見えるかといふのに――

その第一の理由は、私自身、世の好奇心や臆服の對象となることを避けたいため。次にこの話の順序として、ローッパでの或る最も有力な皇室の臆服を傷つけることになる、それは歌むを得ないとしても、私の本名がこの事實に係はることを避けたためであります。

ごく近頃のこと、とりどりの話題――不思議な話題が言ひ傳へられた。最初、私はその途方もない噂話を一笑に附してゐた。が見る見るその噂話は事實の真相を外れて、豊川らしく誇張して來だした。といふわけは、敏活な新聞の記者共は、その話を熱心に捕へて來て、それを一つの物語に仕組んで、そして世界中で一番私に親密な一人の身上にまでその果を及ぼして來たことである。

借て、私の話――といふよりも寧ろ癡話事件といふのを記述することにしませう。

で、讀者諸君に事情の奇妙な連鎖をはつきり了解して置く必要上、私は今から凡そ八年前のことを振返つて見なければならぬ。八年と云ふと、時の流れから云へば大して長い間のことではないが、私にはそれが變化の多い一世

間でもあつたかのやうに考へられる。私はまだうら若くて、廿五歳になつたばかりであつた。當時私は父からの遺産で年に二千圓近い収入があつたので、相當に暮らしてゐた。そのため、實業にたづさはる必要もなく、來る日も來る日も徒らに過して、云はば毎日、毎朝を迎へるのに意屈したものである。私はその頃牛津大學に通つてゐた。が、相當に懶けもし、若げの至り臆服な行爲も、厭であつたので、旨く卒業できるかどうかを心配してゐた。が、總局學費得業士の地位を獲ることになつて、そしてそれから間もなく、世の慣例を踏んで外遊したものである。けれどもそれも二々年足らずで、世の中に飽き飽きして倫敦に歸つて來た。そして河岸通りエセツクス街の煤煙だらけな一組の部屋（居間と寢室の續いた）に居を定めた。

少し出て行けば驚くべき道路ではあつたが、私の居るあたりは恐ろしく凍けてゐて、ひっそり職をした、寂しいと云つてもいい位な貧乏になつてゐた。その家の二階下と二階とは數人の法律家事務所に占領されてゐて、どの事務所の扉もポロポロになつたのや色の褪めた緑色の羅紗で蔽はれてゐた。で私が間借りをしてゐるのは三階であつた。

私はその部屋と同様に多分半世紀間もお務めをした家具を受継いでゐた。その部屋と家具とは陰氣で時代後れた代物ではあつたが、唯一つ私の心を惹きつけずには置かないものがあつた。といふのは他でもなく、その部屋の上の方の、天井の低い屋根部屋にディック・ドイルといふ私の大學時代の同窓生が棲んで仕事をしてゐることであつた。彼はさんざ放蕩をした揚句、一かどの雜誌記者並びに文士になりすましてゐたのである。

一見奇妙なことの様に考へられるが、私が暖かな南歐から歸つて来て、こんな薄汚い、氣落ちのするやうな場所に住居を下したといふことは、唯一國に、世界でたつた一人のこの友達の傍で暮らしたために外ならなかつた。

二十年も私の家に寄公してきたパーカー老婦人を除いては、私はほんの一人ぼつちで、赤ん坊のやうに頼りない男であつた。廿五歳の春を迎へるとともに、私は何事に對しても興味が有てなくなつて、常闇に身を投じて仕舞つた。人生に對する慾望は悉く私を去つて仕舞つたやうにおもはれた。この世の中の喜ばしいことも最早私のものではなかつた。で青春の氣力に充ち滞ちてゐるにも拘らず、私の精神の能力と肉體の力とは事實裏場を見渡してゐた。

恐ろしい事實を私は茲に語らなければならぬ。讀者は私に同情を寄せて下さることゝ固く信じる。外遊中、私は伊太利の古都を訪れて此處彼處を旅行して廻つた。私はその町々の巨大な廣場や崩れた宮殿の中を彷徨つて廻り廻り込んでゐた。一つの石として、鑿像であつた昔を語らないものはなかつた。すると或る日、私は急に病氣に取り憑かれて仕舞つた。そして三ヶ月の間、私はフロオレンスに在る英國の寄宿所の病床で轉輾反側した。私を見舞つて來た伊太利でも有名な二人の醫者は頭を振つて生命は扶けることは出来ても、何か五管の一つを失ふことになるだらうと云つた。そして噫！この二人の醫者の言葉は誤つてゐなかつた。私の眼は鞏膜炎に罹つて、鞏膜に手懸しい炎症を起し初めた。酷天私の眼は、膿腫として來た。私の視力は次第に、が間違ひもなく、私を見捨てゝゐた。私は醫者が始終心配してゐてくれたこの眼病に攻撃されるために身體の煩ひから恢復したやうなものであつた。

私は出来る事ならどうかして、視力を取り止めて頂きたいと醫者に懇願した、が醫者は唯小さな褐色の硝子瓶か

ら私の眼に水薬を垂らして、その効果を眞面目に守つて見守つてゐるだけであつた。羅馬から有名な眼科醫が遣つて來た。私にはその醫者の姿も、丁度濃霧を通して見る時のやうにぼんやりと見えるだけであつた。そしてその醫者も亦嫌せるだけのことは嫌してゐるのだからと私に云つた。

それから二週間の後、私が病床から起き上つた時には私は盲目であつた。

私はこの私の上により擲つて來た恐ろしい苦惱を背負つて、私を連れにフロオレンスまで來たところのドイツ・ドイルと共に倫敦に還つて來た。私に取つては、人生は最早何等の魅力も有たなかつた。快樂や幸福を與へてくれたところの世界の美しいものは、永久に私から姿を消して仕舞つたのである。今や私は常闇の世界に生きることゝなつた。そしてその常闇は太陽が私の眼の上に光りを投げる晝間でも、鈍い暗い赤色を帯びて私に懸對するに過ぎなかつた。最初私の眼を衝いた考へは、視力を失つたために容貌も變つたに相違ないといふことであつた。がドイツは變つてはゐないと何遍も私に云ひ聞かせた。誰でも私の眼を見て、盲目であると考へる者はないと彼れは言つた。

斯うして、私、ウキルフォード・ヒートンは一度も見たことのないエセックス街の汚らしい古びた部屋に居るたのである。讀者諸君には、遂に盲目になつたその悲痛な心持がどんなものであるかは到底お分りにならないでせう。

5
ドイツは僅けるだけ仕事の手を留めて、私の部屋に來ても喋りをするに止めてゐた。實際世の中の樂しみと云

つては彼と語ることより他私には向もなかつた。彼は私の部屋の様子を一々詳細に聞いて聞かせ、そしてその日の新聞の記事をかい摘んで話して、私を慰めるやうにした。けれども彼が外出して居ない時、又はその部屋に上つて仕事をしてゐるときには、私は聖クレメント・デイインの時計の響る数で時間を数へながら、幾時間も幾時間も坐つて考へてゐるだけであつた。

時間の意味に耐へ切れないので、私は郵頭官學校から一人の先生を招聘することにした。でその先生は凸字で出来た書物を持つて毎日私を訪ねて来て、私に讀み方を教えた。大抵まで卒業した男が小學一年生の機にいるはから教はるのは可成變なものではあつたが、それでもそのお蔭で憂鬱のあまり氣が狂いさうなといふ様なことは無くなつた。そして間もなく、私は苦心の結果その凸字に依つてポツポツではあるが盲人のために製らへられ、書物が讀めるやうになつた。且又私は讀方を覺えたばかりでなく、その讀方の練習で極度に磨進した觸感によつて、小さな可愛らしい籃を編むことさへも出来る様になつた。

長い陰鬱な冬の季節が過ぎ去つた。が、太陽を見ることの出来ない私に取つて、置かな入月の日だとして、暗い十二月の日だとして何の撰ぶことがあらう！時々私は戶外に出ては見たが、それも極端のことであつた。杖でコソコソと行手を見當てて巧に路を歩いて行くといふことは、私にはまだ覺えない難であつた。私は室内で可成練習した。が盲人が繁盛な河岸通りに出掛けて行くといふには餘蘊な確信を持つた。人込みの中を自由に歩いて行かれる位にならなければならなかつた。で私は遊びに出るにはいつでもドイツの腕に纏つて歩いた。私達いふらつく範圍は、

ウエストミンスター橋際の遊藝場、又は地下鐵道のチャーリング・クロス停車場からソールドール橋まで響かつてゐる小さな風致園の周りであつた。私は又彼に連れられて時々、極端にはあつたが、アデルフキテレスにある娯楽部に行つて食事をした。

ところが四月になつて、その煤けた部屋に棲やうになつてから六ヶ月目のこと、或る朝ドイツが私の部屋に入つて来て言ふには「僕は、暫く君とお分れするやうになるかも知れないところだつたよ」といふ理由を聞くと、彼は通信員として、印度の北西の國境への英國討伐軍と一緒に行くやうに、雜誌社から任命されたのだといふことであつた。

「無識者は行くだらう」私は、行けば従つて立身することにもなり、金儲けにもなることを考へながら云つた。彼は「ずつと以前に」僕の一番の野心は戦時通信員に任命されて行くことだ」と私に話したことがあつた。

「どうして君」と彼はいつもよりか眞面目な顔で答へた。「君を獨り、置き去りにしては出来ないよ」「馬鹿な」と私は叫んだ。「僕はそんな好い提供を君に棄てさせて一緒に留めて置きたくはないよ。ドイツ、君は行かなくちやいけないよ。君は長くて三ヶ月もしたら歸つてくるだらう。左様ぢやないのかい？」

「多分それより前にだ」といふ彼の聲は低くていつものと異なつてゐた。「が實際、僕はこんなに頼りない君を置き去りにして行くことは出来ないよ。」

「行つて呉れ給へ」と私は突然として云つた。「ムーカー婦人が僕の世話をして呉れるよ、それに三ヶ月位長く居つ

「いや」と彼は云つた。それは好都合なことではあるが、こんなに頼りない君が来る日も来る日も此處に坐つたまま
でゐられるとは思へないよ。それは出来なないことだよ」

「僕の本を讀んだり、バスケケットを製らへたりして気分を晴らすよ」と私は答へた。實を云ふと、私は彼の印度行き
の話を聞くや聞かずにがっかりして仕舞つたのであつた。彼が行つて仕舞へば、私は必定全くの一人ぼっちになつて
何の慰めもなく愛に沈み込んで仕舞ふに相違なかつた。が視力を失ふと心が鋭敏になるもので、私はこの提供が彼
に何を意味してゐるかを考へた、私のためにその提供を断らうとしてゐる彼の自尊心と心機へを賞讃せずにはゐられ
なかつた。

で私は彼に行つて呉れと言ひ張つた。遂に説服されて、それから三日の後、彼は印度に向けてチャールリントン・ク
スを渡つて行つた。

彼が行つて仕舞ふと、私はすつかり氣を落して仕舞つた。凸字の書物を讀んで氣を紛らさうとしても、壁の製造に
集中して慰めやうとしても、それは到底無駄なことであつた。夜になると、時々バーカー夫人が書物を讀んで聞かせ
ることはあつたが、彼女自身甚だ貧弱な學者であつたので、分らない文字はその綴りを一々云はせて、その字の意味
を一々説明しなければならなかつた。で私は、運々として拂らない長い時間を、唯一人坐つたまま失意の中に過す
はかばかになつた。私は最早、

「さあ君、陽氣になり給へ。今日俱樂部で聞いた話を君に話して聞かせやうぢやな。か」などといふドイツの樂し
相な話を聞くことは出来なかつた。唯一人鬱々として、何事にも興味がなく、氣配けしたやうに私はその口を
塗り暮した。

ドイツからは唯一度の便りがあつた。それは北西印度の國境を越えた知らない土地から出したものであつた。私
はその手紙をバーカー夫人に讀んで貰つて聞いたのであるが、悲しい故ドイツは大の亂筆家であつたので、彼女の
綴りは至つて不十分なものであつた。けれどもその意味を綜合して見て、彼が如何に私の身の上を察して、一時も早
く任務を果して歸國しやうと焦つてゐるかは充分酌取ることが出来た。事實、彼ほど私を思つて呉れる友人はなく
彼ほど私を必要なものに考へてくれる友人はなかつたのだ。

氣候が一日一日と暖くなつてゆくに連れて、そして又いつもあの狭い隘の世界の中で打委れて「生の徹底」と
坐してゐるにつけても、息詰る感なきがするので、私は外氣に浴したいと思ひ出した。エセツクス街は八月になると
恐ろしくひつそりとして風のない所である。で暑氣に耐へ兼ねて、夜になるとバーカー婦人と一緒に土手に出て、杖
を頼りに、テンプル花園の手摺とサヴォイ街角との間の人通りが少い長い舗道を廻り歩きすることを練習した。

9
毎晩毎晩出て行つて、私は概氣よくこの練習を続けた。私は此の世界がまだ私の眼から閉出を食はされない以前の
こと、目の見えない人達が倫敦の街の雑沓の中を恐ろしげもなしに歩いてゐるのを見たことがあつた。で私は、デ
イツクの留守の際に、嚙嚙感を保つただけでもいゝから廻り歩きの出来る機に、盲目的運動の方法を熟練しやうと決心し

たので、私は概氣よく練習を続けたのであった。パーカー婦人が赤ん坊に肉片を拵つて喰べさせる人のやうに、眞車を
駈へて喰べさせて呉れると、私は遠は連れだつて出掛けた。そして私は無職一時間、私の練習地には読へ向きな河岸ぶ
ちの闊び舗道を歩くのであった。

漸次、極少しづつにはあるが、私は盲人一流の、杖で絶えずコッコと道を叩いて暗い空ろな世界を歩いて行く
行き方で、街を歩くことに専らなつて来た。斯うして絶えず練習を續けてゐる中に、數週間の後、到頭私は、通行人
に出會つた時は直感でそれを選けて、踏かず、何にもぶつからずにその舗道を掘りで歩き切ることが出来るやうにな
つた。これは私に取つてどんなに嬉しい事實であつたらう。斯うなれば、最早人手に頼らなくともいふ。で私は此の
調子で素晴らしい進歩をして、ドイツが歸つて来たら驚かしてやらうと、乃で愈練習を續けたものである。

第二章 腕環と手掌

倫敦の八月は埃つぼけて鬱けつくやうである。殊にエセックス街ではそれが烈しく感ぜられた。討伐戦は、その常
として、延びくになつてゐた。で、ドイツも今だに歸國することが出来ないでゐた。彼の聖々しい戰時記事は彼
が代表して行つてゐるところのそ 雜誌の一つの特色となつてゐた。私がその長 舗道地帯を端から端へ歩いてゐた
或る時のこと、不意に私の靴に手を置いて呼び掛ける者があつた。彼はシャドラック・フェネルと云つて、ずつと

以訛には情を語種の上、役者であつたこともある面白い男であつた。その翌晩彼は私の部屋に訪れて来た。そして
草を吸ひウキスキーを飲みながら、一時間餘りを話して歸つて行つた。此の數ヶ月、ドイツの留守中に私の部屋を
訪れたのは彼だけであつた。

暑さが薄たしくなるにつれて、部屋の籠もつた息詰るやうな空気が耐へ難くなつて、私は出舎か海邊に行かうかと
考へることも厭であつた。が顧みて考へ直して見ると、何處へ行つたとて、山の景色も川の景色も私には見ること
が出来ない。で私は自分の心に幾度もそれを言ひ聞かせて、倫敦に停まることに定めて、晴れた日には毎夜、時々バ
ーカー婦人を連れて戸外に出た。そしてエセックス街から河岸べりまでの花崗岩の段々を用意深く下つて行つて、そ
れから掘りで、舗道地帯を歩むのであつた。が、この闊の單調な世界がどんなに陰鬱で、乗勢のないものであるかそ
れは盲人以外の人には到底分らないことである。

八月半の酷暑しい或る夕方の入時半頃、パーカー婦人が気分が癒れないといふので、私は一人で例もの道邊に掛
けた。大氣は蒸暑く闊へ付けるやうで、舗道は熱氣を反射し、河ぞひにもそよとの風もなかつた。迷想に耽りながら
私は短い段々を下つて、絶えず杖でコッコ叩きながら、交叉點を目當に歩いて行つた。私は最早街の人込みを恐れ
なかつた。唯自轉車だけは、黙つて通り過ぎるので、私のやうな盲人に取つては神變不可思議な鬼の様に思はれた。
殆ど無意識の中に、チャーリング・クロスの停車場から來てゐる鐵路の鐵柵の下までの規定の歩行範圍を踏み踏え
て、私は遂に數條の道路の交叉點と思はれる所まで来た。そして其處で躊躇した。こんなに遠く出掛けて來るのは何

險であつた。で私は自分は何處にあるのであらうと考へた。けれどもビッグ・ベンの鳴る音はそれと感づいた。ブリッチ街の街角に居るのであつた。何故なら聖ステファン俱樂部の壁を感知することが出来たからである。左に曲ればウエストミンスター橋を越えて行くことになり、右に曲れば宮城前とブロード禮拜堂とを横切つてヴクトリア街に至ることを私は知つてゐた。國會議事堂の隣りの倫敦の此の界限は、病氣に罹る以前には、私には、非常に親しみの深い所であつた。で、私は右方へ右方へと歩いて行かうと決心した。すると親切にも議事堂街の角の方から私に聲を掛けて、行先を訊いて、その危険な交又點を横切らせて呉れたものがあつた。それは私の辨識では外に賣りの叫び聲に相違なかつた。交又點に来る毎に二度、そして三度横切機に、私が頼りなげに邊石の上に突立つてゐると、親切にも手を引いて横切らせて呉れる人があつた。が斯うして交又點を横切つてゐる中に、私はすっかり方角を忘れて仕舞つた。私は自分が長い眞つ直な道路にゐることを知つた。そして家々の扉の鍵の手摺で、その通りがヴクトリア街であることを推察した。

私は大膽な自分を、快く思ひ、又こんなに遠くまで獨りで来たことを大いに感賞して、もし落に迷つても馬車と呼び止めてエセクツス街まで遣らせばいい、と考へながら歩行を續けた。そして四十分餘りも歩いた。私を扶けて交又點の一つを過ぎさせてくれたところの一人の子供から、私は自分がヴクトリア街の端を通り過ぎたばかりであることを知つた。私は、動力を失つて以來初めてこの長い歩行を終了して、此の唯一の敵に敵しなく考へられる運命を辿つて来た。

突然、霧れ果てた霧のやうに考へられる所で、私は邊石を離れて壁を壁からうとした。が危險が逼つてゐると気付くか気付かないかに、誰か驚々しく叫ぶ音があつた。と同時に私は劇しく路上に跳飛ばされて、馬の蹄の下で蕩擲してゐた。私はやけに虚空を撫んで通れやうとした。が、次の瞬間、私は頭を左側をしたたかに蹴られた。そして見えない眼の前には火花が散つたかと思ふと、ジーンと耳鳴りの音がして、と同時に何の感じもなくなつて仕舞つた。

どの位の無感覺のままに居たか、それは私には分らない。が何しろ餘程長い間のことに相違なかつた。蘇生つた時初めて私が聞いた物音は、私の周囲の入り亂れた不思議な響きと、低い嘯きとが、その小さな語彙は私の混亂した頭には何を意味してゐるのか少しも分らなかつた。そして突然な横切機の音と。私は一應何處にゐるのであらうと漠然と自分を疑つて見たことを覚えてゐる。盲人といふものは極度に用心深い習慣を養つて行くものである。で私は頭蓋骨内の耐へ難い疼痛に感傷を鈍らされて、黙つたままに考へながら横たはつてゐた。頭は恐ろしく戦慄打つてゐた。悲劇に終つた長い眼の歩行の記憶が、黙つてくると、次には、その出来事の後病院に連れて來られて、それから多分數日此處に斯うして横臥してゐたに相違ない、といふ考へが胸を打つた。が病院でイスパニア乳香の匂ひのする等がない。又看護婦達が織地の服を纏つてゐる等もない。

私は周囲の人々の言葉を聴き取らうと努めたが無駄であつた。それ等の言葉は何處か他の國の言葉で話されてゐるやうに思はれた、ではないなら、でないらしく思はれるのであるが、馬の蹄に劇しく打たれたために私の感覺が全然麻痺

茶々にされてゐるのに相違なかつた。と考へただけでも私は青くなつた。何故なら、盲人である私が又何も聞くことが出来なくなつたとすると、最早私には何の希望も望まれてゐないことになるからであつた。

私は手を延ばして見た。驚いたことには、私は最初信じてゐた様に病院の臥床の上にあるのではなくて、柔い織子の枕をして、縞布敷の上に臥てゐることであつた。その布敷の被ひは廣い裁取のしてある艶澤な織織で出て居り、木細工の臺は金が被せてある證據には手ざはりが滑らかであつた。私は頭に手をやつて見た。そしてそれが手巾と定巾とで纏帯されてゐることに氣付いた。

眼を開いては見たが、元より眼筋は空虚な世界であつた。が私は盲人特有な本性で、私のすぐ傍に誰かゝることに感付いた。で暫時熟考をめぐらした後、私は唐突に問ふて見た――

「私は何處にゐるのでせう、で一體どうしたといふのでせう？」

「貴方は轢かれたのです。そして頭を傷られたのです」と異様な叱り付けるやうな腹語が應へた。「かお訊きしまが、貴方の眼は變ですね、見えるのですか」

「いえ」と私は應へた。「不仕合せなことに私は全然盲目なのです」

「盲目だと」その聲は明かに驚いて喘いだ。

「といふと、あの出来事のためにですねー」

「が一體私は何處にゐるのでせう」と私は熱心に訊いた。

「御心配なさるには及びませんよ」とその聲は快げに應へた。「貴方は必人の所にゐるのですよ」

「では病院にゐるのではないのですか」

「左様です。あの出来事を目撃して、私は盡せるだけのことを貴方にしてゐるのです」

その聲の調子は低められてゐた。そして又伴聲であるといふ考へが、の腹を打つた。

「私のサマリヤ人(情深い人稱)のお名前をお聞するわけには行かないものでせうか」私は尋ねた。

「名前をお聞きになる必要は全然ありません」とその聲は應へた。「貴方の名刺入れから、私は貴方がヒートンと被似る方で、エセックス街の河岸通りに變じておいでになることを知りました」

「左様なのです」と私は答へた。

「貴方は何時から盲目になつておいでになるのですか」腹れた意味のあるその聲が訊いた。私は一語々々が變つて聲がされるその織りの或るものに依つて、それが伴聲であることを知つた。

「で貴方の頭はまだ餘程痛みますか」とその聲は訊いた。と同時に、私は冷やかな手が動悸打つ私の織の上に置かれるのを覺えた。

瞬間、私はその手頭を捉へた。その手は私の手を振り離さうとした。が私は振離される前に、その指が廣い指であること、その指に指環のあること、そして手掌が柔かいことを感知した。

それは婦人の手であつた。彼女は巧に聲音を装はつて、男の聲であるやうに私に信ぜさせやうとしてゐるのであつ

た。は右手を彼女の腕の上に置いて、そしてその腕が硬であることを感知した。彼女の手には、明かに、皮に纏工のされた指られた鉗金で出来てゐる、細い、が妙に軽やかな奇妙な斷環があつた。「私は貴女にお目に掛けることは出来ないのですけれど、奥さん、御親切なお心付けをお禮申上げます」私は彼女が伴で私を駕らうと努めたのを多か細みに思ひながら云つた。

彼女は私に驚かされたのを心苦しく思ふかの様に小さな叫び聲を揚げて、直に手を引つ込めて仕舞つた。

「私はあの出立を日曜してゐたのです」と、明かに彼女の持前の、好く眺つた美しい聲で彼女は簡潔に説明した。その説明から判断すると彼女は間違ひもなく着かつた。美しいであらうか、どうであらうと、私は黙かつて見た。

「どうして起つたのです？ お聞かせ下さい」私は彼女を促した。

「貴方は路を横切つてゐました。その時馬車に衝き倒されたのです。醫者に診察させたのですが、重傷でないと思つてゐます。腕の皮が傷いてゐるだけだ相ですから御安心遊ばせ。そして九死に一生を得たことをお慶び遊ばせ」

「私は親切な方の手に扶けられたことを慶びます」と私は云つた。

「いえいえ、それはどの事でもありませんよ」とその見知らぬ女主人は叫んだ。五六時間も経てば、乾度快くおなりですよ。お休み遊ばせ、朝になつたら馬車でお宅までお連れさせますよ」

「ではまだ朝にならないのですか」私は時間に対する漠然とした疑問を越しながら訊いた。

「いえ、まだです」

その返事は遠方の方で響いた。私は何故か急にがつかした。重い睡氣が襲つて来た、と思ふと私の心は矛盾だらけな考へで一杯なつて、遂に眼りに落ちて仕舞つた。

目覚めて見ると気分はさつぱりとしてゐた。そしてあの優しい婦人も誰も私の傍らに居ない代り、臥室から話聲が聞えてゐた。間の扉はしめられてゐるのであるが、酒盛をしてゐるらしく、的然シャンパンの栓を抜いてゐるに相違ないボンボンいふ音や、薄い皿のチャラチャラ鳴る音が聞えて来た。どんな者の家に、私は疑つて見た。客人となつて私は來てゐるのであらうか？

遂にその聲は靜かになつた、で私は一人の婦人の言葉を聞き取ることが出来た――

「あの男は盲目ですよ、全盲目です。お疑ひになるなら、それをあの男の顔に突き付けて御覽なさい、尻込るかどうか」

男の聲が低く唸るやうに應へた、と又靜かになつて、何處か私の直ぐ近くの時計のチツクチツクといふ音だけが靜けさを破つた。

聽て、秘密話を取り換はしてゐるやうな低い希見な叫びが聞えて来た。扉が靜かに開かれた、とそれから數秒も経たない中に柔かい手が再び私の顔の上に置かれた。私は見えない眼を大きく見開いた。でそれに依つて彼女は私が眼を覺したことを知つたらしく、

17 「眠つて少しは快くなりまして？」その上品な聲は氣遣はしげに訊いた。

「ええ、大變快くなりました」私は肘で身を撐げながら答へた。「ですが、随分長い間御厄介になつたことと思ひます。御親切に甘へて、馬車を一臺呼びに召使を遣つて置き度いと思ふのですが」

「どうして貴方」とその聲は快げに答へた。

「こんな晩にお歸することは出来ませんよ、それに身體も弱つておいでだし。それは無法といふものですよ。付んで被居しやい、朝になればすつかり快くなります」

「貴方はほんとに親切な方です」私は云ひ張つた。「が、これ以上御世話になるなんて思ひも寄らないことなのですから」

「貴方がそんなに私を親切者にお呼びになるなら、では御恩返しをして頂いてもいゝですか」と彼女は訊いた。もしも仕て頂けるなら、少し許り御手数を掛けたいと思ふのですが」

「私の力に及びますことなら、乾度致します」と私は應へた。

「まあ！ お歸ひといふのは、貴方のお名前を茲に書いて置くことなのです。この私の名簿に、今晚の小さな記念のしるしになるでせうからね」

「ですが、此の頃では上手に書くことが出来ないんです。御存じの通り見えないものですから」と私は答へた。

「でも署名はなされるでせう。手蹟が誰はなくとも御挨拶が御挨拶だからお看ししてあげます」その聲は快活に云つた。そして瞬間の後、彼女は多分象牙製のペン軸を私の手に握らせた。

「いつお生れになつたのです」とその美しい聲が尋ねた。

「七月の二日です」と笑ひながら私が答へた。そして名簿を開いて頁を繰ると、彼女は私の手をその紙の上に持つて來て名前を書かせた。

彼女はペンと名簿を取り上げた。で私はスカートの裾捲れの言で、彼女が私を離れて隣室に行つたことを知つた。不思議な繪が私の心に浮び上つた。彼女は美人であらうか？ がそれは兎に角として、彼女の身のまはりには優雅であつた。そして低い音楽的な聲から推しても、彼女は二十才かそこらの若い上品な乙女に相違なかつた。

頼りなく途方に暮れながら私は耳を澄ました。又もや希見な響きが引下げた調子で隣の部屋から響いて來た。がそれと殆ど同時に誰かしらシヨプアンの夜想曲をピアノで弾きだした。でそのために、發せられる言葉も、争論らしい其場の様子も分らなくなつて仕舞つた。

數分間の間、部屋はピアノの音で一杯になつた、その軽い繊細な技から云つて、彈手は婦人である様に思はれた。その時突然、皿の碎ける大きな音と、堅くやうな女の金切り聲が響いて來た。それに續いて、何か重い物が床の上に落ちるやうなドサリといふ音がした。

するとピアノを弾く音が止んで、と同じ瞬間に荒々しい男の叫び聲が聞えて來た——

「馬鹿！ お前は——どうして——どうして彼女を殺したんだ！」

次の瞬間、じたばた取つ組み合ふ足音と、ひつくり返されて墜れる椅子の音と、そしてハアハア忙しげに響く音と

呷く様な叫び聲とが聞えて来た。二人の人間が、必死になつて抱合つてゐるやうに思はれた。狂氣になつて抱き合ひながら、彼等は私の居る部屋に入つて来た。私はといへば、虚空を見詰めたまま、恐れ慄いて身を擡げてゐた。その男の言葉を聞いて私は眞青になつた。

何か恐ろしい悲劇が起つたのに相違なかつた。そして私の恩人である彼女が殺されたのかも知れなかつた。

他の二人の人間は誰であるかは分らないが、私のすぐ側で挑み合つた。で私は、一生懸命になつて叫ぼうとしてゐる弱い方の微な叫び聲から、強い方がその弱い方の喉元を掴んで、絞めやうとしてゐるのを、瞭然と見露はすことが出来た。

不意にドタリといふ速い鈍い音がした、間違ひもなく烈しく殴つ音であつた、とそれと續いて短い苦悶の叫び聲がした。

「あああ——あッ」と殴られた人間の聲が叫んだ。そしてその瞬間、非常な重味が臥てゐる私の上に悔力的に落ち掛つて来た。私は殆ど息が出来ない位であつた。

矢面に、私はその上に手を遣つて見た。それは人間の身體であつた。生温い血が私の指の上に流れた。その男は心臓を刺されたのである。

第三章 圓柱廊のある家

重床に耐へ兼ねて身を脱れやうとすると、死體は臥揚から下つて床の上に落ちて仕舞つた。が、恐ろしくなつて来たので、私は手を伸ばして、その生温かい身體を臥揚の下に押し遣つた。

忍び足でその分厚な敷物の上を歩いて来る物音に、私は固くなつて息を凝して横はつてゐた。その物音ははつきりと聞えて来た。そして不思議なことには、その物音は女が立つてゐる物音のやうに思はれた。何故なら、それは床の上を引摺るスカートスカートの微な縞すれの音らしく思はれたからである。私の敏い耳にはその人間が近付いて來つつあることが分つた。そして嚙くやうな息使ひから、それが殺し手であることが分つた。私までもその人間の手に斃れるのであらうか？

喚かうと思つても、その瞬間、苦悶と恐怖とのあまり、私の舌は上唇に粘り着いた。

物音がピタと止んだので、私はその人間が私のすぐ傍にゐることを知つた。私は眼をかつと見開いて、その恐ろしいものを獲つと見詰めた。私の頬の上に温い息が掛つた。でその暗殺者は私の眼を覗き込んでゐるのだと思つた。瞬間の中に、私は顔から四五寸の所まで來てゐるその物が何物であるかといふことを本能的に覺つた。

次に私の恩人である婦人の話した言葉が想ひ浮んで來た。彼女は仲間の者に私が盲目であることを誑して、そして私の頭上に何かしら持つて來て試して見る様に促したことがあつた。

その試験を今爲てゐるのである。だとすると、身を安全にするためには、尻込みしないで冷静にしてゐなくてはな

らない。私の立場は最も羨ましくない立場に相違なかつた。

暫らくの間、その暗殺者の囁いてゐる心臓は私に接近して動悸打つてゐた。それから、充分得心したらしく、その男は黙つたまゝ一語も発しない私を離れて行つた。

私が最初衝動的に考へたことは、その暗殺者を引つ捕へることであつた。が顧みると、それは唯死を堪へて過ぎなかつた。私の様な盲人に何が出来る。

私は臥たまふ耳を澄まして、その秘密を巨細漏らさず見分けやうと考へた。

左様だ、その部屋を去りつゝある人間は男ではなくて、女に相違ない、と私は考へ初めた。

では一懸、つい十五分ばかり前に、私の籠の上に冷たい同情深い手を置いて、籠を撫でて呉れた彼女と同一人であらうか？ 斯う考へて、私は啞然たらざるを得なかつた。

私は始終、暗殺した者は男であると考へてゐた。が籠の網揺れの音でそれが女であることは明瞭であつた。

耳を澄ましてゐると、部屋の扉の隙の電燈のスイッチをカチリと揺る音が聞えて來た。それから二分間もの後、重い扉が閉められた。敲槌のドシンといふ音で、私は家を出て行つた誰かの手で表口の扉が既に締められてゐたのであることを知つた。

私は籠も耳を澄ましてゐた。四邊は静かで、柱時計の音だけが死んだやうな夜の静けさを破つてゐた。さき方部屋を出て行つたあの同じ婦人が、恐ろしい犯罪の痕跡と一緒に私を籠の中に發して、電燈を消したに相違なかつた。

それから暫時の間、私は耳を澄ましたまゝであつた。が何も聞えて來なかつたので、私は自分探りになつたことを知つた。で起ち上つて、私はその伏せてゐる男の身體を模索した。手が觸れると、彼は長い溜息をもらした、私はぞつとして慄へ上つた。その男は直ぐ死にはしなかつたのである。が私がその心臓に手を宛てるや否や、鼓動は最後の激震と共にビタリと止まつて仕舞つた。

その籠付を心に描いて見たいと考へて、ソロソロと、そして細心の注意を拂ひながら、私はその死んだ男の籠の上を撫でて見た。髪は厚く生えてゐて、兩腕に分けてあつた。籠付は口髭だけ生じて刺つてゐる若い男のやうに思はれた。彼は夜會服を着てゐて、シャツには私の手に觸れたところでは、珍しい形の飾金を一つ嵌めてゐた。その圓筒状の飾金をさぐり當てて見やうとしたが駄目であつた。とその時不意に、それを取つて持つて居れば後日此の死人の何かの手探りになるかも知れないといふ考が私の心に湧いて來た。乃ち私はシャツの胸からその飾金を取つて、それを胸衣のポケットに入れて置いた。彼は又、銀の、滑らかな手觸りのする時計と、普通の馬銜鍔形の鎖とを持つてゐた。

ポケットの中には二個の金貨と數箇の銀貨とがバラバラになつて入つてゐた、が手紙も名刺入れも、何者であるかを知ることの出来る様な物は一つも無かつた。一方のポケットには小さな鉛筆の心管れがあつた。で、私はこれも同様な目的から取つて藏つて置いた。

私は六七回ばかりも彼の心臓の上に手を宛てて見た、が血がダラダラと流れてゐるばかりで、鼓動は無かつた。

私の調べたところでは、その男は廿八歳位であつた。柔かな頭髮と口髭、撫つた歯並、どちらかと言ふと角ばつた

方の頭骨、稍こけた頬。是らから推しても彼は美男子に相違なかつた。充分確めた後、私は先刻女が即座の間に殺された隣の部屋の方に手探して行つた。眞の闇である。がいつも暗い世界にばかり居るところの私にそれが何であらう。其處此處で私が隠れて轉けたところの家具は金襴で覆はれてゐた。此の私が臥てゐたところの部屋は疑ひもなく客間であつた。何故ならその部屋の廣さは普通の部屋の廣さの様ではなく、そして又私の手が觸れる物はどれもこれも立派なものばかりで、その部屋の威厳を保つてゐたからである。此の家は明かに、倫敦の西端一杯に建ち並んでゐるところの立派な別荘の一つであつた。そしてこの部屋は、私の眼には見えないのであるが、快樂と豐澤のあり方を露したものに相違なかつた。

私は遂にその隣室への入口を見付け出した、が扉には錠が下されてゐた。

行手を妨げられて私は躊躇した。最初に女が隠れたことは明かであつた。奥の部屋から聞えて来たところのその高い悶絶の叫び聲は、私の世話をして呉れた優しい美しい聲をした女の叫聲に違ひなかつた。私の想ひ起す限りでは、その致命的な打撃が初まつた時には、女はピアノを弾いてゐるらしく考へられた。そしてその叫聲とピアノの中止とは同時に起つたのであつた。

此の理論からすると、一人の女の手で二つの犯罪が行はれたのであつた。私の側に響きながら立つてゐたのは女であつた。彼女は私の眼が見えるか見えなにかを試しに切つと這つて来て、そして切つと部屋を出て行つた。私は問ひもなく、盲人のために命拾ひをしたのである。

部屋を出て行くに當つて、彼女はどんな理由でか間の扉に錠を下して、鍵を持つて行つて仕舞つた。が彼女が去つた後の暗の中には、イスメニア乳香の稀薄な匂ひが漂つてゐた。この匂ひは、冷たい掌で私の額を撫でて呉れた女と同じ匂ひであつた。それにしても、一人の女があつた即座の間に二重の罪を犯すなどは、どうしても考へられないことであつた。而も黙つたまゝで、一語も發しないで、短刀を男の心臓に突き差すなどといふことは。

再び私はその大きな立派な部屋を手探りして見た。左様してその部屋の様子詳細に記憶に留めて置きたいと考へた。

部屋には、床まで切り下げられた三つの長い窓があつた。それで見ると、その部屋は家の裏側に在るに相違なかつた。でないとする、それ等の窓は道路に臨んでゐるに相違なかつた。又部屋の片隅には臺があつて、その上には私はまだ眼の見えるずつと以前に、ピサの彫刻家の家で見たとある様な舞姫の大理石の胸像が立つてゐた。又大きな暖爐があつて、その前には足をそのまゝの虎の毛皮が敷いてあつた。が、手探りしてゐる中に手に觸れて私の指を切つた物があつた。それは鋭利な三本の短刀であつた。その短刀には十字形の欄があつた。又は薄く三角形になつて尖になるほど細くなつてゐた。形は伊太利形で、一度刺されたら致命傷を受けるといふ、中世紀の頃に用ゐられたフロオレンスの小剣のやうなものであつた。此の短刀は伊太利人がずつと以前に彫刻に用ゐるもので、今日でも、新聞紙上で報道される殺人には大抵此の短刀が用ゐられてゐた。

初め私はその短刀を自分の持物にしやうと衝動的に考へた。がもし左様すれば敵は當然私の身の上に乗つてくる

かも知れない。それでなくてさへ死人の飾籠と鉛筆の心容れをポケットに持つてゐるのであるから。と考へ直して、私はその小剣を投げ捨てた。私は尙も搜索を続けた。そして遂に出口の扉を見付け出した。

扉を開けると廊下に出て、私は耳を澄した。何の物音もしなかつた。私は咳をして見た。その咳の反響で私は廊下と階段とが大きくて広いことを知つた。とその時私の考へに浮んだことは、杖を有つてゐないことであつた。杖なしに歩くことは私には恐ろしかつた。が手探りに私は傘臺を探し當てた。そしてその中から丈夫さうな杖を抜き取つた。どう行つたら好いであらう？ まつ直に窃つゝ家に歸つて早晩夕報に出される。此の事件の發覺を待つてゐることにしやうか？ それとも出て行つて、行き當りばつたりの交番に訴へて出やうか？ 事件の中に捲き込まれるのは至極迷惑な話ではあるが、訴へて出るのが當然の義務であらう。左様すべきであると考へて、私は早速行つて一伍一什の事を陳述しやうと決心した。

表口は右手に在るのか左手に在るのか分らなかつた。が、最初右手の方に行つて見て、表口の扉が廊下の端に在ることを私は知つた。扉を開けて外に出て、そして音のしないやうにその扉を締め直すと私は寂れた街へ大跨で五歩歩んで出た。

家の前には鐵の欄干が、ついで扉の前には巨大な石造りの圓柱廊があつた。私は仔細にその欄干と圓柱廊とに關れて見た。

私は左に曲つた。そして二十歩行つた後一條の路を横切つて、本通りらしくはないが、矢の標に唯一軒を走つて

あるところの長い路に沿ふて歩いた。約十五分の間私は一人の人間にも會はなかつた。静けさを破る音と云つては、物凄く犬の啼聲と遙かの遠方から聞えてくる低い汽車の唸り聲とであつた。突然、私は曲りくねつた街の迷路の唯中に入つて来たことに氣が付いた。そしてそれから幾曲りして、私は倫敦の大脈路と稱せられる脈路の一つとおぼしい路の上に出て来た。

私は立ち停つて耳を澄した。空気がすがすがしく、黎明が接近して來つつある様に思はれた。遙かの彼方から警官の節度のある重い足音が聞えて來た。私はその方角に急いだ。數分間汗を垂して道を急いだ後、私はその重い足音の男に追い付いた。そして彼に話し掛けた――

「貴方は警官さんではないでせうか」

「左様、僕も警官だよ」と荒々しい、がそれでゐて囁しやうな聲が答へた。「君は見えないのかね」

「左様です、不仕合せなことに見えないんです」私は云つた。

「私の今居るのは何處でせう」

「南ケンシントン博物館の側に居るよ。君は何處に行かうと考へてゐるのかね」

「私は貴方に一緒に來て頂きたいのです」私は云つた。

「君と一緒に？ それは又どうして？」

「私は今まで悲しい状態の中に居たのです。」と私は口を切つた。「二人の人間が殺されたのです」

「二人の人間か？」早速興に乗つてその聲は叫んだ。

「何處でね？」

家の中ですか」と云つて私はたじたとした。現在その場所から逃れ出て來てゐながら、私はその家の外観がどんなものであつたか、又その家が何處のどうした道路の所に在るのかを知らないのだ！

「左様、二重の入り口が街中であるなんて、滅多にないことだからね、ね君。が——」と云つてその聲は躊躇した。

「おや、君の着物には血が付いてるね！ 詳しいことを聞かせ給へ。その家といふのは何處の家なのだね？」

「實を申しますと、私はうっかりしてゐました。その家から出て來て居ながら、私はその家に引返して行く道筋を知らないのです。御覽の通りに盲目だものですから、その家がどういふ外観の家であつたかも分らないのです」

「埃だらけになつてゐるところを見ると、兎に角君はその事件の近くに居たと見えるね」幾らか嫌疑を掛ける様な口もりでその聲は荒々しく云つた。何處でその事件が起つたかといふ確なことを君は知つてゐるだらう」

何かその家を探し當る目標となる様な物を記憶に止て置かなかつたといふことは、確かに私の落度と相違なかつた。が、それにしても倫敦は廣い、而も賑にゐたといへ、その人殺しの光景を目にしたことのない私に取つて、その家を探し當るといふことは到底不可能なことである。私は愚にもこれまでそれに氣が付かなかつたのだ。圓柱廊のある欄干の付いた家と云つても、倫敦の西側の外れには幾千軒あるか分らないのだ。

「いえ」と私は警官の質問に對して應へた。

「訴へて出ることに一生懸命になつてゐたものですから、その家に後で尋ねて來ても分るやうな目標をして置くことを全然忘れてゐたのです」

「成る程、僕は此の十八年の間夜職務中、色々滑稽な話も聞いたことはあるが、君のホラ話は又格別なものだね」彼は打つけに云つた。

「私のお知らせ出来るのは、その家は大きな家で、立派な家具があつて、前に圓柱廊と欄干のある家だといふことです。中央に廊下があつて、その兩側に部屋がありました」

「それは君何の扶にもならないよ」とその聲は云つた。その場所に連れて行けない位なら僕を呼び止める必要は無かつたわけだね、けれども、その着物の容子から見ると、君は喧嘩か何かしたのだね。君の着物に血が付いてゐないなら、僕はネズの緩んだ奴として君を遣り過してやり度いんだがね」

「私は發狂してはゐませんよ」私は温順しく叫んだ。「恐ろしい犯罪が犯されてゐるのです、それで私は貴方の御助力を仰いでゐるのです」

「君がその場所を云ふなら、その屋敷に行つても見なさ。が君はそれが出來ないと云ふ——では君何うすればいいと云ふんだね？」

第四章 女

「直ぐ警察に連れて行って下さい」「私は毅然として云つた。私は掛りの職神さんに陳述しなくてはなりません」「いや警察に行くまでもないことだ。何處でその事件が起つたかも知れないであらう」「その男は不軌に詰問した。報告をするのが私の義務で、その報告を隠蔽するのが警察の義務です」

「君は手に怪我をしてゐるね」彼は云つた。「どうして怪我をしたのかね？」
「過つて短刀で切つたのです」

「どんな短刀で？」

「その人殺しに使はれた短刀です」

「そしてその短刀でどうして切つたのだ」彼は警官としての態度を忘れて野卑な言葉遣ひで云つた。
「私はそれを見付け出したのです」私は答へた。

「何處で？」

「その部屋の床の上です。手探りしてゐる體の事です」
その男は疑はしげにブツブツ云つた。

私は着物の血と不確實な返答とで嫌疑が自分の身の上に乗つて來てゐることに氣付いた。

「誰が君の頭をそんなに傷つけたのだね」彼は問ふた。それに應へて、私は自分が路を過つてゐて馬車に轢かれたこと、そのために人事不省に陥つたこと、蘇生して氣が付いて見ると、一人の知らない婦人の手に看護されてゐたことを話した。

彼は私の申立てを信じないかの様に短い突慥な笑ひを洩した。

「貴方は私の云ふことを信じないのでですね。私は突然早口に云つた。警視さんのところに連れて行つて下さい。時を失してはなりません」

「宜しい」とその男は云つた。君の話は格段と變つた話だ。君は恐ろしい事件が此の邊りの家で起つたと云ひながら、その家を教へることが出来ないんだ。餘り變な話なので、僕は誰が聞いたつて仲々君の云ふことを信じはしませんと思ふよ」

「貴方が分らなくつたつて、誰か他の人が分りますよ」私はガミガミ云つた。「さあ、警察に連れて行つて下さい」その男は遊々ながら私の腕を取つた。そして私達を威い大通りを横切つて行つた。

「君はよく歩けないと見えますね」警官は早速云つた。

「ホラ、向ふの方に馬車がある。乗つては何うです」

「どうですか 呼んで下さい」あの恐ろしい夜の悲劇の後で臨り切つてゐるので、私は云つた。

数分間の後、二人は車上の人となつた。そして彼が指定したところの、暗黒大警官の警察といふのに向けて馬車を降つた。

途上、私は思ひ起せるだけの事實を彼に説明して聞かせた。彼は注意深く私の不思議な物語に耳を澄ました。で私とその話を結んで仕舞ふと彼は云つた――

「不思議な事件だと云へば不思議な事件ですね、僕は何も聞いたつて本統だとは信じまいと思ふ。もしも僕が貴方の立場に居るなら、紳士的相當の處置を取るべきだと思ふのですがね」

「といふと何ういふ處置をです？」

「もう、僕なら自分一個の胸に止めて置いて、その犯罪の發覺を機會に任せます。」

「が私としてはその警廳の場所に住たのですから、報告せずには居られません」私は云つた。

「それが法律を認めてゐる私の義務なのですから」

「勿論、それは至極立派な考へです。僕も貴方が市民としての義務を自覺してゐて、警廳に陳述しやうとして居られる心掛には賛成だ。がこれは私一個の意見でどうかとは思ふが、慎重に沈黙を守つてゐる方が馬鹿を見ないことになると思ひますね」

「貴方の被仰ることは、あからさまな話ではありません」私は微笑しながら云つた。

「いや失禮々々」とその男は半ば謝罪的に云つた。「僕は貴方の考へに反對してゐるわけではないので、唯僕なら左様し

たいといふことを云つただけです。實際、貴方が警事供に何か價値のある報告をすることが出来るなら陳述した理由も立つのですが、出来ないとする、貴方の身の上に厄介なことが纏れて来るわけですからね」

「が君、僕としてあんな恐ろしい事件を承知して、それを黙つてゐて見ず見ず暗殺者を取り遣して仕舞ふなんて、逆も考へられませんか？」

「どちらみちその殺した奴は逃げてゐます」その男は笑つた。その時馬車が止まつたので私は降りた。二人が警察の石段を上ると同時に、馬車の引違して行く音が聞えて来た。その時私の胸を打つた一事があつた。それは妙なことは、四邊の空気がテレビン油に似た強烈な臭で一杯になつてゐることであつた。

「貴方の交番から隠分ありますね」私は云つた。

「え、が慣れてゐるので案外平氣ですよ」

「でこれが大警官の警察ですか？」

「左様です」私を伴つて長い通路を行きながら彼は應へた。その廊下は暗くばかり長かつた。で私は串刺半分彼に云つた――

「貴方は留置部屋に連れて行つてゐるのではないでせうね」

「まさか」彼は笑つた。そして二つの階段を昇つて、私は暗い廊下の端に思はれる所に――警官の詰所に入つて行つた。

食事を進めるやうな重苦しい音が聞えて来た。突然粗野な聲が訊いた――

「うむ、四百六十八號、これは何だ？」

「警視殿――事件を御報告申上げ度いのですが、この男は盲目でございます」

「椅子を持って来い」警視の聲が横柄げに云つた、私を案内した男が椅子を持って来て掛けさせた。

「貴方が當番の警視さんでございますね？」

「左様です、僕が當番の警視です。貴方の御住所と御姓名とは？」

私がそれを云ふと、羽筆のカサカサ云ふ音がし出した。で私は私の陳述を書き留めてゐるのだと思つた。

「借て」と彼は遂に訊問の口を切つた。どうかどしどし話を進めて下さい。時間が制限されてゐますから。その事件の性質といふのは？」

「私は昨晚二度も人殺のあつた家に居ました」私は云つた。

「何處ですか？」

「さあ！それが私には運悪く分らないのです。何しろ盲目なものですから、その家がどんな家であつたか知ることが出来なかつたのです。又早急切つてゐたものですから、何か目標になるやうなことも爲て来なかつたのです」

「残らずの事實を訊かして下さい」と警視が云つた。

「變性になつたのは誰ですか？」

「女と男とです」

「若いのですか老つてゐるのですか？」

「私の判断したところでは二人とも若いのです。兎に角、私はその男の體を調べて見ました。そして二十八歳位だと思ひました」

「此の方は何處の街でその悲劇が起つたか御存じないのです？」と警官が相槌を打つた。「博物館の側で私と出會したのです。此の方の着物はいまだに血で濡れてゐます。」

「此の人は頭に傷を受けてゐる」と警視が云つた。

「私は馬車に轢き倒されて人事不省に陥つたのです」と私は説明した。「で氣が付いて見ると變な家の中にゐました」

「貴方は盗られはしなかつたのですか？」

ポケットを搜つて見たが、何も失なつた物はなかつた。私は金貨が一枚とバラバラの銀貨が少しあつたことを思ひ出した。が是れは依然としてポケットの中に残つてゐた。指が飾物と鉛筆の心入れとに觸れた。でそれを警視に渡したものだらうか何うしたものだらうかと躊躇したが、次の瞬間、嫌疑が掛つては大變だ、と私の頭腦に閃くものがある。それを思ひ止まつた。又これを持つてゐれば、殺された男の何かの手掛りになるかも知れないと考へた。

で、私とその悲劇の有様を逐一説明し、警視が私の陳述の一言毎を非常な注意を以て書留めると、彼は云つた――

「その男と女とは何かの謀計の犠牲になつて斃れた様に考へられますね。貴方は始終がヒソヒソ聲の中に行はれたと

被仰る、又女の金切り騒ぎを擧げたのと、どうしてお前は彼女を殺したんだ」といふ男の叫聲とを聞いたと被仰る。すると貴方はその男が何者であるかお心當りはないのですかね？」

「少しも見當がつかないのです」私は答へた。

「その後で心臓を突き刺された男の様子の外には、てんで見當がつかないのです」

「成程、が、貴方は最初の犯罪の時に恐怖の叫聲を擧げた男が第二回目の犯罪の犠牲となつて斃れたのだとはお考へになりませんか？」

「あゝ！ それには氣が付きませんでした。全く無意味な左様ですね、左様らしいですね」

「確かに。第二回目の犯罪は的然初めの犯罪を隠蔽するために犯されたものです」と

「すると、私を見通したのが變になりますね」

「それには何か動機があると信じます。それは後になれば明かされます」

「倫敦警視廳偵探と連絡が取れてゐるやうに考へますが」と私は云つた。

「多分左様でせう、が多分左様でもないでせう」と警視は曖昧に答へた。「無論此の事件は何處までも調べなければなりません。何か探偵の參考になることはありませんか。貴方は誰か女の人が親切にして呉れたと被仰るが、その婦人の容貌身装に就いて何か御心當りのことはないですか？」

「何も」私は答へた。「唯一事私の知つてゐますのは、その婦人は夜會服を着てゐたといふことです、そして手頭」

「亞弗利加土着の婦人が着てゐる様な、一種非常に軽やかな、腰のある針金で出来た奇妙な環飾を嵌めてゐたといふことです」

「えー！ どうして——そんな答が！」と警視は噁いで云つた。私は驚いた。がすぐ又彼は沈着な態度に返つて、それだけでは餘りに漠然としてゐて何の手掛りにもなりさうにないと云つた。けれども思はず彼の口を洩れたその唐突な叫び聲で、私は私の言葉が何か秘密な手掛りを彼に與へたのに相違ないと考へた。

「此の他に、もつと何か御承知のことばありませんか？」

「何もありません」と私は應へた。

暫時沈黙が続いた。彼は羽筆でカサカサと大急ぎで書き續けてゐた。

「どうか御報告に署名をお願いします」で私は警官の持つて来た大板の用紙にペンで名前を記した。「宜しい」と満足さうに呟いて、警視は云つた。「ではこれで、ヒートンさんお歸りを願ふことにします。御苦勞様でした」

もし何かこの事件に就いて發見したことがあつたら知らせて呉れるやうにと彼と約束した後、私は別れを告げた。そして警官に付けられて再び長い通路に出て來た。

五六歩とも歩かない中に私は數人の人脚が私の傍らにゐることを本能的に知つた、すると次の瞬間、私の兩の腕と脚とは、荒げなく擡られた。

「何をやるんです」と驚いて私は叫んだ。「放して下さい——」

が獲取したのもほんの一瞬間で、掴んでゐるその力は離しがたいものであつた。そして一語も言葉がなかつた。見る目は腕を縛り上げられて仕舞つた。それ等の人間が誰であるにしろ、獲てから手筈の定めてあることで、且又、私がまんまと腕に掛けられてゐたのであることは明かであつた。

最初腕に浮んだのは、拘引されてゐたのだといふ考へであつた。が数秒とも経たない中に、恐ろしい眞實が私の心に襲ひ掛つて來た。今更抵抗して見ても無駄であつた。私の手頸は鋼鐵の把手に握まれてゐた。

私の實際の立場は或る程度までは明白であつた。私が警官だと信じてゐた男は全然警官でも何でもなくて、泥鰌かさもなければ倫敦のアブレ者であつたのである。

此の畏は私のために懸けられてゐたのだ、といふ機械な疑ひが私の心に起つて來た。驚視らしく振舞つた男が事件の聞き取り書に署名させたのは、どんな理由からであるか私には分らなかつた。この人間どもは、私に永久に沈黙を守らせやうといふ意図なのであらうか？ と考へただけでも、私はゾツとせずにはゐられなかつた。

茲は何處であるかと訊いても、何の回答も無かつた。

不明瞭な耳音が四邊に聞えてゐた。で私はその中の一人の流暢なエスの音で、婦人がゐるに相違ないと考へた。私は凸凹の床を横切つて、そしてそれから長い曲りくねつた石段を歩いて行かれた。

下の方から、長い閉鎖されたまゝにしてあつた部屋での様な、濕つばい黴臭い臭がして來た。そして突然、水の漑打つ音が私の敏い耳に聞えて來た。

それと同時に、事實は明白になつて來た。私が今迄警察だとはかり信じてゐたのは、實はテームス河畔の或る家であつたのだ。猶そればかりではない、私はその流れの方へ——死の方へ降つて行きつゝあつたのだ。

再び、私は最後の努力を以て凄しく闘ひ挑んだ。が忽ち私を握へてゐる力強い手は、烈しく私を前方に突き遣つた。とその拍子に、私は何か眩むやうな高い處から落ちて行くやうな氣がした。頭がグラグラツとしたかと思ふと、既に離り切つてゐたのではあつたが、何も彼も分らなくなつて仕舞つた。

それから其後になつて、私が初めて覺えたのは、私の額の上にある冷たい同僚深い手の感じであつた。腕は明かに自由にされてゐた。で私は突差の間にその手を握んだ。それは女の手であつた。

夢を見てゐるのではあるまいか？

が左手を伸して周圍に手を遣つて見ると、私はどうやら、河の臭い泥土で蔽はれてゐる、凸凹の石の床敷の上に横たはつてゐるらしく考へられた。

右手で私は女のがつしりとした恰好のいい腕に觸つて見た。すると、熱心に探り廻つてゐる私の指に觸れたものがあつた。——驚いたことには、それは環飾であつた。

その手と云ひ、腕と云ひ環飾と云ひ、イスパニア乳香の匂いと云ひ、何も彼もが、あの悲劇のあつた家で頼りない私の世話をしてくれたところの、あの婦人のと同一であつた。

驚きのあまり、初め私は驚つたまゝで横たはつてゐた。が、驚て、私は此の場の子を説明してくれと彼女に懇願

40 した。けれども彼女は私の驚駭には口を塞いだまゝで深い瀧淵を渡らした。

第五章 無明の間

「お聞かせ下さい」と私は婦人に云つた。「一體どうしたといふのです？」

「歩けるかどうか起き上つて御覧なさい」と遂に彼女の美しい瞳が云つた。それは間違ひもなく、あの見知らない影のやうな家で話した聲に相違なかつた。

私は彼女に扶けられて離くのことでは起ち上つた。嬉しいことには私は立派に歩くことが出来た。

「天佑です」と彼女は彼女の心から何か重い物でも脱れたやうに囁いで云つた。「貴方を見付けることの出来たのは全く天佑です。潮が差して来ます。一時間半もこの儘であつたら、貴方はほんとに土左衛門になるどころでした」

「潮が」と私は繰返した。「と彼仰ると？」

「満潮のときには河水が此處の屋根まで満ちて来るのです」

「此處は何處ですか？」

その聲は、事實を打明け兼ねるやうに黙つてゐた。

「数人も此處を巡視してゐたところもある所です」と遂に彼女は説明した。

「が、私には一向に解しません」私は熱心に云つた。「始終が噂の分らぬことばかりです。警察の中に居るとばかり感じてゐると、すると私は此の不思議な彫刻に用意された畏の中へ歩んで来てゐました。一體私の敵になつてゐる人達は何者ですか？」

「お氣の毒ながら私にはそれが、へません」

「が貴女自身はその中の一人ではないでせう」

「或はその中の一人かも知れませんが」彼女は曖昧に云つた。

「どうして？」

「あゝ！ それはお尋ねになつてはいけません」

「が貴女が、あの街での出来事以來あんなに親切にして下さつた貴女が、私を見捨ててお仕舞ひになるとは」

彼女が味方であると断言しないのには、何か特別な事情があるに相違なかつた。何か非常に薄氣味の悪いものがこの事件に絡はつてゐることを私は感じた。

「私は貴方を見捨てる考へであるとは云ひませんでした。事實、私は自分一個の動機から貴方を探し當つたのです。ですが、斯うなつたからには、私は瞭然した間違ひのない約束を、貴方にして頂かなくてはなりません。」

「約束を——どんな約束をですか？」

41 彼女は暫時の沈黙の後、深い瀧淵を吐いて多少自暴氣味に云つた。

「事情を簡単に話すと斯うです」彼女は多少無愛想な調子で云つた。私は貴方を探し廻りました。そして運命の廻り合せて、貴方の見知らない敵が貴方を置いた所を見付け出しました。貴方は潮が差してくると一緒に漕ぎ出されて、海に流されて仕舞ふところだつたのです。此處から逃れる方法は、たつた一つあるにはあるのですが、それは他人には分らないことです。だから私がお助けしないなら、これまでも澤山の人が死んだ様に、貴方も葬死を遭れることは出来ませんでした。お分りになりましたか？」

「よく分りました。宛り此處は人間を鼠の様に漕ぎ出して仕舞ふ、チームス川の深奥の洞窟の所ですね」

「その通りです」と彼女は答へた。「で、貴方には契約を履行なさる心持がおありですか？」

「契約と云ひますと？ どういふ契約ですか」私は驚いて訊き返した。

「怪體な契約だとお考へになるでせう、が宛り命令的に履行して頂きます。貴方の生命をお助けするからには、絶對的命命だと考へて下さい」

「でその約束の條件と申しますのは？」私は彼女の鋭い險相に膽を潰して訊いた。

「二つの條件があります」と彼女は暫時躊躇した後云つた。「最初の條件は、どんな事であらうとも、昨夜の出来事を警察に訴へて出てはならないといふことです」

「といふところから推して見ると、人殺しを行ったのは彼女であらうか。彼女は私の額を二度も同情深く撫でられ、たあの同じ冷たい手で、人殺しをしたのであらうか？」

「でも恐ろしい罪が犯されてゐるのです。而も二度まで。どうして警察が氣付かないでませう」

「いえ、警官には一知知れない様にしてあります。私の云ふ事に最初から理解を有つて下さい。私は貴方を救ひ出したために此處まで探し當て来ました。何故なら貴方を卑怯な奸計の犠牲にはしたくなかつたからです。貴方は抵抗の出来ない頼りない盲目です、ですから石の心臓を持つた人間でない限り、貴方に同情せずにはゐられません。けれども、私が貴方を救けるとして、貴方が世間に出て警察に訴へ出るとしたら、私は恐ろしい結果を招く方法を故々自分で講ずることになるでせう」

此の一語々は、明かに彼女が有罪であることを語つてゐる。私は男を打ち懲らした後、部屋から忍び出て行つた時の彼女のスカートの裾の音を思ひ起した。

「でもし私が口を噤んでゐる、と約束しましたら」

「では今一つの條件のためにその約束を受容れることにしませう」

「でその條件と云ひますのは？」

「貴方は最初の條件を約束するのに躊躇しました。が、第一の條件と同様に第二の條件も絶對的命命です」その時私の腕の上に置いてゐる彼女の纖い手が顫へた。彼女は若いには相違ない、が美しいであらうかと私は思った。

「貴方のお言葉の様子では非常な問題のやうですが」と私は眞面目に云つた。「お話し下さい、私に履行出来る約束かどうか」

東かどうか」

44 「決して懸念ではありません」と彼女は答へた。「が少し變つた要求なので貴方は或は厭ひなされるかも知れません。けれども、私も神様の御稜威を少しは畏れてゐる女として、誓つて云ひます、それは貴方に不利益な約束ではありません」

「成程、でその意味を少し説明して有仰つて下さい」

「お扶ける代りに遵守つて頂かるといふ條件は、貴方には未知な一人の人間に力添へをして頂くことです。そのお願ひは「アー——エ——」と署名した手紙ですることにします。で貴方に約束して頂かなくてはならないのは、是のお願ひをその動機も理由も探察しないで、そのまま履行して頂くことです。その動機も理由も探察したつて到底も分りつこはありません、無駄なことです。勿論それには秘密のあることですが、その秘密の暴露する氣遣ひは決してありません。ですから、もし貴方が貴方の生命と引換にこの約束を承諾して下さいなら、どんな特別なこと不條理なことでも、手紙に書いてあることを唯盲目的に實行して下さい。御承諾になりますか」

「成程」私は驚つて云つた。實に變つた要求ですね。で私がお約束するとしたら、私の利益になるどんな保護が獲られるのですか」

「無論時としては、いやいや乍ら履行して頂かなければならないのです。が、これだけは唯かにお約束します、私が自分で貴方の保護者になりますこと、そして同時に、お話しした手紙の中の要求といふのは一つとして、法律に反したことをお犯させする様な性質のものでないといふことです」

「では、私にその厄介な通信をなさるのは貴方が自身のですか」私は驚さず云つた。

「いえ、いえ、勿論それは自然的歸結です。ですが、私が通信者になる場合は絶対にないと斷言してもよろこびます」それから附加へて云つた。

「私は唯、承諾して下さいさるかどうかと訊いてゐるのです。もし承諾して下さいさるなら、今日以後二度とお目には掛れなくとも貴方のお役に立ちませう。もし又拒絶なさるなら、私はお別れを告げます、貴方の見知らない敵の設けた恐ろしい運命が効を奏するだけの話です」

「が、それでは私は弱死して仕舞ひます」私は吃驚して叫んだ。見違して下さるといふわけには行かないでせうし」

「承諾して下さいさるお考へなら」

「悪事をですか」

「いえ、善事をです」と彼女は答へた。「私の貴方に要求してゐるのは沈黙をです、次に助力をです」

「財政上の助力ですか」

「財政上とは全然關係ありません。その人間はあり餘る金を持つてゐます。必要なのは個人的熱心な助力と服従とです」

45 「が、どうして一度も見たことのない知らない人間に、心を盡めて盡すことが出来ませう」彼女の言葉が次第に秘密の色を帯びて来るので私は詰黙した。

彼女は自分に罪があるので私に沈黙を守らせようと努めてゐるのではあるまいか、彼女自身の不埒な興味から契約で私を縛り付けやうとしてゐるのではあるまいかといふすばしこひ疑ひが私の心に起つて来た。

「で私が承諾すれば、何時かは今夜の秘密が説き明されることになるでせうか」

「それは私には分かりません」彼女は曖昧に答へた。

「秘密を明さぬため貴方に沈黙を守つて頂き度いのです」

「だが聞かせて下さい」と私は臆さず云つた。

「あの家には貴女の他に何人居たのです」

「不可ません、不可ません！」と彼女は恐怖を帯ひた音調で叫んだ。何も彼も忘れて仕舞つて——何も彼も——私のやうに忘れて仕舞つて下さい。貴方に分る筈が——決して分る筈がありません——ですから、あの事件の真相を知らうとなさるのは全然無駄なことです」

「では私は貴女の人柄も知つてはいけないのでせうか」私は手を伸ばして彼女の恰好のいい肩にそれを置きながら訊いた。

「貴女の容貌の印象を心に刻み付けて置くために、貴女のお顔に觸つて見てはいけないでせうか」すると彼女は笑ひ出した。

「貴女と私との間に信頼を繋ぐためになら、貴女がお若い方であるかどうか位お知らせになつたつて好いでせう。

彼女は躊躇した。彼女の手は震へてゐた。

「私が貴女を一目も見る事の出来ないのは御承知でせう」と私は續けた。「手で觸つて見て、私は貴女のお顔の輪廓の印象を心に刻み付けて置き度いと思ふのです。そして私がどんな人と交渉してゐるかを知り度く思ふのです」

「結構です、お許しします」と遂に彼女は云つた。

乃で私は両手で彼女の顔に觸つて見た。その間、彼女は始終彫像のやうに堅くなつて、動かずに立つてゐた。

彼女の皮膚は天鵝絨のやうに柔かかつた。睫は長く、目鼻だけは堅つてゐて、浮彫りのそののやうに美しく刻まれてゐた。髪は質素に結ばれてゐて、肩には柔かい、毛の多い大きな肩掛が掛けられてゐた。まだうら若く、多くて甘一を越えてはゐなかつた。そして又、彼女は美しい容貌と異常に上品な風采との持主に相違なかつた。

口は小さく、額は僅けてゐて、がつしりとした輪廓の輝は、健康と幸福とを證つてゐた。が何か心理的な印象を得た、と考へて、両手を前後左右に注意深く動かしてゐると、急に彼女は笑ひ出した。

が又突然、彼女は傍に跳ひ退いた。

「あッ！」と一聲、彼女は狂暴な叫聲を揚げて云つた。「貴方の手には血が着いてゐます——あの男の血が！」

「すつかり忘れてゐました」私は早速謝つた。「御免下さい。私は見えないのです、で、手が汚れてゐることに気が付かずゐたのです」

「まあ、なんて恐ろしいことを」彼女は腹巻で囁きながら云つた。「貴方はその血だらけな手で、私を辱めやうと

48 でもするやうに腕を離すんです」

「どうして辱めることになるのです」私は息を吐かずに訊き返した。

が彼女の返事は無かつた。彼女は息を盡ませてゐた。で私はその沈黙と無意識な叫聲とから推して、それが彼女の言葉を裏切つてゐることを確く信じた。

その瞬間に私の心を捉へた唯一つの問題は、彼女が果して本統の下手人であるかどうかといふことであつた。

「で、藏尼の行くほど私の人脈をお譲になつたからには」と彼女は遂に口を切つた。「貴方はその条件をお受けになるでせうね」

「正直に申し上げるとお受けすることを幾分躊躇します。私は淡泊に答へた。

「と有仰つても少しも驚きはしません。抵抗の出来ない貴方に取つて、貴方の保護者となり友人とならうと志願してゐる人間と提携しなされることは厭むない事實です。」

「貴女が私と手を把り合はうと努めておいでになるのは、一體どういふ動機からなのです」私は疑念をひき出しにして云つた。

「秘密な動機から」

「云ふまでもないことでせうが、貴女自身の目的を盛えてはすか」

「大體ひです。私達のお互ひの利益のためにです。馬車にお乗れになつた時に、私一個の考へで貴女を密に連れ込ん

で置きながら、私は又貴女を危険の中に置きました。ですから、今貴女を探し出して、お扶けしやうとしてゐるのは當然なのです。が、お扶けする前に、以上の条件を守つて真く密に約束して置かないなら、私は自分の身の上に悲劇な結果を招くことになります」

「貴女は、もし私とその秘密な手帳に書いてあることを實行しても、どんな災厄も私の身の上により掛つて来る様なことはない。婦人としての名譽に掛けて奮ふと有仰いましたね」

「貴女が無益な詮議はせずに服従して下さいなればね」

暫時の間、沈黙が四邊を支配した。そしてバタリバタリと波打つ水の音のみが時々その沈黙を破つてゐた。潮は既に差して、部屋の二寸ばかりの上まで溢つてゐた。其處は非常に深い一種の地下室で、テムス河の満潮は、一人の人間が連れ出るには餘りに小さすぎる床に近い孔から入つて来て、屋根までも濡ち上つて行くのであつた。

「ああ」と彼女は遂に催促した。「貴方のお考へを有仰つて下さい、そしてすぐ、此の恐ろしい場所から連れ出さうではありませんか」

49 私には口を噤んだまゝ黙つてゐた。そして連れて命を拾はうかどうしやうかとおもひ煩つた。彼女を疑へば幾らでも疑へたはなかつた。第一警察に訴へ出てはならないといふ。殺された男の血を一目見た丈で恐ろしがつて尻込む。躊躇してゐるところを見ると彼の女は自分でも有罪を承認してゐるのではあるまいか。「貴女は私のいふことを信じないのですね」彼女は叱り付ける様に云つた。

「いえ」とは不愛相に答へた。「左ではないのです」

「貴方は少くとも流石で、隠蔽のない方です」と彼女は應へた。「ですが、この條件を承諾なさるのはお互の利益です。幾ら貴方が盲人だと云つて、死ぬるよりか生きた方が進にまします」

「で私が貴女の御希望に添はないとしたら、貴女は此の仕方ない運命から運れる機會を私から撤回なさるのですね」「撤回します」

「貴女の様ななされ方では、信條は堅げませんね」

「私は自分でもどうにも出来ない變遷に遇られてゐるのですから」彼女は瞬間悲しげな調子で答へた「貴方がもし事情を御存じなら躊躇はなさらないと考へます」

「お姓名を聞かせて下さいませんか」

「いえ、必要のないことです」

「では少くとも、お名前を聞かせて下さる位には私を信用して下さいませう」

「エドナと申します」

此時、河水は非常な勢ひで水高を増してゐた。既に陸の近くまで來てゐたので、私の兩脚は痺れてゐた。

「今となつて、何故貴方は躊躇なさるんです」彼女は騒も云つた。「有仰つて下さい、私のお願を容れると。そして直ぐ連れ出て行きませう。愚圖々々してゐる場合ではありません。貴方は始終のことを變にお考へになるでせうが、他

日その本統の理由をお承知になれば、私の今の仕方を悪くお思ひになるどころか、感謝なさるに相違ありません」

私は彼女(の)固い決心が、何か他の歌むを得ない事情に遇られてあると見て取つた。で、彼女を扶けやうと云ふ心からよりも、寧ろ自己防衛の生れながらの本能から、私は彼女にその秘密に關することを約束して仕舞つた。

又もや、彼女は私の言葉によつて重い壓迫感でも運れたかの様に深い瀧息を吐いた。それから手を握り合つて互ひの信條を誓ふと彼女は黙つたまゝ私をその地下室の反対の隅に連れて行つた。

「貴方は此の決心を決して後悔なさつてはなりません」彼女は感激にわななきながら聲を絞つて私を確めた。「決して、決して」

そして急に私の手を持上げると、それを彼女の干涸びた熱い唇に嚙く觸れた。

第六章 手と心臓と

斯うした衝動的な舉動を、彼女は恰も深く私に感謝するかの様にしたのであつた。私は驚いて身じろぎもせず立つてゐた。

がそれもほんの束の間のこと、彼女は直ぐ又私の傍を離れで行つた。

「其處に居て下さい、すぐ引還して來ます。出て行くのに仲々骨が折れるのですから」彼女の聲は、何處か屋根の方

にでも響きつて行つたらしく、私の眞上から聞えて来た。

響きを抜く音と、鐵のカンカン鳴る音とがしたかと思ふと、彼女は再び私が待つてゐる邊所に降りて来た。河水は驚くばかり水嵩を増して漲つてゐた。

「さあ、御案内します」私の腕を把つて駝の方に連れて行きながら彼女は云つた。「足を持上げて下さい、左様、そんな風に」そして彼女は、私の足を把つて荒い石駝の中の階段のやうなものの上に、と同時に、私の手を押つて石造りの駝に打込んである大きな釘の鐵片の上に置いた。

私は直様、地土から徐に身を擡げて、非常な注意を拂ひながらその駝を登り初めた。

「頭を打たない様に氣をお付けにならなくては」彼女は殆ど腕のあたりまで水につかりながら、下で響めた。「上の方に丁度出て行かれる位な小さな孔があります。」

片手を頭の上に伸ばすと、彼女の言ふ通りの四角な孔が屋根に開いてゐた。で石に纏まりながら、私はその孔を漕ぐのことに漕り抜けた。そして終に板張りの床の上に立つた。

間もなく彼女も出て来た。すると響てカンカンと鳴る鐵の音がしだした。再びその思はしい邊所の孔は閉ざされたく考へられた。

此處は一層何處なのかと訊いても、彼女は唯次のやうに答へるだけであつた――

「秘密を知らうと幾ら考へになつても、到底無益なことだと今しがたお話したばかりではありませんか。私達はお

互に信じ合はうとお約束しました。それ丈で充分です」

それから彼女は私の腕を把つて、部屋を横切り、直角になつた二本の長い通路に沿つて行つた。そして遂に海に出て来た。

私には自分が何處に居るのか確張り分らなかつた。が唯河岸の近くにあることだけは確であつた。何故ならその時蒸氣船の氣笛の音が聞えて来た。

彼女は私と腕を繋いで、スカートの濡れてゐるのも構はず、狭い幾つもの曲り角を、連れて行つた。そして私達は到頭大通りに出て来た。

響て乗合馬車の近づいて来る音が聞えてくると、彼女はそれを呼び止めた。

「ではこれでお別れです」と低い、が力の籠もつた聲で彼女は云つた。「お忘れにならないで下さい。此の事件で私達の得る利益は絶対に同等であるといふことをね。そして貴方のお受になる命令に對しては、その理由を詮議しやうなど考へないで服従して下さい。分けても警官に黙つてゐて下さい。」

「既にお約束しました」

「それから、將來どんな事が起りませうとも、今日の様に、私が貴方の保護者であるといふことをお忘れにならないで下さい。私は無理強に貴方に約束させました。何時かはお詫出来ることもあると考へてゐます」

「私は始終、私の聞くことを片つばしから拒絶した不思議なエドナのことを思ひ出してゐることです」私は笑つた。

「そして私にも、貴方のことは容易に忘れられないでせう。何も彼も貴方次第なのですから。では左様なら」

瞬間、彼女は柔かい手で私の手を握り締めた。それから彼女は私を扶けて馬車に乗せた。

「左様なら」と一瞥、そして彼女は姿を消して仕舞った。

御者に行先を告げると、私は腰を飾して深い思ひに耽った。突然、私は御者に訊けば聞かれるかも知れないといふことを思ひ付いて、馬車に乗せて呉れたのは何處であつたかと彼に聞いて見た。

「バターシーのアルバート街ですよ」

私は驚かざるを得なかつた。何故なら、私が河の向ふ側に居たなどといふことは、實に思ひも寄らないことだからである。

私は自分が盲人であることをその男に説明して、馬車に乗せて呉れた婦人がどんな婦人であつたかを話して呉れるやうに彼に頼んだ。

「宜敷うございますとも」彼は云つた。「あの御婦人は眼が灰色で髪は黒くて、素的な別嬪さんでございました」

「美人だつたつて？ エム？」

「左様でございます。これ程の別嬪を見たことはございませんよ」

私は溜息を吐いた。彼女を一目も見る事が出来ないとは、何といふ忌ましくしいことだらう。

「もつと詳しいことを聞かせて呉れ給へ。僕はこの婦人の顔付を詳しく知りたくてならないんだ」

「可愛らしい眼をしておいでよした。髪は少し亂れてはみました、黒褐色の美しい髪でした。が旦那あの容子には驚きましたよ。」

「どんな容子に？」

「まるで瀧鼠のやうで。シャツはビシヨビシヨになつてゐて、泥だらけです。でも愉快さうに微笑つておいでよしたよ。貴方にお別れになると直ぐ、他の馬車に乗つて、アルバート橋を渡つて私達の後とおいでよした。それからオクターレー街に下つてお行きになつて、其處で馬車を止めて、誰かと話しておいでよしたよ。」

「どんな人とだつたかね」

「女の方とです、が何しろ遠方のことなのでよくは見えなかつたのですが」

「僕の連のあの婦人を見て君はどう思ふね、貴婦人らしく思ふかね」

「思ひますとも、旦那と話しておいでになつたあの御様子から見ても、あれほど上品な御婦人はまづありませんね」

「何か目標になる様な特徴は何もなかつたかね。思ひ起して見て呉れ給へ」

「何もありませんね」と彼は答へた。「何しろ非常に美しい若いお方でした。私の氣の付いたのはそれだけです」

「君は今度あの婦人に會つても覚えてゐるかね」

「まづはつきりと申し上げたい位です」その男は笑つた。「あんな可愛らしい女を一目見たものなら、頭があらうと小兒が半ダースあらうと仲々忘れられるものじゃありませんや」

「君はあの婦人に全然夢つちやつたんだね」私は笑つた。「君の名前は何かといふのだい？」

「ウエスト——トム・ウエストと申します。」

「ウエストか、成程」私は名刺入れから名刺を取り出して彼に渡しながら云つた。「もし君があの婦人に會ふやうなことがあつて、あの婦人が誰であるか、どんな素性の女であるか、そして何處に住んでゐるかといふことを見付けることが出来たら、僕は君に贈物を呈しやう、廿磅の贈物を」

「廿磅の——」とその男はヒューと口を鳴らして驚返りに云つた。

「あの婦人を見付けると直ぐ僕に知らせて呉れ給へ」左様すれば君に金を渡すよ。いゝかね、此の契約を忘れないで置き給へ」

「承知しました。一つ腕に煙を掛けてやつて見ます」

「あの婦人の乗つた御者を知つてゐさへすれば、多分何か訊けるのだがね」

「私も左様考へてゐたところです」と彼は云つた。

「あの婦人を乗せて行つた男は、よくは分らないのですが、多分仲間でダウファイと呼ばれてゐる老つた奴ですよ。旦那をお送りしたら早速行つて見ませう。御者といふ奴は別な上着を着てゐると見分け難いものです。それでダウファイだつたかどうかと考へてゐるわけですが」

急勾配を下り出したので、私は馬車が既にエセックス街に来てゐることを知つた。そして數分前には、そのウエ

ストといふ男に賞金を拂つて、私は間借りをしてゐる家の階段を登つてゐた。

この男が役に立つて呉れさうなのは何よりも嬉しいことであつた。實際、驚くばかり美しい彼女を見たといふ此の男の媒介がなくては、彼女を探し出す方法は私には何も無かつた。あの男は抜け目のない慧さうな奴だ。今頃は同業者のあのダウファイといふ舊馴染の男を見付けに歸つてゐるところだらう。でもし、エドナが本統にその男の馬車に乗つたのだとすれば、何か報知のあるのも左様間のあることではあるまい。

私は斯う考へて幾度も幾度もそれに念を押して見ながら、次に又餘り留守が長引いたので、パーク婦人が何と云ふだらう、何とそれを解したものだらう、と考へながら階段を登つて行つた。そして鍵を取り出して部屋の扉を開けた。

女靴の間敷衣裳部屋に當てゝあるところの小さな控室に入つて行くと、その時私の耳に響いてくるものがあつた。何か響いてゐるやうな物音——女の叫び聲だ！

私は一步退いた。新たな秘密は私を迎へてゐた。私は硬くなつて、一語も聽し得ないで、驚いて其處につゝ立つた。

第七章 秘密は愈々加はつて来た

その聲といふのは、確かに私の不意な出現に驚いた女の聲であつた。私はつと進み出て濡い居間に入つて行

つた。

「御來客の様に考へますが」私は立止つて叫んだ。

「何方で御座いますせう？」

返事は一言も無かつた。私は女がまだ部屋の中に止つてゐることを本能的に感じた。その情いた叫聲から考へると彼女が何か秘密な目的を擧げて其處にゐるものであることは充分確かなことであつた。

「お話し下さい」と私は急立てた。御用を有仰つて下さい。此處においでになつた理由を」

それでも彼女は何とも返事をしなかつた、そして身動きもせずゐるらしかつた。

窓際立つてゐるに相違ないと考へたので、私はその方に進んで行つた。がその不思議な訪問者は、素早く身を換したかと思ふと、その温い呼吸が私の頬に感ぜられたほど、間近の傍を通り抜けて、見る見る部屋をばたきと閉めて出て行つて仕舞つた。

私は呆氣に取られて立つてゐた。女が部屋にゐたといふことは如何にしても不思議でならなかつた。パーカーが留守だといふことも疑へば疑ひの種になつた。此の不思議な女の訪問者は偽の鍵でもつて此處に入つて來たのだらうか、それとも、彼女は鼠賊の類でもあらうか？ だとすると、何か賣りにでも來たやうな風態をして階段を登つて來たものに相違ない。

兎に角、私が歸つて來やうなどいふことば彼女には豫期ないことで、でなければあんな狼狽した叫聲を無意識に

揚げる等がない。私は品物を確かめる意りで、椅子の分つた部屋を探し廻つた。が位置を轉じてゐるやうな物は何も見當らなかつた。次にパーカーを大聲で呼んで見た。が、壁障子の上の時計が忙しげに時を刻んでゐる音の他には寂然としてゐる何も聞えなかつた。

聖クレメント・デイーンの大時計が愉快さうに時を打ち初めた。數へて見ると、十一打つた——朝の十一時であつた。過去十五時間の間に何と澤山の事件が勃發したことから——而もその間に私は二度も生命を失ひかけたのだ。

椅子を投げつけて、私は泥だらけのまま、股掛椅子に沈み込んだ。打たれた頭の前が騒々しく出出して、熱が出てくる氣配さへもし出した。が、私の思想は將來のこと、あの私の保護者と不思議な縁を結んだからには、何んなことが私の身の上に通き上つて來るだらう、といふことに注がれた。誰でも、私がその瞬間にゐた特殊な情態ほどの特殊な場合に出會はした人にないであらう。私はど狐に抓されたやうな驚愕な情態に居た者はないであらう。私は二度も三度も默考に耽つた。が、その驚くべき事實の蜘蛛の巣を解くことの出來るやうなものは何も得られなかつた。

自分一個の感傷とか嗜好とかいふものは何もなしに、私はその忌まはしい仲間の手中に陥つて、そしてまだ見たこともない人間の力になることを不本意にも承諾して仕舞つたのであつた。私の頭上に落ち掛つて來たところのその不思議な壓迫は、何かの凶兆であるやうに私には思はれた。

纏ひ付いてゐるところの濡れた着物のために、寒さは骨身までも透つて來た。で、心臓にまで刺さつて來るやうに思はれるそのどす黒い恐怖を振り棄て、仕舞はうと遽に決心して、私は立ち上つて、顔を洗ひ、着物を着換へに部屋

10 に入つて行つた。

パーカーが長く歸つて来ないのは不思議であつた。彼女は煙肉を買ひか、又は私の用足しに河岸通りに出て行く他はいつも家に居た。さもなくば極秘に、寄席藝人でケンシントン通りの邊りに住んでゐる息女と、茶を飲みに出て行く位なものであつた。

襦袢を洗ひ着物を着換へて仕舞ふと、私は睡の怪我の療治に取り掛つた。そして全然満足に行く様に纏帯して仕舞つた後、私は又もや部屋を手探りし初めた。が何も彼もが監視してゐて、唯一つ頼りない私を赤ん坊の様に眺めて呉れてゐる忠實な彼女の他には、失はれてゐるものは何も無かつた。

焦々しながら、私は葉巻煙草に火を點けて纏らしながら、坐つて待つてゐた。彼女が歸つて来ても、何か延引ならぬ警所の方の用事で、出掛けたことが判明する位なものに相違なかつた。あの不思議なエドナのことか何時しか考へられて来た。彼女と約束を取交したといふことは、彼女が例へ何者であるにもせよ、輕率な愚かなことに相違なかつた。そしてその結果は何れは重大な變事の辨發に終るに相違なかつた。彼女が、私を「親だ」と信じさせ、あの私を巧妙に騙しおぼせた男と共謀してゐることは、振返つて考へて見れば見るほど、事實らしく思はれた。その男といふのは、今にして考へて見ると、あの秘密の家から引續いて私の後を踵けて来たに相違なかつた。そして私が方々ろつき廻つて、醫者方角の見當が取れなくなつた出會頭に、私の前方に現れ出て来て、私に話し掛けさせる様な仕組にしたものに相違なかつた。兎に角萬事が驚くばかり巧妙に運ばれてゐて、あらゆる預防策があつた。その爲めに

に取られてゐる。が何と云つて見ても、私が解決しやうと試みてゐるところのものは、必竟謎である。

その時、突然私の迷想を妨げたものがあつた。表の扉の鍵の音がするので、起ち上ると、パーカー婦人が驚いた顔付をして入つて来た。

「ああー」と彼女は云つた。「貴方は田舎に行つておいでになるとばかり思つてゐましたよ」

「田舎にー」と私は驚き返して云つた。「誰がさう云つたのかね」

「貴方様のお客こしになつた御婦人の方が左様有仰いました。」

「婦人が? どんな婦人が?」私は驚いて訊き返した。「パーカー、お前はまさか氣が狂つてゐるのではあるまいね」

「その御婦人の方といふのはつい一時間ばかり前においでになつて、ハムプ州の叔父の處に行つたので一週間ばかり留守にするからと私に云つてくれ、とのお使ひに來たといふことでした」

「僕は誰も使ひに寄こしはしないよ」私は事件の真相に驚いて應へた。「どんな婦人だつたかね——老つたのかそれとも若いのか?」

「中年の御婦人でした」

「立派な装をしてゐたかね」

61

「左様でした。舌つたらずな變な話し振りで、他國の人の様に思はれました。なんでもその方は、貴方様の伯母さんのお友達なので、貴方様をよく知つてゐる、伯父さんが御病氣におなりになつたので、貴方様は今朝方ハムプ州に旅

行しておいでになつたと云ひました。併し靴や他の物を取りにお歸りにならないのは怪しいと私が云ひますと、その方は、それに就いても傳言を受けて來てゐる、靴に着物を入れて、客車便でウォーターレー停車場からクライストチャーチ停車場「留置」にして送り出してくれといふ傳言があつたと云ひました」

「が、お前はその女の話を片手落ちであるとは思はないかね」

「無論私も、殊に一晚中留守ではあつたし左様考へたのですが。でその事を話しますとその方は、貴方様は私の家に訪ねておいでになつてゐる、丁度伯母さんのデュラントさんも來合はせておいでになつてゐたので、一緒に夕飯をすることになつて留つておいでになつた。ところが、飯中に貴方様の伯父さんが危篤だから、すぐ歸つて來いといふ電報が來たので、貴方様も伯母さんに隨つておいでになつた」と云ひました。でも、貴方様は頭にお怪我をなさいましたのね」

「左様だよ」と私は答へた「轉んだんだよ。でも何でも無い——僕が不注意だつたんだ」

その話といふのは少くとも巧妙を極めてゐた。その女が何者であるにしろ、彼女は私の伯父のチャールズ・デュラントを知つてゐる者に相違なかつた。而も丁度その頃、伯父は麻痺に陥んで危篤状態にあつたのだ。猶父、伯父も私の來ることを豫期して居り、私も今少し病氣が重りでもしたら會ひに行かうと考へてゐたのだ。して見ると、これだけは明白であつた、即ち私の家庭的出來事は、その不思議な行動をしてゐる人達に充分知られてゐるに相違ないといふこと。

「そんな矛盾した話を借用するなんて、ペーカー、お前は實に馬鹿だよ。お前の平生の敏捷なものにも似合はないね」
「稀すみません。でも伯父さんのお病氣が愈不可ないとなれば、貴方様がいらつしやるお意りなのはよく存じてゐたものですからね。ほんとに誰も使人をお奇麗にはならなかつたのですか」

「いや、全く誰も奇麗しはしないのだよ。これには何か陰險な仕事か伏在してゐるよ、油断しないで居てくれ」
「で貴方様はその婦人の方にはお會ひにならなかつたのですか」今度は彼女の方で驚いて尋ねた。

「いや、ちつとも、それどころかい、僕はその馬鹿げた話をお前に持つて來た女といふのは、てんで知らないんだ。何處々に住んでゐるとも云つたかね、名刺でも呉れたかね」

「いゝえ、そんな物は」

「お前は今度その女に會つても覚えてゐるかね？」

「さあ」と彼女は躊躇つて答へた。何分、白いレースのズールを纏つてゐて見分け難くしてゐたものだから」

「が、お前の處に來てそんな偽話をするなんて、何の目的があつて來たのかね？」私はペーカーの馬鹿さ加減にカーツとなつて叫んだ。

「私は存じませんです」彼女は深くその出來事を悔いてゐるやうな聲音で答へた。

「その女はどの位ゐたかね」

「五分間ばかりです。豫てデュラントさんから貴方様のお話によく承つてゐる。どうか居間にいらせて、お字の本を見

せてくれ、と云びました」

「でお前はその女に見せたのかね？」

「左様でございます」

「僕の許可なしにそんなことをする権利はお前にはないぢやないか、ペーカー」

私は怒つて云つた。「お前は随分年功も積んだ心算の出来る僕の召使です。だから少し氣を付けて呉れてもいぢやないか」

「何とも相済みません。實を申し上げますと、その女といふのは言葉遣ひの上品な職かな方だつたものですから、貴方様のお怒りになるやうなこともあるまひと存じてゐたのです」

「忘れないでてくれ。どんな人間が僕を訪ねて来て、どんな口實を設けても、僕の部屋に入れてはならないつてことをね」

「宜しうございます。あの女に貴方様のお部屋を窺はせるなんて、私が悪うございました」

「で、その女はいつ歸つて行つたんだ？」

「私が河岸通りの肉屋に燻肉を買ひに出掛けますと一緒に」

「で、それつきり會はなかつたのか？」

「歸る途中、河岸通りのアランデル街の角で、紳士風な人と歩いてゐるところに出會ひました。その女が男に何か云

つたかと思ふと、男が振向いて私をちらちら見ました」

「では僕が歸つて来た時に、此の部屋に居た女と同じ女に相違ないね」

「女が此處に？」彼女は叫んだ。

「左様だよ、僕が歸つて来た時に此處に女が居たんだ。そして泥棒のやうに逃げて行つたんだ。戸外に出てその待つてゐた男と一緒にたのに相違ないね。丁度お前の話と符合ふ」

「でもどうして入り込んだのでせう。私はいつも戸閉りには氣を付けてゐるのですが」

「多分、餘分に捲らへてゐるあの鍵でも盗んで行つたんだらう。見て御覽、釘に懸つてゐるか」

彼女は部屋を横切つて行つた、そして次の瞬間嘴く鍵に云つた――

「まあ、ございませんよ」

「嘘さうか」私は云つた。「僕が考へた通りだ！ その女がお前に話した話といふのは、部屋に入つてくる口實、あはよくば鍵を手に入れるための口實に過ぎないんだ。」

「貴方様は單の泥棒だとお考へになりますか」

その巧妙さ加減に啞然としてペーカー婦人は云つた。

「今のところは何とも分らないね。限なく探して調べて見て、それから何とでも判断を下して見ることだ」

昨夜の事件に就いては、それをペーカーに説明して聞かせる意志は全然なかつたので、乃で私は部屋に入つて行つ

26 て、涙だらけな、血痕の着いた着物を嚴重に蔵込んで、それから手探りに居間の種々な品物を探つて、紛失物の有無を調べて見た。

第八章 知らない男

この、當時流行の裝飾品である白いエールを纏つた不思議な女が訪れて来たことに就いては、それと昨夜の出来事との間には何か暗合があるに相違ないと私は確く信じた。が借て、ではそれと是れとの間にどんな確定的な關係を有してゐるかといふことになる、私は全然五里霧中に仿はざるを得なかつた。パーカーが檢べて見たところに依ると、何一つ失はれてゐるものはなかつた。先づ第一層に檢べた寫字臺の抽出しの金目な書類の中の一枚も、抜き取られてゐるものはなかつた。で私は、その闖入者が私の所有品を檢べおほせない中に、私が歸つて来たのであるといふ疑念を下した。

變な考へが私の心に起つた。その白いエールの闖入者といふのは、あの不思議なエドナ自身ではあるまひか？ 毎日に、私は自分のこの懐測が眞實であると信するやうになつた。が御者のウエストの云ふところで見ると、彼女は若くて美しかつた。然るにパーカーはその女は中年の婦人であると云つた。が私としては、御者の言葉を信ぜざるを得なかつた。彼は日中に、而も彼女がエールを纏まつてゐないところを見たのであつたから。

その女が美しい容掛のやうなもので容貌を隠してゐたといふ事實は、假粧してゐることを證明してゐた。故に、もつとそれらしく思はれるのは、その女が左様して容貌を老けて見せやうと骨折つてゐることであつた。が、孰れにしても、もしその女が本統にエドナであるとするなら、彼女が計畫を實行するのには愚圖々々してゐるやうな事のないのは確であつた。且又、彼女は私が歸宅することを充分承知してゐることも確であつた。

驚異な倫敦の、暖けつき息詰るやうな夜は絶え間なく過ぎて行つた。毎朝、私はパーカーの跡を尋りて新聞を歩讀つた。があの恐ろしい夜の犯罪を發見したらしい記事は一つもなかつた。犠牲になつたのは二人であつたらうか、それとも一人であつたのだらうか？ 私の知つてゐるのは、あの心臟を刺されて斃れた、若い好い身装をした多分紳士らしい、男の犠牲者だけであつた。死んだ様な眞夜中の響けさを破つて聞えて来た、女のあの響く様な叫び聲を、私はつい一時間前に起つたことの際に瞭然と思ひ浮べることが出来た——實際その叫び聲はいつも私に忘れられないものであつた。その叫び聲はエドナ自身の叫び聲であつたのであらうか？

頼りない私の身に見れば、唯口を噤んだまゝで、恐ろしい秘密を自分の心に秘そめてゐる他はなかつた。見えない眼で虚空を見詰めて埃だらけな部屋に唯一人坐つてゐながら、私の思想は時を経るに連れて、その恐ろしい事件に感集中されて来たした。

ディックに就いては、彼の雜誌社に聞き合せて見たところに依ると、彼はアフガニスタンの國境の附近で熱病に罹つて、臥つてゐるといふことであつた。で、まだ二三ヶ月の中に歸つて来そうにもなかつた。

最初、私は汚れた血痕のある着物を、ペーカーに感づかれない様に何う始末すべきであるかに思ひ煩つた。が遂に私の心に思ひ當るものがあつた。私は、彼の女が舞妓である娘のリリーとケンシントンを離れた遠くの街に出ていつた或る夜、その着物を包みにして、テームス河に投げ込みに出でいつた。

中暮れ後のその界限は警官が充分見張つてゐるので、至極危険な道方ではあつた。が私は立派にそれを仕終せた。それから数日後の夕べで見ると、その包みが倫敦橋の近くで水上警察官によつて発見されたといふこと、その血痕が彼等を途方に暮れさせてゐるといふこと、倫敦警視廳探偵隊がその着物の持主を捜索してゐるといふことが報道されてゐた。

幸なことに、その服の製造者の名前は切り取られてあり、ポケットの中の物は全部取り出してあるので、私は枕を高くして寝ることが出来た。そして私はその翌日の夕べを待ち受けてゐて、熱心にそれを讀んだ。するとそれには、その血痕が分析されたこと、人間の血であると判明したことが記されてあつた。

眞夜中の冒険の一週間餘り後、或る朝私は一通の書状を受取つた。で、それをペーカーに讀ませた。それにはタイプライターで「正午にアエルと署名した手紙を持つて、貴方を尋ねて行く人があります」と書いてあつた。

その訪問者といふのは、エドナからの便ひの者に相違なかつた。で私は不圖したら彼女の女自身が遣つて来るかも知れないと考へて、非常な注意を拂つて身装ひをした。が、私は失望せざるを得なかつた。何故なら、心配のあまり爪先立つたまゝ三時間あまりも持つた後に來たのは、言葉遣ひの上品な中年の男であつたからであつた。

「扉が開められて二人切りになる、彼は次の様に辯明した——

「ヒートンさん、私は私の友人である或る婦人の依頼で貴方をお訪ねして参りました」

成程「私は、私の保護者との約束を思ひ出しながら云つた。『何か私への御用を有仰りにおいでになつたやうですね。どんな御用ですか？』

「いえ」と彼は云つた。「貴方は誤解しておいでです。私が使ひに來たのは、貴方の思つておいでになるその恐ろしい病氣に就いてです」

「貴方は眼醫者さんですか」

「私は眼醫者です」

「で貴方のお名前は？」

「スレード——ゼームス・スレードです」

「で貴方は誰のお使ひでおいでになつたのですか」

「或る婦人の使者としてです」

「が、どうか話の初めに説明して聞かせて下さい、どういふ理由でその婦人が私を扶けに貴方を來させるやうになつたかの事情を」

「貴方とあの婦人とはお友達です」と彼は多少曖昧に答へた。「友人の助けの代りに私の助力を求めらるゝのは、患者に取つては何も不思議なことはありません。あの婦人は貴方に會ひに、そして貴方がお許し下さりさへ

するなら 貴方の眼を診に私を此家に寄越しました。」

私はその男の舉動を腹立たしく思つた。既に世界でも屈指の眼科醫から診察を受けて、私は自分の眼が全然絶望の他ないことを宣言されてゐた。今更此の男に鑢掛けをして貰ひ度くはなかつた。私の考へたところでは、此の男は長い鑑定書を巻かうといふ醫者に相違なかつた。

「私には何も貴方の御助力を乞ふ必要はありません」私は無愛想に答へた。「で折角診察して貰いても唯時間を潰すだけです」

「が、視力は確に神機の最も貴重な贈り物の一つですよ」その男はなだらかな愉快さうな聲で答へた。「でもし、治療できるものとしたら、貴方もそれに御賛成なさると考へますかね」

「否みはしません」と私は答へた。「視力を回復するためなら、私は自分の所有物の半を、いや全部をでも提供します。が、レオポルド卿とミーソム博士とパーカー・ハリデーの三人が診察されて、全然回復の見込みはないと言葉を一つにされました。多分貴方も、専門家としてのあのお方達を御存じと思ひます」

「存じてゐます。あの方達は私が救はつた最初の人でした」私は答へた。「ですが、一つの手術が失敗しても、他のも一つの手術が成功するといふことは往々にしてあります。私のはあの方達とは全然異つてゐます。そして斷言しますが、絶望を宣告された病狀にでも成功した事は、これまでも度々ありました」

「醫者めが、と私は思つた。此の男の語氣は何故となく私に偏見を懷かせた。

「では貴方は、本統に私を治すことが出来るとお考へですか」私は冷笑を露骨に無愛想に云つた。

「唯私は手術して見て下さいとお願ひしてゐるのです」

「赤地に申し上げると」私は答へた。「貴方に診察して驚き度くも驚かうとも思はないのです。私の病狀は既に三人の偉い事問家に絶望を宣告されて、私もその診察を満足に思つてゐるのですから」

「眼科醫だとして、誤つた診察をしないとは限りませんよ」彼は云つた。「眼が見えないといふことは、人間の苦しみの中でも最も恐ろしいものゝ一つです。眼が見えなくては、此の世に生き永らへる甲斐もありません」

「そりやあ、私だとして視力を取戻し度いとは思ひます、が幾度も云ひます様に、私はもう新たな手術は信用しないのです」

「貴方の御意見も充分御尤もなことであります。眼科醫として第一流の人々から不治の宣告をお受けになつた事實がおありになるとすれば」彼は答へた。「が兎に角、診させて下さいませんでせうか。無論、診察しないでゐる眼疾のあるやうなことは申し上げられませんがね。貴方は私を野郎だと考へておいでになるやうですね。宜敷うございませうとも、今の中なら左様見られても満足です」そして彼は愉快さうに笑つた。

さも自信ありげな彼の言葉を聞いてゐる中に、白狀すると、私の最初の考へは次第にくらつき出した。

「恐ろしいのでを願へませんでせうか」彼は私に返すを尋ねる聲も興へないで云つた。私は彼の態度に従つた。

それから、彼は指で私の眼を大きく開いて、そして眼科用の鏡で私の眼を覗き込んでるらしく思はれた。彼は最初

右方の眼を診て、それから左方の眼を開いて注意深く診た。そして眼球の表面に觸つて見た。

「矢張り私が考へた通りだ！ 診察を終つた時は彼は叫んだ。『私が考へた通りだ！ 極端い手術が必要なものですよ。貴方のお侍頼りになつた三人の醫者といふのは診察を誤つてゐたのです。三人とも陥り易い誤謬に陥つてゐたのです。貴方はそのために一生盲目でおいでになるところでしたよ』」

「何んですつて！」私は叫んだ。貴方は奇蹟を行ふことが出来ると思ふのですね——視力を取戻すことが出来るなど？」

「極端い手術をお受けになれば」彼は落付擲つて云つた。『そしてそのあと二週間も治療なされば、再び世の中を御覽になることが出来る様になると云つてゐるのですがね』

彼の言葉は、長い間纏て人生の快樂から閉出しを喰はされてゐるところの私に取つて、確に雷電の霹靂であつた。

此の見知らない男が、新しい存在を、光りと運動と色彩の世界を約束して呉れるとは、何んと思ひ掛けないことであつたらう！

「貴方のお言葉を聞いて私は非常に興味を覺られました。私は云つた。何時手術をして下さるのですか？」

「御都合が好ければ明日にでも」

「痛いんでせうか？」

「大したことはありません、少しビロビロと痛む位なものです」

が、それにしても私は知らない男を信じ兼ねたので、出来るだけ丁寧とその旨を告げると、彼は唯太のやうに云ふだけであつた——

「私は、貴方も御承知のエドナといふ婦人の使者で来たのです。貴方は助力を申し出てゐるその婦人を信用なさらないのですか？」

「それは信用してゐるにはしてゐます」

「その婦人は私に云ひました、貴方は自分の希望なら容れて呉れることになつてゐるつて。私が貴方の眼を恢復しやうといふ目的でお訪ねしたのは、その婦人の切實に從つてなのです」

「私が貴方の試験に従ふやうに、その婦人が希望しましたと？」

「試験にではないのです。彼は云つた『貴方が私の治療をお受けになることを欲つてゐるのです。』」

私は猶も躊躇した。が、此の男は「アエル」と署名された不思議な手紙の前觸れで、エドナからの使者として來てゐるのであつた。且又、私の視力を取り返したいといふのが彼女の希望であれば、彼女を見付け出して、その歸を心ゆくまで監視のたいといふのが私の願望であつた。

「貴方のお名前が『醫師殿』の中に見出されさへするなら、手術を受けることにしませう」私は遂に云つた。

「お探しになつても無駄でせう」

「では貴方のお名前は假名ですか？」

「私は極小規模に營業してゐます。で登録する必要が無いものですから」

その言葉を聞いて、又もや私は彼が單なる醫者であることを確く信じた。私は彼の言葉を追跡した。彼は明かに狼狽の氣色を見せた。

「既にお話しました様に」私は幾分言葉を和げて云つた。「お勤めして頂くのは無益なことです。醫者でもない人に眼を弄られることはお断りします」

彼は傲慢らしく笑つた。

「貴方は現在のままで苦しんでおいでになりたいのですか」

「左様です」私は囁く様に云つた。

「では貴方は、最後の手段を私に取らせやうとなさるのですね」彼は毅然として云つた。

「私は貴方にお贈りする物を持つてゐます」

そして次の瞬間、彼は一枚の紙を手に握らされた。どんな紙であるか、何が書いてあるかは元より分らないが、私は彼の聲音で、彼が凱歌を擧げてゐることを本能的に覺つた。

第九章 暗黒の世界から光明の世界へ

「私には何なのかつとも分りませんよ」紙片を握りながら私は驚感して云つた。

「では讀んで聞かせてあげませう」彼は私の手からその紙片を取つて文面を讀み擧げた。疑念はしく思はれるので、私はその紙片を囊所に持つて行つてパーカーに讀ませた。がパーカーも同じ言葉を繰返すに過ぎなかつた。その文面といふのは斯うであつた――

「ウキルフォード・ヒートンさん、貴方への第一回のお贈りといふのは、スレイド醫師の云ふことを疑らず信用して下さること、そして體力を取返してお頂きになることです。命令通りにして下さいアメル」

要件を述べた丈の至極簡單な文句で、最初の手紙同様、書方の分らないやうにタイプライターで書いてあつた。あの約束をエドナと取り換した當時、私は九死一生の立場にゐた。が借て、今斯うして自分の家に安全で在つて見れば、そんな知りもしない人間の命令に服従する氣にはどうしてもなれなかつた。第一彼女の命令のまゝに、私はどんな罪惡を犯させられないとも限らなかつた。又どんな秘密結社と餘餘なく手を取られないとも限らなかつた。

が茲に唯一つ、私の心を離れない願望があつた。といふのは、私の保護者であると同時に私の捕獲者であつたところの音樂的な聲をしたあの女を、何うにかして見たいと云ふ考へであつた。瞬間、私はその醫者の言葉に同意しやうかと考へた。

突然私の眼に奇蹟を行つてやるなど云つて遣つて来たこの何の職もない男に、私は何等値を掛いてゐない。のみならず、醫者で山師だとも思つてゐる。けれども、此れ以上の盲目とされる氣遣ひは更々ない、して見ると多少の利目でもあれば明かに私の得である。

で、斯う考へて、私は避くながら明朝手術を受けることにしやうと彼に約束した。

「立派な御決心です」と彼は答へた。「視力を回復なさるためには、管らない偏見などお捨になるのが當然ですからね。明日の正午、御都合は如何でせう？」

「何時でも結構です」

「では正午といふことにしませう。十一時半までには助手を連れてお伺します」

「此方で貴方の手術室の方に伺たいと思ふのですが」左隣すれば此の男の住所が分る、と考へながら私は云つた。住所が分れば本名も容易に分るだらう。

「それは遺憾ながら不可能なことでして」彼は感嘆に答へた。「私はホテルに滞在してゐるのです。倫敦では隠れてゐるのです。」

彼は始終巧妙な遁辭を用意してゐるやうに思はれた。間もなく彼は別れを告げて歸つた。

その翌日、彼は約束の時間よりも少し遅れて。若い悲し相な態を出す男を伴れて遣つて来た。そして丹念に手術の用意をした後、私を大股椅子に掛けさせた。患部に麻酔薬を塗り初めた瞬間、私は彼に懐いてゐた偏見が頓挫である。

つたことを覺つた。彼は單に醫者でなけりなく、その手並は、黙然としてゐて、注意周到で、信を措くに足るものがあつた。

が、それから彼の手術が如何にして行はれたかを茲に説明して見ても、醫者以外の者には何等興味のないことである。で茲には、その手術がその後一時間ばかりも續いたことを述べるだけにして、併て手術が終ると、彼は私の眼を丹念に観察して歸つて行つた。それからスレドは毎日正午には私を訪れて来て、繃帯を丹念にし替へた。そしてその度毎に快癒の迅速なのに満足の言葉を洩らすと同時に、太陽の光線を一條でも入れてはいけない、日覆ひをしっかりと閉めて、部屋の外に出で行つてはならないと注意するのであつた。

斯うしてエニス日覆ひ窓を覆ひ、その上にカーテンを張り渡して、凡そ三週間餘りも私は居間の中で暮した。夏の熱氣は息苦しかった。膝に手を置いたまま、来る日も来る日も、手術の効果を危みながら坐つてゐた。世界でも指折りのあの有名な眼科醫達に絶望を宣言されてゐるこの眼が、果して二度と見ることが出来る感になるであらうか？ 私はどうしてもそれに期待を掛ける氣にはなれなかつた。で、あの不思議な見知らない通信者の命令を履行したと云ふことをせめてもの慰めに思つた。

が、遂に——日覆ひのこともあつたが——スレドがやつて来て、何時もの様に繃帯を取はずと、彼は私の眼をアトロピアの溶解液で洗つた。それから、注意深く試験した後、彼は窓際に行つてカーテンを引き、ダニスの日覆ひを少しばかり開けた。

瞬間、私は歡喜の叫び聲を揚げた。

私の視力は回復してゐたのだ。私は實際に見ることが出来たのだ！

私と微かな光線との間に朦朧として見えるものは間違ひもなく、彼スレードの短い姿であつた。

「見えます！」と私は亢奮して叫んだ。『その、其處に、貴方が——日の光りが——日覆が』

すると、私のお話したことが眞實であつたといふことを承認なさる譯ですね——貴方の病状は回復の見込みのないものではないと云つたのが嘘言ではなかつたといふことを承認なさる譯ですね——貴方の病状は回復の見込みのないものではないと云つたのが嘘言ではなかつたといふことをね？」

「確に、貴方の有仰つたことは眞實でした。でもあの時には、そんな事がある譯のものではないと考へたのです。が、今となつて見れば、貴方は立派にその言葉を證據なさいました。もしお氣に逆ふ様なことを申し上げてゐるのでしたら、どうぞお免し下さい。」

「いや、なに、ちつとも」彼は愉快さうに答へた。「何よりも御辛抱が肝腎です。いま四五日暗い所で我慢なされば程度全快しますよ。無論、一度に拭つた様には参りませんが、日を追ふて視力が速くなつて來ます」斯う云つて彼は日覆を閉ぢ窓掛を索いた。私の胸は感謝の念に溢れた。幻影ではない！一つの動かすべからざる事實として、私は確に日覆と短いがツシリした彼の影法師との間に鑑に差し込んでゐるところの、太陽の光りを見たのだ。私は暗い中で彼の手を把つてゐた。

「どうして貴方に御禮したものでせう。お陰で、新しい生涯を初めることが出來ます」

「御禮などは何も要りませんよ、ヒートンさん」彼は飄然に答へた。「私の治療は成功しました。そして友人の一人の視力を取り返すことが出來ました。それで充分です」

「が、唯一つお訊きたいのは」私は云つた。

「貴方があの手紙を持つて突然御訪ね下つたことに就いては、私は非常に感激いたしました。貴方はエドナといふ婦人を少しも御存じないのですか」

「知つてゐます——それだけの話です」

「あの婦人は何處に住んでゐるのです」

「お氣の毒ながらお答へは出來ません」

「では口止めされておいでになるのですか」

「左様云へば左様云つたものではね」

「これは不思議だ」と私は叫んだ。「實に不思議だ！」

「貴方の視力が回復したほどに不思議ぢやありませんよ」と彼は云つた。「安眠にしてゐらっしゃい。そして何でも考へることをしないでください。今の場合、安眠が一番必要なことですから」

それから私の視力は一日と回復して來た。これは私に取つて實に驚異すべき事であつた。このスレードといふ男が何者であるにもせよ、私は彼に感謝の心を捧げずにはゐられなかつた。もしもあの瞬間に、スレードの影法師を

その向ふの日光を見ることが出来なかつたとしたなら……。彼の治療が何の効も奏しなかつたとしたら……。』
 まる一ヶ月の間、毎日正午になるとスレードは几帳面に訪れて来た。そして彼の云ふ通り、私の視力は、極少し症ではあつたが、日増しに増進して来た。そして遂には、埃だらけな眼鏡を掛けて見ても、殆ど眩暈にすることが出来るやうになつた。

それから二三日すると、スレードは働き消す様に姿を消して仕舞つた。

九月になると世界は晴れやかに明るくなつて来た。私は人生に對する新しい興味を抱いて毎日出かけて行くのであつた。時々、リッチモンドやハンプトン・コートに小散歩を試みて、緑色の木々や曲折した川や、野原につくづくと眺め入ることもあつた。又ブライトンに一日を過ごして、岸邊に打寄せ、巻き返す波を二時間餘りも見詰めることもあつた。六週間前には希望を失つた悲觀主義者であつたのに、今では心身とも強壯で健全な男になつてゐた。何處に行かうと何をしやうと自由であつた。

何んと不思議に思はれたことであらう？ 私は道を行きながらも殆ど一足毎と云つてもいい位に、小兒の様に驚異の眼を見張りながら、灰色の眼鏡を通して世の中をのぞいて見るのであつた。總てのものが私には新しく思はれた。私の頭腦は小兒のそのやうに新しい印象を生々しく考へて満たされた。あの鈍い色彩のない、音響と觸覚の存在の後、この明るい運動の世界がどんな歡喜を以て私を満たしたか、それは到底筆に盡すことは出来ない。けれども、是等の歡喜にも拘らず、こゝに唯一つ私の心を覆ふところの暗い影があつた。それはあの恐ろしい夜の

物凄悲劇の思ひ出であつた。そもエドナとは誰のことだらう？ 彼女は一體何者なのだらう。彼の助力によつて

視力を取返すことが出来た今も、彼女が何者であるかといふこと、又彼女が何處に住んでゐるかといふことは私には依然として不昧の謎であつた。彼女は全く不昧な動物から、私の爲に助力を申し出で、先づ第一にあの不埒な暗殺者の手から私の生命を救ひ、第二には視力を回復してくれたのであつた。

私は彼女に會ひたい、そしてあの手を握りたい、そして彼女に感謝したいとし切りに考へ初めた。私は彼女に會ひ度くてならなかつた。

第十章 青衣の乙女

總ての希望を打棄てた人と雖も、絶えず恐怖に襲はれるものである。人生の歡喜が再び立ち戻つて来たにも拘らず、私は絶えず眼前の恐怖に——あの見知らない私の行爲の指揮者に依つて、何時如何なる命令が投げ付けられるかも分らないといふ恐怖に襲はれてゐた。

少くとも私の様な異常な境遇に遭遇する人は稀であらう。新生活に奪はれてゐる注意が少しでも亂れれば悪魔はそれに乘じて絶えず襲ひ掛つて來やうと身構へてゐた。

全然覺すところを知らなかつたあの瞬間、秘密を隠してゐやうなと約束したことを、私は幾度後悔して見たら

う。あの警官だとばかり信じてゐた男に欺かれたこと、狡猾にも知つてゐるあり方のことを私の口から吐かせるために思慮深い策略を用ゐたこと、續いて冷静なエドナが私に對して取つた舉動、是等のことを精細に考へ合せて見る時私の心は錯亂した。彼女が、あの若い男の殺人に於いて高潮に達した何かの陰謀に深い關係を有つてゐること、又あの恐ろしい事實を陰謀しやうとするので見ると、其處に彼女自身の何か重大な動機が介在してゐるに相違ないといふこと、これ以外、その非常な問題の解決は私にはどうしても得られなかつた。

知人の多くがムーアランドに出掛けた十日半の或る晩のこと、私はコーンウォール園内に居るチャンニンク家から夕飯の招待を受けた。近衛の退職士官であるチャンニンク大佐は、私とは長年の知人であつた。彼はこれまで主として外交的性質の職を奉じて來た。といふわけは、彼は英國大使館附陸軍武官としてベルリンとウキennaに居たことがあつた。で今では、妻と娘と共に倫敦に棲んで、主に聖ゼームス俱樂部とニューナイテッド・サーグイス俱樂部とを往來して毎日を過ごしてゐた。彼は白髪白髭の血色のいゝ露付をした愉快な老人で、陸軍武官の伊達な様子は今も彼の身邊に残つてゐた。

その日彼は一眼鏡を掛け、食卓用のツヤケツの襟にイタリー王冠章の緑色の紐を結んで、陸軍武官然とした様子をしてテーブルについた。彼の妻は五十格髯のどちらか云へば整形な女で、黒髪子と黒髭巻で身を飾つてゐた。そして長い間外交官の要達と交際して來たせいでもあらうか、多少他人行儀に堅くなつてゐた。ネリー・チャンニンクは又、幸福さうな美しい髪をした娘であつた。

ネリーと私とは以前からの仲好しの友達であつた。兩親が外歐に行つてゐる間、彼女は英國で學校に通つてゐた。が、學業を終へると彼女はウキennaに行つて、其處に五年餘りも住んでゐた。桃色の外衣を着て薄化粧をしたその日の彼女の姿は可哀らしかつた。彼女は私の左側に腰を掛けた。

が、ネリーの美しい姿も、私の右隣に坐つてゐるアンソンと呼ばれる少女の姿に較べると、月の前の星であつた。彼女はすらりとして丈が高く、髪は黒く、靑い服を着てゐた。母のアンソンは物靜かな白髪の老婦人で、私の他のこの印の客人と云つては、このアンソン嬢だけであつた。紹介された最初の瞬間、私はそのアンソン婦人の娘といふのが素晴らしい容貌の持主であることを知つた。顔の形はどちらかと云ふと隋圓形で、眼は圓で美しく輝いてゐた。血色は秀でてゐて、頬は品よく櫻取られ、口は小さく優雅で、齒は白く、鼻は形よく隆起してゐて、婀娜な心持を容貌に添へるに丁度充分な位の尖端が曲つてゐた。

彼女は又立派な服装をしてゐた。がそれで居て裝飾やスタイルに餘計な誇張がなく、第一流の仕立屋の手に成つたものであることを暗黙のうちに認つてゐた。とるこ玉は彼女の頬金を思はせるやうな美しさに好く似合つた。頸の周圍には金鎖が吊つてゐて、その鎖には金剛石の嵌めてある薄い金の指環が連かつて眩いばかりの光りを放つてゐた。それが彼女の身邊での唯一の裝飾品であつた。彼女は一本の指環も嵌めてゐなかつた。その白い靱やかな手には一つの寶石もなかつた。

アンソン老夫人は私に向ひ合つて腰を掛け、食事中愉快さうに喋り續けた。唯々彼女の娘は腰向いて、ナラリと美

しい眼で私の眼を見、そして私達の會話に加はつて來た。彼女が愉快で博識であることは、その時私達が語つてゐた最近の劇の間に、簡潔で敏捷な批評を下したことでも知れた。彼女は驚く可き繁殖を以て、フランス劇の成功を世間に遣つてゐる人でなくては知らない様を或るフランスの戯曲にその問題を譬へて論じた。又彼女の舞臺装束に關する言説は彼女が女優であることを私に疑はせたほどであつた。

私は彼女の傍らに坐りながら殆ど驚嘆の聲を擧げないばかりであつた。これまで、これほど完全な女性的優雅と麗くべき美の化身を眼にしたことがなかつた。嘗て此の瞬間まで、婦人の體をこれほどまでに感嘆と見詰めたことはなかつた。

話題は忽ち最近發表された或る婚約のことに轉じた。すると大佐は、例もの快活な無職者な遣方で、大抵の處女が社會的地位を修飾したいといふ考へで結婚してゐる、といふ彼の意見を提出した。

「良人の財産なんて實際」彼女一流の取り濟ましたものゝ云ひ振りで彼の妻は云つた「野心だとか、慾斷力だとか、勉たとか——これが畢り財産なわけのものです、斯ういふ性質のものほどに女に取つて大切なものではありませんよ——そして地位など、男は獲やうと思へば自分で獲られますよ」

「では教育といふ點では如何でせう」明かに此の論争に興味を持つたらしく、アンソン嬢は優しく訊いた。

「教育といふ點では、良人は妻と同等であるべきですね」チャンニン夫人は答へた。

「良人に必要なのは立派な氣質——といふことではないのかね？ この點、一つの御意見を承らうぢやないか」大

な飾架の陰から茶化したが大佐は云つた。

瞬間、アンソンの眼と私の眼は出會つた。すると彼女は長い睫を垂れて目蓋を俯せて仕舞つた。

「女が眞面目に自分の將來の良人を考へるのに、先づ第一に着眼點を置くのは立派な氣質といふことではなくて、夫人は音樂的な美しい聲で云つた。寧ろ重入らしい容子だとか、涼しい眼付だとか、上品な體態だとかいふことにだと思ひますね」

「ああ、それには賛成できませんね」私は微笑ながら云つた「私には斯う思はれます、結婚して一年も経つたら、お互の癖などのことは減多に考へるものではない、何故ならいつも二人で體を突き合はしてゐるのですから。體が古典的であるとか醜いとかいふことにはお互に無頓着になつて仕舞ひます、が互の氣性と不足とかは認識せられないでゐるわけがありません。」

「貴方のお話は實際の經驗からのやうですね」彼女は論争を避けて斯う云つて笑つた。すると皆が此の彼女の冗談口に同じて笑ひ出した。

「いえ」とネリーは私の樞手になつて云つた。

「ヒートンさんは頑固な癡身主義者なんです。實際は女厭ひなのです。」

「たゝに」私は云つた「女厭ひなものです、それどころではない女性主義者ですよ」

「ヒートン君の考へは半分白くなりかゝつてゐましたね」陽氣な顔で大佐は云つた。

「行かせ給へよ、君、僕等は皆識識してゐますよ」
 「いえ」と私は云つた。「僕は全く無理にこの論争に割り込んで入つて来たのです。だから温順しく黙つてゐることにします」

「ヒートンさんは外交に長けておいでになるのですわ」隣席の美しい處女は笑つた。

「諷刺の理由を明かにして置いて、そして氣高い態度をお取りになるのですもの」彼女は私を振り向いて嗜れやかにほゝ笑み掛けた。

彼女は何だか可愛らしかつた。無駄口を叩きながら時々凝視する私の眼に、彼女は美しいうら若い精靈のやうに繊細な女性の繪を——古羅馬の貴族の姿を思ひ起させた。彼女の動作には、他の女達に見るやうな無理なところ、不自然なところは少しもなかつた。商人や貴族の娘達に通有な、街つた態度や俗語めいた話振りは少しもなかつた。

その受ける印象からすると、忍従と自制の教育を受けて来た人の體に思はれた。憂鬱な美は彼女の心の鬱刺とした生氣を押し鎮めてゐた。彼女の精神は超然として、智力に於ても、道義的教養に於ても——實際すべての點に於いて、私を後輩者として見下してゐた。紹介された最初の瞬間から、彼女の魅力は私の心を捉へて離れなかつた。

女達中が去つて、大佐と二人切りになつた時、りきゆう酒を片手に、タバコを煙しながら、私は彼女の身の上を尋ねた。

「アンソン夫人といふのはアンソン大將の未亡人なのです」と大佐は云つた。「その大將といふのは十二年ばかり前に

死んで、それ以來母娘で外國に住んでゐたのです」

「相當に暮してゐられるのですか」私は何だか風を變つて訊いた。

「立派にと云つてもいいでせうね。アンソン夫人は確自分の財産を有つてゐる筈です」

「マアベルさんは素的な美人ですね」私は云つた。

「無論ね、君」大佐は、りきゆう酒のコップを中ぶらりに交へながら、目瞬をして笑つた。

「此處だけの話だがね、君、倫敦でもあんな美しい少女はありませんよ。知る所大評判ださうですよ、何故つて、あんな美しい女は他に二人と見られませんか。あんな美人と結婚する男こそ仕合せ者だね」

「左様ですね」私は折返して云つた。それからその問題を熱心に追窮して、彼女に關するもつと詳細いことを聞き出さうとした。が、大佐はそれ以上何も知つてゐなかつた。でなければ殊更に無知を裝つてゐるのであるか、何方であるかは私には分らなかつた。彼はずつと以前に同じ職階にゐた關係上、彼女の父とは昵懇な關係であつたと云つた私に、知るこの出來たのはそれだけであつた。

で、私は葉巻煙草を投げ、盃を飲み干して、客間で待つてゐる女達中に参加した。程程で、チャニンング夫人の懇望といふので私の青衣の女神はピアノに向つた。そして多向きの歌謡として知られてゐるブツチニの「漂泊」からの獨唱曲を、美しい朗から最低女聲音で伊太利語で歌ひ出した。

歌が終ると、彼女は金剛石を頸にきらめかせながら私の立つてゐるところに還つて来た、そして私の職務を感謝の

微笑を以て迎へるのであつた

が遂に別れの時が来た。乃で私は、眠々ながら——實に眠々ながらにはあつたが、彼女の小さな手を把つて、馬車に、彼女の母親の隣に乗せた。

「さよなら」と愉快さうに彼女が叫んだ、と次の瞬間には、二頭の栗毛の馬は雨夜の中に消えてゐた。

廣間に歸つて来ると、大佐は自ら私の外套を着るのを手傳つた。

夫人にも娘にも既に別れを告げて来てゐたので、大佐と私とは二人切りであつた。

「ヒートン君」私が別れを告げて出て行かうとすると、彼は私の手を把つた眞面目な顔で云つてつた。「僕と君とは古くからの友達でしたね。唯一言、君の意に逆う事なことを云はして貰つてもいいか知らう？」

「ようございませうとも」私は驚いて答へた。

「どんなことです？」

「僕は今晩、他の邀中同輩、君がマアベル・アンソンに充分な思存のあることを知つたのだが、馬鹿を見ない様に用心し給へ」

「僕には分りませぬね」

「左様、僕の云つて置き度いのは、もしも君が幸福を願ひ心の平和を保ち度いと思ふなら、鐵腕のやうな冷たい心で彼女に對し給へといふことだ」

彼の言葉は明かに秘密を孕んでゐた。

「貴方の有仰ることに謎のやうですね」

「ねえ君、唯僕は君に一言警戒して置き度いと思つただけの話さ、怒つて呉れちゃ困るよ。だが歸つてよく考へて見給へ、そして彼女に決して二度と逢はうなぞと思つてはいけないうよ——決して、ねえ君、決して逢はうなぞと思つてはいけないうよ」

第十一章 十月の十四日

私は幾度も大佐の言葉を吟味して見た。斯う云つて警戒するからには、其處に何か特別な動機があることは明かであつた。が幾ら訊き糺しても彼は黙つてゐた。その翌日の午後、私は聖ゼーラムス俱樂部——外交官の俱樂部——に彼を探しあて、再び昨夜の問題を提出して尋ねた。が、彼は唯次の様に應へてゐるだけであつた。

「僕は唯君を警戒しただけさ。それ以上何も云ひ度くないよ。無論君が彼女を愛美してゐるのを非難するわけではない。唯手綱を引止め給へと君に云つてゐるんさ」

「でも何故でせう？」

「愛美してゐるだけでなくなると、君は一敗地に塗れる様になるからさ」

「と有仰る意味は、彼女が嫉妬深い戀人でも持つてゐるといふことなのですか」
 僕の知つてゐる範圍内では彼女は戀人は有つてゐないね」彼は答へた。

「では明々地に有仰つて下さい、大佐」私は云つた「どうして理由もお聞かせにならないで、そんなに豫言をひつくり返してお仕舞ひになるのか、私には分りません」

「その理由を簡潔に云へば斯うさ」彼は常にもなく眞面目圓つて云つた「僕は折角視力を取り返してゐる君が嘔吐して不幸になるのを見るに忍びないんだ」

彼の言葉は甚だ片手落のやうに思はれた。

「何故僕が不仕合せになるのでせう」

「何故つてマアベル・フンソンは君に對して知己以上なものになることは出来ないからね。君と愛を取り換すわけには行かないからね。明白に云つて置くが、有頂天になればなるほど君は四泥糞泥になるだけのことだね。」

「よく分りました」私は嘔吐して云つた。

「僕は心から君のためを思つて云つてゐるんだ、ね君」彼は親切さうに云つた。考へて見ると、君と彼女を同じ食卓に招いたのは僕が悪かつたよ。全く僕の失策だつたよ」

「貴方の御口吻で見ると、彼女は悪魔の體化でもあるやうですね」私は笑つた。「私の思ひ通りに遣らせて見て下さい、大佐」

「では君は、悪魔の餌食になりたいといふのか」彼は嘔吐くやうに云つた。

「だが、彼女を愛したからつて、どうして嘔吐することになるのでせう」

「僕は幾度訊かれても、彼女とは一際關係してはいけないと警告するだけだ」彼は云つた。

「君よりか僕の方が彼女のことはよく知つてゐるんだ」

が私は彼を嘲笑した。成程心持からいふと、他人を悪魔にそしるやうな態度に出ることを恐れて殊更口を噤んでゐるといつた様子がありありと窺はれるが、彼の言葉は全然矛盾してゐるやうに思はれた。彼女と知己であることをそんなに忌しく思つてゐるなら、何故母もろ共食卓に招いたのであらう？ 言ふところと爲すところとは全然一致してゐない。

で、私は多少腹立たしく、冷淡に離れを告げて俱樂部を出て来た。

日を經るに連れて、彼女に對する私の熱情は益々高まつて来た。私とても世の例に洩れず、盲目になる前には小さな事件の一度や二度離れに持つたことはあつたが、これほどまでに熱烈な感情は嘗て経験したことがなかつた。事實種々な年恰好種々な境遇の女を讚美したことは屢であったが、優雅な態度、美しい態度で又は洗練されてゐる態度突如として私の前に現れ、突如として私から愛を消して仕舞つたこの女に匹敵するものは一人もなかつた。

左様だ、赤地に白状すると、其後獨身で通さうと決心してゐたところの私は、彼女を深く戀する様になつたのだ。彼女の姿を一眼でも見たいといふ願ひをこめて、私は倫敦の此處彼處を歩き廻るのであつた。人の出廻る時分

目撃つて方々の夜店の街をぶらついて見た。劇場に行つて双眼鏡で機軸や特別席を見廻しても見た。女性の心を惹き付ける呉服店で賑なりゼント街、オックスフォード街、ケンシントンの本町通りの中心地をぶらついて見た。十日餘りといふもの、私は彼女の姿を倫敦の雑沓の中に探して、その大部分を過ぎたのであつた。私は彼女の住所を知つてはゐた。がまだ訪問して行かれる程の知己ではなかつたので、邂逅の機会を索め、他はなかつた。

が、總て徒勞であつた。にも拘らず私は何物も犠牲にしても彼女に會はうと決心した。或る日私は偶と、會話中にアンソン夫人が娘は官立音楽學校の生徒ですと云つたことのあるのを思ひ出した。若し左様とするなら彼女は屹度何日かは稽古に行くに相違なかつた。注意して見守つてゐれば、奇遇のやうにして彼女に會へるかも知れないと私は考へた。で早速その調査に取り掛つた。そしてその學校の門番の一人からアンソン嬢が毎週火曜日と金曜日の午後二時に遣つて来ることを聞き出した。その翌日は恰も火曜日に當つてゐたので、私はハーヴァ小路に行つて、テナードン街の角で彼女の來るのを待つてゐた。が左様して二時間餘りも看守つてゐたにも拘らず、彼女の姿は遂に見られなかつた。私は疲れ果て落膽して家に歸つて來た。

けれどもその夜、私は一撃の下に打たれて仕舞つた。私が絶えず恐れてゐたところの出来事が起つた。といふわけは私はその夜の最後の便で、タイプライターで記された見知らない人からの命令の手紙を受取つたのであつた。辯護士の使ふやうな青灰色の封筒で、滲印で見ると、ロムバード街の局で發送されてゐた。私は怖るおそる封筒を破つてその文句に眼を落した「アエル」と重々しい手紙で惹けなく大文字で署名されたその文句は次のやうであつた――

「明日、十月十四日午後四時、グロスエノー・ゲートの公園で、音楽堂に通ずる徑の傍の、入口の方から三番目のベンチで待つてゐて下さい」

私は手紙を握つたまゝ黙つて立つてゐた。何か秘密な用事があるに相違なかつた。あの恐ろしい夜の影が、秘密と犯罪の重味で私を壓倒しながら再び落ちて來た。私はまだ見たことのないエドナの姿を描いて、マアベルと較べて見た。當時頼りない身の私はエドナの手先に使はれることを不本意ながら約束したのではあつたが、勿論今となつて見れば、彼女が厭はしく蔑られもした。

普通ならば、此の公園で落合はうといふ突然な要求に私は喜んで従つたかも知れなかつた。この命令は明かに冒險的色彩を帯びてゐた。で、エドナに會へば、彼女を纏る秘密を量る何かの手掛りが得られるかも知れないと私は考へた。が、あの清淨無垢なマアベルのことを考へると何も彼も厭でならなかつた。エドナはその不思議な「アエル」は自分でないと公言したが、私には彼女のその言葉を疑つていけない理由は何もなかつた。彼女はあの眞夜中の犯罪を洩らすまひとして、左様した行動を取つてゐるやうに考へられた。

犠牲となつて斃れた若い男といふのは誰であつたらう？私もし指圖に服従することを拒めば、私もあの男が殺られたと同じ方法で、犠牲者となつて斃れるのではあるまいか？

その夜、憂鬱しかつた。で私は夜更けまで寢床に横はつたまゝで事件の全局面を靜かに觀測した。この前あの不思議な手紙を――疑ひもなくエドナの煽動に掛るものであるが――受取つた時には私は非常な利得を獲た。此の謎の命

令といふのは吉事に就してとあらうか、凶事に就してとあらうか？

多分エドナ自身、視力を回復したその後の私と話したく思つてゐるかも知れない。斯う考へて、翌朝私は指定の會見に興味を覺へて起さ上つた。三時すぎると間もなく、私は河岸通りから乗合馬車に乗つてパーク・レーンの角まで行き、四時の打つのを俟つてグロスゼノー・ゲートの公園に入つて行つた。そして曠を凝して四邊を見廻したが無職の等働者らしい二三人の若と兒供を連れ一人の乳母の他には誰もゐなかつた。私は指定された席を誰なく見付け出して腰を掛けて待つてゐた。其處は栗の太木の真下で、人目を離れた静かな居心地の好い場所であつた。通信者は此の公園を詳しく知つてゐるものに相違なかつた。

私は紙巻煙草に火を點けて、それを燃らしながら待つてゐた。五分間も経つと、入口の方に當つて女の姿が現はれた。見る見る私の方に近づいて來た。どちらかと云へば平凡な型の少し年齢の行つた女であつたが、私は眞直に近づいて來るその女を好奇心を持つて待つてゐた。が、近づいて來たかと思ふと、彼女は私をチラリと一目見て、そのまま行き過ぎて仕舞つた。

左様してまだ見たこともない誰かに會ふために待つてゐる、私の立場も可笑なものであつた。誰でも知らない人を待つた經驗が一度や二度はあるであらう。そしてそんな時に描いてゐた未だ見ぬ人間の體と、偕て實際に眼前に現れて出て來た實物の體とは全然相違したものである。その瞬間の私が矢張りそれであつた。私は腰を掛けたまゝ近づいて來る人の體を一々細密に見詰めて三十分ばかり待つてゐた。が遂に私は疑ひ初めた。——何かの理由で約束が

守られなかつたのかも知れない。

時計を出して見ると既に五時廿分前であつた。私は疲れを感じ出した。その時日に焦けた汚い風體の男がやつて來た。この男かも知れないと私は思つた。彼は私には少しも注意しないやうな風を裝つて、のろりのろりと遣つて來たが、その實私に目を凝らしてゐることは明白であつた。多分この男は私が來てゐるか否かを見に来させられてゐるのかも知れなかつた。私は待ちに待つた、がそれらしいものは誰も來なかつた。

其影は移ろひそめ、太陽はケンシントン風體の森の背後に沈んでゐた。遂に私は飲みさしの紙巻煙草を放り投げた。多分何か厭いな出來事を持ち上つたのかも知れない、で又別な手紙を二三日中にも寄越すかも知れない、少くとも私の方では契約を實行したのだ、と思ふと自由に感ぜられた。乃で杖を取り上げて私はグロスゼノーの門の方に出て行つた。

パーク・レーンに出て行くその門の近くまで來るとその時突然、私の前方の逕の急な曲り角に黒い姿が現はれて來た。瞬間、私は愕然として黙つたまゝ立止まつた。私は愕然たらざるを得なかつた。

第十二章 これはあの男のだ

眼鏡の姿は、物靜かな優しい女の姿であつた。彼女の顔は驚きの表情で却つて意氣に見えてゐた。それはマアベル・アンソンのほかの誰でもなかつた。しつくりと身に合つた黒色の服を纏ひ、品のいゝ帽子を冠つた彼女の姿は、威風もあり美しくも見えた。誰は薄い紗のヴェールで覆はれてゐた。思はぬ邂逅に歡喜の表情を湛へて手袋のままの手を差し出した時、彼女の腕は音楽的に鳴つた。

「まあ、何んて驚き甲斐のあつたことせう、アンソンさん」驚愕のあまりに出遅つた言葉を取り返して私は云つた
「私も左様思ひますわ」彼女は笑つた。
「僕は一體何時再びお目に掛れるのか知らずと考へ考へしてゐました」私はうっかり口を滑らして云つた。「お目に掛れてこんな嬉しいことはありません」

「家にお歸りになつてゐるところなのですか」私は樂譜らしいものも何も彼女の手にないのを見て訊いた。
「左様です、公園を抜けてね」彼女は笑つた。

「お母さんには禁じられてゐるのですけれど、蒸暑い乗合などより、斯うして公園に行く方がすつと個々なのですよ」
91

「音楽學校からのお歸りがけなのですか？」
「左様です。一週間餘り氣分が勝れなかつたものですから缺席して仕舞ひました。でも善良な生徒らしく卒業しやう

と一生懸命になつてゐるのですわ」そして彼女は陽氣に笑つた。

「一週間に何回おいでになるのですか」
「二回——が普通です」彼女は云つた。「でも今のところ變分不規則ですわ」

「で今日は、警護の役を勤めさせて貰つてもいゝんでせうか」
「え、別に差支へありませんわ」彼女は優美な中に威のある聲で答へた。で私は躊躇を避らして彼女の傍らを歩いた。私達は火藥庫への一直線な路を取つて、それからサーペンティンを横切り越えて行つた。十月の日没の黄色い光線が溶けて歩きながら、私は四邊の空氣に塵け込む彼女の匂ひを胸一杯に呼吸するのであつた。事實、彼女ほど美しい婦人は世に又とあるまい、と私は思つた。大佐の不思議な政めの言葉が私の心に頭を擡げた、が私は一笑に附して仕舞つた。

サラサラと夕風に鳴る木立のトに來ると、最後の夕陽は精氣のやうな光線で彼女の美しい顔をバツと明るく照し、彼女の頭髮を黄金の圓光の中に照した。世の辛い經驗苦しい經驗の他には、戀に憚んだ經驗は私にはこれまで一度もなかつた。がその時、私は彼女の優美で崇高な態度、婀娜な姿、甘美な微笑、そして話しながらの音楽のやうな聲に心を奪ひ去られて仕舞つたのであつた。

97
話は偶々音楽のことに移つた。その研究してゐる曲目から推察して、私は彼女が既に相當の音楽家であることを知つた。二人はロッサニ、ワグネル、メンデルスゾーン、ブラチニ、ベロサ等の作品を論じながら歩いて行つた。音楽

に帰しては、私は多少その方面の知識を自分でも誇りに思つてゐた、が彼女の知識は遙に勝つた。

話ながら、二人は公園を機切つてケンシントン風致園に入つて来た。太陽は既に晩霞の彼方に沈んでゐた。彼女は外國に居た當時のことを話した。そして倫敦が好きなこと、パリと伯林とウキナに暫らく滞在してゐたこと、が是等の中のどの町も倫敦の半分も面白くないことを附加へた。

「貴女は倫敦人ではおありでないのですか」

「いえ、ちつとも」彼女は應へた。「でも倫敦人と云つてもいゝ位に長年居るには居るのですけれど。貴方は？」

「いえ」私は答へた。「私は、舎生れの田舎育ちです」

「先夜大佐からお聞きしたのですけれど、貴方は長年盲目で苦しんでおいでだつたのですつてね。さうのですか」私は彼女の言葉を承認した。

「まあ恐ろしい！」と叫んで、彼女は黒味がちな眼で私を見詰めた。その眼は私を魅惑し、私の心までも見透かさうとしてゐる様に思はれた。「私達の様な眼の見える者には盲の人の不自由は想像もつかないのですけれど。でもお治りになつて仕合せでしたわね」

「左様なんです」私は説明して云つた。「その恢復したといふのも先づ奇蹟と云へば奇蹟なのです。私は倫敦でも最も有名な三人の醫者に、三人共に不治を宣告されたのです。ところが或る日のこと、私の視力を取戻して貰ふと云つて一人の男が來ました。で行らせて見ると、その男は此の通りに直して呉れたのです。が不思議なことには、その男は

私の眼が見え出すと同時に姿を消して仕舞ひました」

「まあ、なんて不思議な！でその後の男は一度も來ないのですか」

「一度も來ないのです。お禮も持つて行かないでそのまゝ姿を消して仕舞つたのです。私はその男の本名さへ知らな

いんです」

「まあ何て不思議な！」彼女は甚く興味を感じて云つた。「世の中には、そりやあ書物に書いてあるよりか傳奇的なことや神秘的なことがあるとは信じてゐますけれど。それにしても狐に扱された様な話ですわね」

「貴女にもね、アンソンさん、では私の身を取つて見れば何んなに不思議に思はれるでせう！事實世の中を再び見やうなどいふ考へも、人生を樂しまうなどいふ考へも放棄してゐた私が、今では實際に視力を取戻して、世の人々に立交らうことが出来る様になりました。私の身になつてお考へになつても見て下さい、どんなに始終感謝してゐることですらう」

「新生活涯が開けて來た——新たな存在が開始されたとお考へになつてゐるに相違ありませんわ」彼女は美しい聲に同情を籠めて云つた。そしてさも述懐らしくそれに附加へた。「新生活涯に入ることを楽しみに思つてゐる人がどんなに澤山あることですらう」

斯う云つた言葉の調子は彼女に不都合なものであつた。數分前までは、彼女は快活で喋々としてゐた、が是等の言葉の中には明かに暗い調子がわなゝいてゐた。

「まさか、新生活を開始したいなどは有仰らないでせう」私は云つた。
彼女は軽い瀟洒を吐いた。

「誰でも悔恨の荷物を背負つてゐるものですわ」その時彼女は私の方に眼を上げて曖昧に答へた、そして又目を落とした。

その瞬間、私達は互に信頼を繋ぎ合つてゐるやうに思はれた。紅色のそして橙色の空は見る見る響せてゐた。櫛の大木の下陰は闇を増して、國外なるケンシントンの一列の街燈は、既に私達の左方の茂みの間からチラチラと見えてゐた。四邊には誰一人居なかつた。で私達は極めて緩やかに歩いて行つた、といふのが、實を云ふと私は最後の瞬間まで別離を引延したと考へるのであつた。巨大な倫敦市街中の草木のある場所の中で、此のクキンス・ゲートとブロードウォークとの間のケンシントン風致園ほど田園めいた、ロマンティックな繪畫的な所はない。

「でもアンソンさん、貴方はまだお若いんですもの少し躊躇つた後私は哲學的に云つた。

「失禮な云ひ分ですけれど、貴女は漸く人生に第一歩をお踏み出しになつたばかりですもの。それでゐて新生活に入り度いなど、本統にお考へになつてゐるなんて！」

「左様ですわ」彼女は佛切聲に答へた。「左様思ふですわ、變に思はれますの、でも何故でせう」

「では過去に辛いことでもおありになつたのですか」私は訊いた。と同時に大佐の警めたあの不思議な言葉が私の心に浮んで來た。

「その辛いことが悔恨と結び付いてゐるのです」彼女は震れた低い聲で答へた。

「ですが、若くて快活で幸福で才能があつて、日々の生計の心配もおありにならない貴女を、そんなに心配させたり絶望させたりするほどの悔恨があるなんて」私は柔しく云つた。「超越なことを云ふ様ですけれど、僕は貴女より十歳も年上なのでからお許し下さい」

「もつと有仰つて下さい」彼女は叫んだ。

「今の私は同情のある言葉ならどんな言葉でも聞き度いんですわ」

「僕は心から同情してゐます、アンソンさん私は彼女の言葉に私を信じたいと思ふ氣色のあるのを見て取つて云つた。貴女のそのお年齢で、既に新生活に入り度いと考へておいでになるところから見ると、仕合せな過去をお有らにならなかつたと見えますね」

「仕合せどころではなかつたのですわ」彼女は異様な機械的な聲で答へた。「世の中で一番不仕合せな女ではないかと考へることがある位ですの」

「いえ、いえ」私は早口で云つた。「我々は誰でも、困つてゐる時には、自分の荷物が他の誰の荷物よりか大きい、そして他の人々は選れてゐるのに、自分一人にだけその嚴酷な不幸が落ち掛つて來てゐると考へ勝ちなものです」
「知つてゐます、知つてゐます」彼女は云つた。「でも愉快さうな顔付や無頓着らしい様子をしてゐると、どんなに悲しい心でも人には分らないことがあるものですわ、丁度それが今の私の場合なのです」

「そして悲哀のために悔いて、現在の生活を打ち切つて新しい生活を始めたいと貴女は考へておいでになる」私は眞面目な顔で云つた。

「事情の分らない僕には、貴女は何かの行爲を悔悟しておいでになるかの様に考へられますね」

「と仰有ると？」彼女は黒味勝ちの眼に異様な表情を透へて私を見詰めながら、忙しげに噤いで云つた。「私は何も何も悔悟などしてはるませんわ」

私は容易ならぬ失錯をしたことに氣付いた。つい心安だての目先の見えなぬ熱心さから、少し立入つた物の云ひ方をしたので、彼女の性來の品位が忽ちそれを反動したのであつた。早速謝罪した。彼女も直ぐ心を和らげた。

「貴女がそんな心願の重荷を背負つておいでになるなんて、お氣の毒ですね」私は云つた。

「私にお力添への出来ることなら何なりとさせて下さい」

「貴方は大變親切な方ですわ」彼女は陰鬱な顔で答へた。「でも何でもないんですの——ほんとになんでもないんですの」

「幸福に圓満かれておいでになる等の貴女が絶望に身を沈めておいでになるなんて、僕にはどうしても理由が分りませんね」私は途方に暮れて云つた。「お家では仕合せに暮しておいでになるでせう？」

「え、大變仕合せです。紋切羽な日常の色々な事を除くと、私は全く自由氣儘な主婦なのですの。私は何方かといふと常軌を逸した方の人間ですわ」

斯う聞いて見ると、彼女も他の娘達同様家庭の中に何か難しい事情を有つてゐるのであらうかと疑つてゐた私の心は一掃されたが、それと同時に、彼女が新しい生活を営みたいと切望してゐる原因は、誰か彼女の戀人の不實な仕打ちから來てゐるのではあるまいかといふ考へが、私の心の中に自然と湧き上つて來た。富もあり美貌の持主でもありその他何事につけても、望月の何一つ缺けることのない身の上でありながら、汗顔にも心を捧げた戀人の移り氣のため、日々を憐み事す處女がどんなに澤山あることであらう！コルセットを固く締めた處女の十中八九は、長く忘れられた無念さを胸中に秘めてゐるといつてもいゝであらう。女が憧憬の動作に沈んで臥つて「まさか」と振舞つて考へてゐる間に、男は煙草を盡なりに煙してこゝと微笑である。私道の中の唯の一人でも、男女を問はず、初恋の當初の情に溢れた雙眸を思ひ出さない者があるであらうか。うら若い身には同様に落ち充ちた優しい顔が何よりである、それ故に心を籠めて眺つてくのはあるまいか。事實、長く忘れられた戀から頭を擡げて來るところの悔は、時に甘は悲哀と混り合つて、全生涯を通じて浮々とした若い華かな時代の記憶となるものである。是等の記憶をお腹になる方で、過ぎ去つた昔の田園の詩を憶ひ出されない人は一人もないことであらう。美しい又は雄々しい戀の形負を胸に秘めて、宵々とした海邊を、或は楊柳の樹に並んだ物靜かな河の海を憶つた記憶。又は手に手を取つて、太陽が鈍い金色の光線を以て照らした幹に閃めきかゝるところの森の太木の下を逍遙した記憶を、目前にしない人は一人もないことであらう。何人の胸にも、戀人と唇を接した、今は昔物語りの黄昏時の甘い記憶が、甦つて來るであります。是等の過ぎ去つた當時の悔は、麗しい記憶として、嗚！けれども、時には我等の生の塵芥まで

絶望と死した悲嘆となつて残るものである。

「で、貴女の煩悶の原因といふのをほんの少しでも訊かして頂くわけには行かないものでせうか」暫時黙つて歩いた後私は尋ねた。「貴女は過去を描き去つて生活を新にしたいと仰有る。私はその理由を聞き度くてならないのです」私は附加へた。

「何うして聞きたがつておいでになるのでせう」彼女は呟いた。「そんなことを申し上げる必要はありませんわ」

「いえ、いえ」私は口早に叫んだ。「假令昨今の知己ではありませんとも、貴女は友人の一人に私を數へて下さるだらうと直感もなく考へてゐるのですが、左様ではないでせうか」

「左様ですとも、でなければこんな處まで一階に来て暇はしませんわ」

「では貴女の友人として、僥用して頂いて、私が決して口外なす者でないことを考へて頂き度いと思ひます」

「信じて台ふなんて、私達の間には不必要なことですわ」彼女は答へた。「私は、人で悲嘆に耐へて行き度いのです」

「快活で陽氣だとばかり考へてゐた貴女からそんなお言葉が出るなんて、不思議におもはれますね」

「では貴方は、女にばなし相な外見の背面に悲哀を蔽ふ能力がないとお考へになつてゐるんですか——女は始終素顔と假面の二面を有つてゐるものではないふことを」

「貴女は女性がどんなものであるかといふ挨拶の辭をお述べにならないばかりですね」私は微笑して云つた。「でもそれは、貴女がこんなに恰めに落膽しておいでになる理由になりませんよ」

彼女の様子を見て私は驚愕して仕舞つた。何故なり、語を初めた疑秘から彼女は妙に憂鬱になつて、先日の快活な彼女とは全く似てもつかぬものであつたから。彼女から何かその悲哀の原因の手掛かりとなるものを獲やうとしても、それは無駄であつた。けれども私に取つて不思議な上にも不思議なことは、他の女達ならば婚ひを以て對する場合に、彼女は悲哀を私に打明けたことであつた。

「私は黙つて耐へ忍んで行かれます」不仕合せな原因を尋ねると彼女は斯う云ふのであつた。

「こんなに沈んでゐて失禮ですね。私憂鬱病にでも罹つてゐる様に見えるでせう、でも此の次には吃度假面でお目に掛かりますわ——もしお目に掛かるやうなことがありましたら」

「どうして貴女はそんな隠微な云ひ方をなさるのでせう」私は不安の念に驅られて聞き質した。「私はまたお會ひしたので、幾度でも幾度でも、貴女のお言葉では斯うしてお會ひするのもこれ切りの様なお口吻ですね」

「私は左様考へますの」彼女は素氣なく答へた。「こんな我儘な私を恕して貴方は大變親切な方ですわ」彼女は急に態度を變へて附加へた。「で、もしお目に掛かるのでしたら、今度はこんなに憂鬱にしたくないと思ひます」

「左様ですとも、アンソンさん」私は小徑に立寄りながら云つた。「またお會ひしやうではありませんか。私達は今日から交友を初めたのだといふことを——而も断絶することのない交友を初めたのだといふことを忘れないで下さい」だが彼女は、恰も今猶ほ心の重い悲哀に憑かれてでもあるかの様に徐に頭を振つた。

「私達の間に交友は結ばれてゐても、度々會ふなんていふことは不可能だと思ひますわ」

「何うしてよす？ 随分謙遜には自由無礙な身の上だと有仰つた貴女が」

「それは左様なんですわ」彼女は答へた。「でも貴方に會ふのは唯學會に任せるより他に仕方がないんですもの」

「何うしてよす？」

「お躰ひですから、そんなに追ひ詰めて説明させやうとはなさらないで下さい」彼女は斷乎と答へた。唯そんなに度々お會ひ出來さうにはないと思ふのです——それだけの話なのですわ」

二人は歩つて行つた、そしてケンシントンの本通りに出て行く門の近くまで來た。

「では云ひ換へると、私がお伴をして來たのは越く御迷惑だつたのですわ」

「いえ、それどころぢやありませんわ」彼女は柔しく笑つた。「私そんな意味で申し上げたのぢやありませんわ。どうすればそんな結論が出て來たのでせう。貴女の親切なお言葉には私はほんとに感謝してゐますの」

「で貴女はもう會つては下さらないのですか」私がかかりした句辭で遮つて云つた。

「もし左様でしたら、私達の交友は變なものですわね」そして彼女は變な面持をして目線を擧げて私を見た。

「では私は、お伴をさして願ひたのは決して御迷惑ではなかつたといふ風に解釋してもいいでせうか」

「左様ですとも。今晚私は少くとも一人の友人を獲ました。どうして嬉しくないことがありませんわ」

「では貴女の友人として——親友として——時々お逢つて頂くやうにお躰ひします」私は心を籠めて云つた、聲れが弱なかつたからである。「もし私のお力添への叶ふことがありましたら、どうか左様有仰つて下さい。」

「貴方はほんとに御親切な方ですわ」彼女の聲は少し震へてゐた。「そのお言葉を私はいつ迄も忘れないでゐます」それから、本通りの邊石の上に立つた時、彼女は手袋を嵌めた手を差し出して附加へて云つた。「晚くなつて仕舞ひました。隨で馬鹿に暇取つたものですから、乗つて歸らなくちやならなくなりましたの」そして彼女は通りがりの馬車に構圖した。

「お別れする前に」と私はいつた。「御用のおありになる時には一筆戴きますやう名刺を差し上げます」そして二人で御燈の下に立ちながら、私は胸衣のポケットから鉛筆を取り出して、名刺に宿所を書き附けた。

彼女は黙つて讀んでゐた。が私が書き終つた恰もその時、彼女は驚愕の叫び聲を發して矢急に私の手を握り締めた

「それ、その持つておいでになるもの何んです」彼女は追つて來た。「ちよつと見せて下さい——」

次の瞬間——私がそれと氣付くか氣付かない間に——彼女は私の手からその鉛筆を握み取つて、そして瓦斯燈の下でそれを精細に見てゐた。

「あつ！」と彼女は驚きの眼で私を見詰めたが喘いでいつた。「これは——左様、これはあの男のだ！」

汗顔にも使つてゐたところのその小さな黄金製の鉛筆は、あの怖ろしい八月の夜、私が死人のポケットから取り出して持つてゐたものなのである。

第十三章 鉛筆

その瞬間、マアベル・アンソンの顔は變つた。彼女の顔色は死のやうに青蒼めた。手は鉛筆を持つたまゝブルブルと慄へてゐた。

「何處でこれを手にお入れになつたのです」彼女は恐怖に打たれた聲音でいひ迫つた、これで見ると彼女は明かにその鉛筆に見覚えがあるに相違なかつた。彼女は息を凝らして私の返事を待つた。

私に何う返事が出来やう。秘密を守るやうにエドナと約束したからには、何うしてその事實を説明することが出来やう。のみならず、私はあの眞夜中の不可思議な出来事を話して彼女を怖やかしくはなかつた。で、嘘ばなしが無意識の間に私の口に浮んで来た。

「見付けたのです」私は口籠もつて云つた。

「お見付けになつたんですつて？ 何處です？」

「まだ盲目の時分に手探りをして、見付けたのです、そしてそれ以來、何時かは持主が見付かるかも知れないと思つて持つてゐたのです」

「不思議ですね」彼女は囁いで云つた——

「實に不思議ですね」

「見覚えがおありになるやうですね」彼女の態度に感嘆つて私は云つた。「持主を御存じならお返しします」

彼女は躊躇した、が直様目制心を取り返して云つた。

「私がずっと以前に見たことがあるのと大變よく似てますわね——でも同じ位の鉛筆の心容は澤山あるでせうから」彼女は無頓着を裝つて云つた。

「ですが、それには珍奇な譯の分らない符號が彫つてありますよ。御覽になりまして？」

「え、見ました。これで見ると私の知つてゐる男のではありませんねですわ。頭文字が違つてゐましたから」

「貴女は違つてゐましたと過去で有仰いますが、それは又何故でせう？」

「何故つて——左様、私とその男とは既に友人ではないのですもの——強いて御返事致しますればね」そして彼女はぞの鉛筆の心容を私の手に返した。

彼女の態度には私に肯へない何物かあつた。間違ひもなく、此の品物は彼女の云つたその品物に相違なかつた。そして或る秘密な動機から、彼女は故意に私を誤解させやうとしてゐるに相違なかつた。

「で貴女はほんとに貴女のお友達のではないとお考へになるのですか」私は鉛筆を彼女の眼前に示しながら訊いた。

「ええ」彼女はそれを見ることを忌みでもするかの様に顔を背けながら矢張り早く答へた。「唯にそれは違つてゐますわ。餘りよく似てましたので——左様思つた丈ですの」もし……もし是れがほんとに貴女のお友達のだとしたら、實に

「不思議な機でしたわ」私は云つた。驚に不思議でしたわ」彼女は顔も倒しげに私を見詰めたが云つた。でも「世の中は面白いやうでも狭い」てふ舊い格言もありますわ。振めて見た時には確に私の知つてゐる紳士のだと思つたのですれど、よく見ますと、此の鉛筆の心容の方がずつと古くて頼つてゐて、頭文字も四五年前に彫られた機ですの」

「彼女のお友達は何處でその鉛筆をお失くしになつたのです」彼女の語は確に片手落であつた。若し何か悪い意味が結び付いてゐないのなら、失くした鉛筆の心容を一眼見たからと云つて、何うしてそんなに感動しなければならぬことがあらう。

「私はちつとも知らないんですの。事實、今もそれが彼の所有であるかどうか知らないんですの」

「では何うして彼女は鉛筆を精しく御存じなのですか」私は真相を確めるために夢中になつて訊いた。

彼女は暫時の間躊躇してゐた。何うしてつて」彼女は躊躇した——「私の贈り物だからですわ」

「敬慕者にですか」

彼は答へなかつた。が彼女の頬の赤い血は、麗な街燈の光りの中にも見分けられた。

それから、順序として、明かに狼狽を隠蔽するために彼女は付加へて云つた——

「私はほんちに行かなくちやなりませんわ。夕飯に後れるとおつ母さんが眠がりますの。では左様なら」

私は手を持ち合ひ、目と目を見合つた。私は彼女の眼に深い秘密の露されてゐるのを見た。彼女は私を凝つてゐるやうに思はれた。その死んだ男のポケットから引出された品物に對する彼女の行動と質問とは、私にはどうしても

譯が分らなかつた。

「さよなら」と私は云つた。近い中にお會ひさせて下さいますやう。お月をさせて置いて、どんなに愉快だつたこと
でせう」

「お會する時には——何時かはね」彼女は悪戯らしい微笑を浮べて答へた。「假面を冠つてお會すると約束したことをお忘れにならないで下さい。では左様なら」そして彼女はスカートを意氣に巻けて、馬車に入つた。そして見る見る通り私を遠石の上で眺して行き去つて仕舞つた。

私は馬車と地下鐵道との何方によつて歸宅しやうかと躊躇した。が後者を採ることに定めて、そして本通りに沿つて暗い汚い場所をテムブル停車場まで歩き続けた。

途上、私が惱ましい考へをどんなに胸に持てあましたながら歸途に着いたかは、讀者は容易に想像して下さることと思ふ。唯へ無量の愛を以てマアベル・アンソンを敬慕してゐたにもせよ、私は死人から取つた鉛筆の心容が遽に彼女の容貌に異常な變化を齎した事實を見遷すわけには行かなかつた。

彼女は鉛筆の出處を秘した。それは否々難い事實である。その鉛筆が彼女が興へた友人の鉛筆と似てゐるといふ片手落ちな説明は、餘りに明白な後思案である。一つの金銀の鉛筆の心容が他のいま一つのと似てゐるといふ事實はあらう、パーミンガムの職工は同一の型のを千箇でも複製するかも知れない、が眼鏡の鉛筆の心容の上に彫られた恐入つた筆跡は、それだけでも出處を秘すには充分である。唯も彼女が買つて贈つた鉛筆であることを否まされたも

のは、その頭文字であつた。けれども、彼女の言分が眞實でないこと、又それ等の頭文字が彼女の注文に依つて書かれたものであることは確であつた。

且つ又、彼女は其の持主を過去で誣したのではなかつたか。これだけでも私が疑念を掛ける餘地は充分にあつた。私は彼女はその男の死を知つてゐるに相違ないと思つた。その男が死んでゐるとするならば、彼は最早彼女の友人ではないであらう。

私の手に鉛筆を見つけた時の彼女の突然な取亂した様子。驚愕の叫び聲。それを手に取つて見たがつた熱心さ。是等は、その品物が最早その男の所有品でないことを彼女が知つたこと、又それが私の手にあるのを見て愕然としてゐた事實を明かに裏書きしてゐる。彼女も亦、猜疑の眼で私を見てゐるのではあるまじか？ 手づからの贈物であることを私にして、彼女は、私を下手人とも疑つてゐるのではあるまいか？

斯う考へて私は硬くなつた。私の知つてゐる限りでは、彼女はその男の悲劇的最期に充分氣付いてゐるかも知れなかつた。そしてその鉛筆を私の手に隠したことは、彼女に取つては、私が殺人を犯したといふ何よりの證據であつた。

私の立場は確に容易ならぬことになつてゐた。私は別れの時握手した際に、彼女が私の手を心ならず握つたのを見て取つた。多分彼女は、殺人者の手であると思ひ込んでゐたのかも知れなかつた。

扱て、私の傍で打殺された男が本統にマアベルの友人であるとするなら、あの恐ろしい夜の秘密が明されるのも、

不思議なエドナの正體が知れるのも、そして又「マアベル」といふ假名の下に通信をしてくる私の運命の支配者の本性が知れるのもさして程遠いことではない。

次に私の心に浮んで來たのは、まだ見たこともない知らない人間と會ふ約束をして、公園のベンチに腰を掛けて待つてゐた時のことであつた。列車の片隅に坐りながら私はその時のことを靜かに振り返つて見た。その時待ち草臥れて指定されたその場所を立ち去つて行つた私が、身も魂も打込んで置かれてゐる女にばつたりと出會したといふことには、單に奇遇だと云つては仕舞はれない以上のもがある様に考へられた。私はその指定された場所に歸すこともなく獨り置かれて、一ダースの紙巻煙草を燃し、新聞の隅々から隅々まで廣くまで讀んで、そして焦々しながら近付いて來る人毎の顔を見詰めてゐたのであつた。が起ち上るや否や殆どその瞬間に、私は三日以前まで探しに宛被探してゐたその人間に、ばつたりと出會したので。

マアベルの出處とあの不思議な命令とは確か證據があつたのではあるまいか？ と考へて私は疑念を下し歸來して見た。第一、彼女の自由の行動とあの會談の知れない人間からの手紙との間に疑して何んな連繋があるか云ひ得られやう？ 彼女が官立警察學校に遊んでゐることは私は知つてゐた。で何よりも先に考へて見なければならぬことは、彼女は學校からの歸り途にその公園を横切つたのであらうかといふことであつた。彼女の歸途は私が熱心に見守つてゐたその小徑に沿ふてけなかつた。もしもその時起ち上つてグロスマノの方へ行かなかつたなら、私は彼女に會ふことは出来なかつたのかも知れない。證據を造らうとする餘りに、一度は彼女が實際には盲目である時にエド

ナといふ名前を知つた女ではあるまいかと疑つても見たものゝ、私は直線その考へを嘲り遣つて仕舞つた。
 疑と云ひ、手振りと云ひ、手の恰好と云ひ、静く相違してゐた。容態も亦、舞者のウエストが描いて見せた女の
 とマアベルのとは異つてゐた。

いや、彼女がエドナである筈はない。

死軍が汽笛一響シタイワアツの騒道に入つて行つた時、私は何か解決が得たいと焦つた。夫然に連れ合つて來ると
 ころの騒の種々な現象は眩るしくもあり又混亂してゐた。疑は不十分な證據から理論を振り上げることの出來る人職
 でもなければ、又は生硬な論議に研ひ替へて行かれる性の人職でもなかつた。論理的演繹法を講ずるには、強硬にい
 ま二三の斷片を削いでゐた。それにも拘らず、無能者によつて推察されたその命令と突如として私の前に現れて來た
 その女との間には、何か障礙があるに相違ないといふ疑心が私の心に出産なく湧き上つて來た——是れは戰なる疑
 に過ぎないかも知れない。がその時約束を履行すべき何人も現れて來なかつたといふ事實は、私の疑心を疑めるに
 分であつた。

マアベルの考へる疑軍に私の心に浮び上つて來るのは、マヤニンとの不思議な魔攻の言辭であつた。何處
 彼は彼女と離く知己になつたばかりの私にあんな警告を與へたのであらう。疑しいと云へば疑しいことである。そ
 して尙ほ訝しいと思はれるのは、彼がその警めに就して何等の證據も與へなかつたことだ。
 が、視力を回復した今の私にも、私の生感を通じての最も暗い箇所は、疑は捨て置き、あの深夜の悲劇の生新しい

思ひ出であつた。

第十四章 發 覺

それから可成な日子が経つたにも拘らず、あの不思議な通敵者からは遠約の體状も何も來なかつた。私は益々マア
 ベルをあの事件に結び付けて疑ふ様になつた。

私はあの夜ケンシントンの木通の邊石の上に立つて、證據を掛けるやうになつたからには、彼女は益々私に會つて
 は呉れないであらう、と思へば心も洗んで、洗面と彼女と別れて來たものであつた。が此の私の考へは全然誤想であ
 つた。といふわけは、それから一週間も経たない中に私は再びボンド街で全く偶然に彼女に出會はした、そして氣
 よく迎へられたので私は彼女の買物のお伴をして、愉快な午後を過したのであつた。

彼女は身體全體黒い着物で装つてゐた。がそれが又驚くばかり優美に見えた。彼女の態度には、先夜のやうに私を
 疑つてゐるらしい形跡は少しも見られなかつた。快活で浮々としてゐて、先の日の憂鬱な態は彼女から全く姿を消し
 てゐた。彼女は機智に富んでゐて、店から店へと食後の菓物や菓子類用の花を買つて廻りながらも、さう愉快さう
 に無駄口を叩いたり申談を云つたりした。

最初彼女は禮儀の亂れるもとであるとしても考へてゐるかの様に私の疑心を挿んでゐたが、私は遂に一縷にカフェエ

でお茶を飲むやうに彼女を説得した。で私達は小さな卓子の一つを占めてお喋りを続けた。

その時、極度に夢に着飾つた一人の婦人が入つて来た。で私とその婦人に隣職して批評めいた意見を述べると、彼女は眞赤になつて、不愉快な辭付をして、そして私の述べた意見を嘲笑して答へた――

「貴方の有仰る通りですわ。私達女はいつも衣裳といふことで趣味を廣めたり狭めたりします。世の中の小さな苦勞の半は着飾から來てゐます。頭天邊から尾の爪先まで、無ければ返つて来たと思はれる限りのまで、荷物にして持つてゐますの」

「いや全く左様ですと」私は云つた「もし領子もねくたいも着けなかつたら、人生の困難が我々男からどれだけ消えて行くことせう」

「そして女からも消えて行きますわ、若し私達が帯も手袋も靴も着けないとしたら」全く左様です。左様すれば事實一日に一時閒究の贈物を人生は我々にして呉れます。一週間に七時間、一年に約二週間に近くの贈物を」私は云つた「黙考するまでもないことですね」

聽て時計が五時を打つと、彼女は馬車をカフェエの前に呼び止めた。別れを告げる辭に彼女は感傷らしく私に云つた――

「假面を冠つた私を何う御覽になつて？」

「魅力的です」私は黙然をこめて應へた。假面を冠つておいでにならうとなるまひと、假面に取つては同じことですよ

貴女のやうな魅力的な友達を僕はまだ持つたことがありません」

「いえ、どう致しまして」彼女は笑つた「此の場合そんなお世辭は適切ではありませんわ。では左様なら」

そして彼女は細い手を差し出した。私はそれを把つて、別れを感しみながら固く握つた。

それから二人は會ふやうになつた。そして會ふ度毎に、私は彼女に對して感懐を深めて行くのであつた。私達がケンシントンの街燈の下に立つたあの晩以來、彼女は鉛筆の心算のこと、その所有主のことに就いては一語も口になかつた。實際、彼女が不意にその鉛筆の出處を糺したといふ事實は、彼女を裏切つてその持主が彼女の戀人であつたことを露顯させた事に考へられた。そして今では彼女は私の心から猜疑を一掃しやうとして、全力を盡してゐるやうに私には考へられた。十一月も半の或る朝、私はポルトンなる彼女の自宅で會食の招待狀をアンソン夫人から受けた。私が雀躍して喜んだことは茲に云ふまでもないことである。

彼女の家といふのは、豫想してゐた以上に素晴らしく壯大な贅澤のありたけを盡したものであつた。倫敦の西端にある私の知人の家の中で、これほど豪華な家を私は知らなかつた。中でも装具には金銀が文字通り浪費されてゐた。がそれでゐて、華美に流れず、俗悪な趣味の形跡は少しも認められなかつた。到る所、人をして襟を正さしむるところの富裕と謙寂の氣に満ち溢れてゐた。

先づアンソン夫人が起ち上つてさも嬉し相に挨拶した。すると次に珊瑚色の綺麗な長上着を纏つたマアベルが手を差し出し、そして黒味勝ちの美しい眼を擡げて嬉しさに勝誇つた様に私を見た。ヒックマンといふ赤い頭髮の鬚の

隣い男と、ウエルス嬢といふ名前で紹介された瘦せた骨張つた焦々した女とが、私の他のその日の客であつた。その男は私が入つて来た時疑ひ深い眼付で私を見てゐた。で私は最初から猛烈に彼が厭であつた。彼の顔は眼で深い皺が掘れてゐた。眼は大きく、唇は厚くてだらけてゐた。髪は赤くて少く、もぢやもぢやしてゐた。鼻は短く、左方の下顎には青黒い瘡があつてその跡を一層醜くしてゐた。もしも茲に最も物によく似た顔があるとするなら、彼の顔はブルドックに酷似であつた。實際、これまでは是れほど迄に醜い顔を見ることがなかつた。

が、彼はさも紳士らしい態度で話した。私が紹介された時、彼は威儀を正して私に挨拶した、がその時私は、彼が醜態な微笑を演らしたことも、私の背後に立つてゐるところのマアベルに侮蔑的な目くばせをしたことを見逃さなかつた。

彼は私達の、小さな内密話に氣付いてゐるのであらうか？ 彼は私達がケンシントン風致園の茂つた傍道を歩いてゐるところを窺つて見、そして私が彼女を愛してゐることを知つたのであらうか？

アンソン夫人の案内に應じて、私はマアベルと連れ立つて食卓に就いた、そして彼女の傍に腰を掛けた。その犬のやうな顔の男と焦々した女とは私達の向側に腰を掛けた。骨つばい顔付をしたその女は、彼には相當した道件であつた、彼女の背は板の様に眞つ直であつた、年齢は幾つとも見當が取れなかつた、髪は高く金切り髪で飾り掛ける時やうに熊立たしげに響いた。彼女は又左の手に澤山の環飾を嵌めてゐた。その環の一つには腕と象とがぶら下つてゐた。彼女が食事しなかつたなら、その腕や象に別に異状のあるわけはなかつた。が、食事が進行するに連れて部

屋が少し暖くなつて来た。で始末の悪いことには、彼女はそれ等の環飾と一緒に一本の扇を持つてゐた。そしてそれでパツパツパツパツと旋律的に煽ぎ出した。すると腕環の腕と象も躍り出した。彼女は又一方ではナイフとフォークとを荒げなく忙しげに使つた。でその度毎に起るジャンジャン、チンチンといふ騒がしい音は扇の音に交つて、卓上の話には少しも聞き取れなかつた。

私はアンソン夫人が好きであつた。母親としての態度に冷静な型で、世間的で強情で、すべて世間の法式を金科玉條と心得てゐて、實際にも世間並といふことで自分の荷物を重くしてゐるやうな性ではあつたが、兒どもには温い愛情を持つてゐて、絶えず彼女の幸福を祈つてゐる様に思はれた。彼女はルトスの音を非常に微に聴き取つて話した。で最初大佐の家で會つた夜、私は彼女をスコットランド人か、さもなければ外國人であらうと怪しんだ位であつた。話が旅行のことに移つた時、私が焦々した女に質問を掛けると十二月にはリキエラに行く意りだと答へた。するとマアベルが云つた――

「私はおつ母さんにもいらつしやいつて勸めてゐますの。カンヌやニスに較べるとロンドンの冬は退屈で鬱めですわ」

「彼女はリキエラをよく御存じの體ですね」私は云つた。

「え、よく知つてますわ」彼女は答へた。

「おつ母さんとは南國で四多を過こしたことがありますの。冬は「紺青の海邊」――フランス人が左様呼んでゐると

り——に及ぶ所はヨーロッパにはありませんね」

「私はイタリアのリキエラが一等好きですね」ウエルス嬢は金切り聲で云つた。彼女はその土地を誰も知らないのを無上の榮譽に思つてゐるらしかつた。「聖レモヤアラツシヨにおいでになれば氣候が同じ位暖かい上に空気がもつと澄み切つてゐて、物價も約半額ですよ。ニスやカンヌの宿屋は古びてゐて駄目ですよ」それからアンソン夫人を振り向いて附加へた。「貴女は昨晩おいででしたね、何りでした」

「私達はニスではいつもグランド・ホテルに泊りますの」アンソン夫人は答へた。「それは古びてゐるにはありますけれど、他の大きなホテルに比べて費用が掛らなくて結構ですよ」

「近頃リキエラ達は大層物價が騰貴した様子ですね。十年以前に私が矢張り多ニスに居た頃には今の半分の費用で過ごされましたね」とヒツクマンが云つた。

「私の云ふのは其説のことですよ」ウエルス嬢は喚びつた様に叫んだ。「そのわけは、フランスのリキエラの方がずっと物價が高いことです。そして英國人は、幸なことには、ニスを越えて二十哩も餘分に旅行を續けて行けば、物價もよく暮向も善く、もつと奇麗な空気が呼吸できて、謝肉祭などいふ俗っぽい事や、花合戦などいふ狂氣めいた事に苦しめられずに済むことですよ」

「まあ、ウエルスさん」マアベルは反論した。

「貴女は本氣にニスの花合戦をお賤しになるの——世界中にあんな繪物語のやうな光景は何處にもないと云はれて

るる位ですの——」

「花を買つて路傍に投げさせるための管らない策略に過ぎませんよ、貴女、感心を感んにしやうとする悪計にすぎませんよ」

一瞬が笑つた。

「では謝肉祭はどうなんです？」ヒツクマンが面白がつて訊いた。

「謝肉祭こそ」彼女は微笑ひした。「町の不秩序の醜態な曝露ですね。不埒な宿屋がうっかり者の外國人を擱けた體に入れやうとして廢物を出してゐるに過ぎませんよ。餘興と云はれてゐるのは皆、雇入れられた香具師が演つてゐるのですよ。あの聲帯だつて藝術的でないだけならいゝが、私はあれを見てゐると腹が立ちますね。又集會所の假裝舞踏會で初まる舞臺なんて、なんて品の悪いものでせう。眞事皆掃へご——ばかりで、冬期の訪問客を喜ばせる様な値打はありませんね」

アンソン夫人は一度だけ此の掃蕩的非難に同意しなかつた。又マアベルは、あの花合戦と紙金平糖の興事は、シナノ木の實や固い金平糖の小彈丸を投げ付けることが公に許される目には出て見る勇氣はないけれど、兎に角自分には面白くて耐らないと云つた。ヒツクマンも私も、マアベルに加勢して、ニスの毎年のお祭りは、實に世界無比なものだと口を添へた。

がウエルス嬢は自分の意見がどうもこはしな支離滅裂なものだなどとは少しも考へてゐないらしかつた。彼女は自

分は實は謝肉祭の舞臺會に行つたことはないのだが、實際にそれを目撃した二人の婦人に聞いたのだから間違ひなぞはないと云ひ出した。そして二人とも實に尊敬すべき婦人で、決して嘘を吐くやうな人ではないと云つた。

食事が終へて婦人達が退いて行くと、ヒックマンと私は後に残つてタバコを燻しながら雑談に耽つた。彼は實に醜い男には相違なかつた、彼は時々聞くに耐へないほど思ひ上つた、斷定的な話し振りをした。が接近してゐて監視めながら、私は遂にそれが彼の持前の態度であつて、決して腹を立てるには當らないものだといふ結論に到達した。實際、彼は私が初めて入つて来て紹介されて以來、次第に愉快な愛慕のいゝ男に見えてゐた。

「ウエルスさんの管らなさつたらありませんね」屏が閉まつた後彼は笑つて云つた。「何事につけても實に口汚いですね。宗教的隠微に關する厚薄な意見を述べに此處に遣つて來た様なものですね」

「何を論じてもてんで問題になりませんよ」私は云つた。

「貴方はニイスをよく御存じですか」ちよつと考へて見た後彼は訊いた。

「私は三冬後處で暮したことがあります」私は答へた。

「モント・カアロオは如何です」

「え、無論」私は笑ひながら答へた。「荷もニイスに行く人で、モンテイまで行つて五六枚の金貨を賭けて見ない人はないでせうね」

「お勝ちになつたのですか」

「左様々々一度に五千法せしめたことがありましたよ。何事行つたつて負たことはありませんね。私はいつもリキエラの銀行の金を取つて歸つて來ます」

「そりや實に慶賀に耐へないですね」彼は云つた。「私は又その眞反對なんです。いつも負られます。貴方はルーレットの仕掛けをよく御存じですか」

「いえ。皆詐欺ですよ」

「唯一つ例外があります」彼は口を挟んだ。

「だつ一つ一般の法則に基いたのがあります、それは唯根氣よくさへ行れば運が向いて來る機につてゐます。といふのは運を忍んで長い目で見なければ駄目なのですよ」

「もつと詳しく説明して聞かせて下さい」私はその錯誤のない仕掛けといふのに非常な興味を覺えて訊いた。私はまだ盲目にならない以前には、玉轉の「運」といふやつを研究して、で一番に無運のないと思はれる法則に基いて注意して賭て見たことがあつた。その結果勝つたのではあるが、實を云へば左様大した金額ではない、がそれでも、幾らかでも負けて仲間の報酬金を殖やしてやるよりかすつといふことには相違なかつた。

「その仕掛けといふのは」彼はキヌーラソオの盃を一飲みみ干しながら云つた。「少しもこみ入つたものではないりませんよ。始終氣を付けて賭博場を見てゐると、毎日一時、二時といふ風に大きな時間を時計が變む時に、一つ一つの色が變つて九回出て來ます。併して、肝鬱なことは、賭博の閑く時に賭博場について、赤でも黒でもどの色でも

かまはないから、一色取つて、それを賭ることで、そして終ひまで金を積んで置くことです。もしも賭たその色が八回連続に出てきたなら、そして元金を二十フラン賭てゐたとするなら、その賭博場だけで、二千五百六十法郎かゝることになります。それから指一本解れてはなりません。その色は方則としては、一日に九回連続に出て来ることになつてゐます。そしてそれが一週間続きます。無論これは勝負の初め頃か、さもなくば賭博場が片付けられる頃にあります、だからこれには非常な忍耐と不慮の注意が要ります。今日九回出て来なくとも、明日二度九回出て来ることもあるかも知れません。そして大抵一週間に七度、一日に一度といふ割合に平均して行きます」

彼の時は確に新奇なものであつた。彼は自分では我慢が出来なくてやつて見たことはなかつたが約一週間連続してゐた。賭博場から云つて、その法則に洩れた場合は僅に二三回かなかつたと云つた。

約三十分の間、彼は着意な賭博者のやうな態度で、賭博に臨する彼の研究の結果を説明しながら、得意になつて坐り込んでゐた。そして私は賭博の法則を會得したことを感心しながら耳を傾けてゐるのであつた。が遂に二人は葉巻を下に置いた。そして彼は私を婦人達の待つてゐる客間に連れて行つた。

部屋は大きく奇麗で、高雅に裝飾されてゐた。二つの大洋燈が照らされてゐて、鏡の裏の取られた巨大な窓の下から柔かい光りが洩れて出てゐた。マアベルは大ピアノに向つてゐた。彼女の黒褐色の巻毛の中の金剛石は、煙囪の光りに輝かされて星のやうに美しくキラキラと輝いてゐた。私が入つて行くと、彼女は振り向き微笑を以て迎へるのであつた。

私はその隣り部屋を見送した。すると次の瞬間、私はビタリと呼吸の止まるのを覺えた。恰も全身に冷水を浴びた如く慄然として其處に突立つた。

私は自分の眼を凝つて見た。意外と云へば意外なことだ！が最早疑ふ餘地はない。

家具の位置と云ひ、部屋の飾りと云ひ、私がそんなにも驚かされてゐる女の家に、曾て鏡に映るを以て模索したことのあるこの部屋があらうとは——この部屋こそあの恐ろしい不思議な犯罪が行はれたところなのだ。

第十五章 私の見たもの

「まあ、何をそんなに話していらつしやつたの——マアベルはピアノに向つたまま、振り返つて叫んだ。

「實はヒツクマンさんからモント・カローの銀行を破産させる統制な方法をお聞きしてゐたのですからね」私は彼女の傍の低い肘掛椅子に沈み込みながら答へた。

「さう、ヒツクマンさんが！」彼女は早速ヒツクマンを振り返りながら云つた。「では私にも説明して聞かせて下さいなリキエラに行つたら試して見ますから」

「マアベル」と彼女の母は叫んだ。「貴女なぞのことぢやありません。賭博なぞおつ母さんはお許しすると云つた覚えはありませんよ」

「でも飛切面白いに相違ありませんわ」彼女の娘は云つた。

「勝てばすがね」私は口を添へた。

「無論ですわ」と彼女は附加へた。そして再びヒックマンを振り返つて、彼が私に説教したと同様な新奇な過誤のない仕組を彼に説明させた。

が、私はその話を中途で聞き通して仕舞つた。といふのが、その時四邊の物音を一つ逃さず聞き取らうと、一生懸命に耳を澄ましてゐたからである。恐怖に打たれた時のやうに、硬くなつて其處に坐つてゐたこと、誰の言葉にも不愛想に單語で答へてゐたこと、そして自分でも顔に血の氣が無くなつてゐることを本能的に氣付いてゐたこと——を私は今でも覚えてゐる。事實この覚えは、私には全然豫期してゐないものであつた。

部屋にあるものは、一つとして私が驚て心に描いてゐたまゝでないものはなかつた。先づ何にも使して私の心の印象を具體化してゐるものは、手觸りの鮮かな日覆であつた。

家具は滑らかな手觸りで察してゐた通り鍍金がされてゐて、緑色と鈍い赤褐色の混り模様で巾着く繰取られた、艶澤な鏡櫃で覆はれてゐた。敷物は薄黒く、響が厚くて、響音を立てずに歩くことが出来る位であつた。三つの長い窓は家具のと同様立派な鏡櫃の窓掛で被はれ、私が盲目の手探りで探し當たと同時に、高い天井から床の隙まで透してゐた。又暖爐の前には熊足と腕をそのまゝの大きな虎の毛皮が敷き攤けてあつた。それは私の記憶に最も鮮いものであつた。

私は一言も聽しないで、息も吐かずに其處に突立つた。一つとして私の記憶のまゝのものでない物はなかつた。私は一生を通じて、この時ほど驚愕に氣の顛倒したことはない。

私のすぐ傍には一臺の大きな楊臥があつて、その中央には緋で出来た磨草模様の油除けの蓋被が掛けられてゐた。その臥榻は他の家具と同じ鏡櫃で被はれてゐた。で、私は何氣ない風を裝つてそれに觸つて見た。同じ手觸り、同じ大きさであつた。位置も亦變つてゐなかつた。

私はあの時、部屋で思はしい悲劇が演ぜられてゐる間この臥榻に凭り掛つてゐたのだ。私の頭腦は過熱した。私は眼を開いた。暖爐の上の、少女が襤子に吊るまつて揺れてゐるところの大時計は、あの恐ろしい夜をそのままに、低く、が音響的にコツコツと鳴つてゐた。響を背けて腰を掛けて眼を開いた瞬間、あの夜の記憶はありありと私の眼前に浮び上つて来た。ガチャガチャと何かの跳ねる音、女の叫び聲、響いて奥の部屋で起つたところの恐怖に打たれた叫喚、女袴の襷の響、襷の打おろした手甚しい打撃、それ等が一々聞えて来るやうに思はれる。そしてその時滴つて来た犠牲者の生温かい血は今も私の手に感じられる様に思はれる。

マアベルが突然鏡櫃の上に白い手を走らせた音響のために、私は初めて自分に懸つた。遂にあの不思議な悲劇が演ぜられた而もその家を覆つたのだ。これを手探りに何としたら謎を解くことが出来るかも知れない！

私は臥榻の上を横つと見時めた。中央には四角い、暗緑色の油除けの蓋被が置かれて、而も取れない様に留付けられてゐる。幸なことに、私の立つてゐる場所は蓋になつて居り、そして丁度その時マアベルがピアノを

弾き初めたので、私は——ひよろひよると——立ち上つて、壁の上の空に直した。そして、マアベルが「トワロダ
アール」の中の曲を弾いてゐる間に、誰にも気が付かれない様に、鏡に鏡ひ付けられてある油除けの蓋彼の鏡目を解
き切つた。それから私は、極自然な動作で、その蓋を鏡に滑らした。

音楽が歌んだ。で、察察に一生懸命になつてゐたのにも拘らず、私はマアベルに向つて、一糸も解れずに弾き終つた
彼女の腕を讀めた。ヒックマンは彼女の傍に立つてゐた。二人は次に弾く曲を探し初めた。その間にウエ
ルス嬢は又誰と象とをチャラチャラ鳴らしながら振舞つて私に話し初めた。このために、勿論、私は邪魔をされて仕
舞つた。が、十分暇も経つた後、私は立ち上り壁に鏡に向いて鏡になつた蓋を伸ばしながら、それを持ち上げてテラ
リとその下を見た。

忽ちにして鏡は明かにされた。その四角な蓋の縁色の腐草の下には、鏡の上の大きな暗褐色の汚點が隠
されてゐるのであつた。これをそ、心臓を二撃の下に突き送されて隠れた、あの殺せた立派な身長の殺人者の血痕で
なくて何であらう。

私は思はずに逃げ上つた。が、その時、鏡の縁をのけに伸べ直して、何喰はぬ話をして、そして何か他の心遣りの
話を見付け出さうと考へながら、鏡の縁を離れて行つた。黒い大理石の蓋の上には、ナポリの美しい彫刻の小像が突立
つてゐた。通り過ぎながら、私は鏡とそれを見た。それは私が願つて見たのと同じ鏡であつた。そしてあの鏡らし
い光と暗い位置になつた。

再び振舞つた時、臥床の鏡に投げ下された大きな鏡蓋が私の眼に入った。それは疑ひもなく、鏡物の上の血痕
を隠したものに相違なかつた。

思はしい卑怯な暗殺が行はれた所で、私達は上流の家庭に送し、一夜を静かに過してゐたのだ！ 幾度も幾度も、
私は私が見付け出した物は、唯徒らな想像力から起つた幻影にすぎないのだ、と自分に云ひ聞かせて見た。が、微細なも
のからまで湧き上つて来るところの事實をどうすることが出来よう！ あの知らない男は此の部屋で打殺されて仕舞
つたのだ。血痕が何よりもそれを證明してゐるではないか。

私は、使用されてゐる高い洋燈の傍に立派な枝付洋燈——電氣洋燈が天井から下つてゐるのを見た。そして
又、私は扉の隣に開閉器があるのに気が付いた。それはあの夜暗殺者が部屋を出て行くに當つて捻つたのと同じ開閉器
に相違なかつた。

又、部屋の一端には折戸があつて、カーテンで隠されてゐた。エドナ、抑も彼女は何者であらう？ あの不思議な
エドナが入つて来て、再びシャンマンの鏡を抜く音と女の突き出す様な叫び聲がしたところの奥の部屋に行つた
のは、是等の二つの扉を通り抜けてゐたのだ。

その時マアベルが話し掛けたので、私は元の椅子に再び沈み込んだ。彼女の眼は美しかつた。私は返事が四泥濘泥
になり勝ちなのを氣づかつた。

「貴方今晩はどうかしてゐらつしやるのね」彼女はピアノから立ち上つて私が彼女のために隠されて置つた低い椅子

に腰を却しなからいつた。「何處かお悪いんぢやなくつて？」

「どうしてよす？」私は笑ひながら答へた。

「何故つて少し顔色がよくないのよ。どうなさつたの？」

「何でもないんです」私は出来るだけ無頓着に云つた。「少し頭痛がしたものですから。でももう復りました」

私は絹縮天鵝絨の緑いカーテンの上に眼を映した。どんなにその向ふの部屋に這入つて見たく思つたらう！

その瞬間彼女は手巾を取り出した。すると甘い匂ひが漂つて来た。あの不思議なエドナが使つてゐたと同じ西班牙

乳香の匂ひであつた！私は美しい彼女の肌の香りと混り合つたその香水の匂ひを心ゆくまで吸つた。

次の日は彼女の音楽の稽古日に當つてゐたので、私はいつもの様に護送の役を勤めさせて貰つてもいいかと彼女に訊いた。

「ほんとに御深切ね」と彼女は應へた。「でも餘りお暇を掛けて済みませんわ」

「いえ、ちつとも」私は口早に云つた。「お件をさせて頂くのが何より愉快なんです」

彼女はほく笑んだ、がすぐ又云つた――

「明日はお母さんと一緒に訪ねて行く所がありますので、ハノヴァ廣小路には行かれないだらうと思ひますの」

「では明日は少しもお目に掛れないのでせうか」私は落膽して云つた。

「ええ、左様思ひますの」彼女は答へた。

「實のところ申し上げると、明日から四五日の間は、どう何處に行くのか自分でも身の振方が分りませんの」

「でも、お空きになりましたら、お手紙を戴かせようか知ら」

「宜しう御座いますわ」彼女はほく笑みながら答へた。

私は努めて彼女に約束させようとした、が彼女は唯天の様に呷くだけであつた――

「私達の會合は秘密なのですから、他の人に聞かれてはなりませんわ。話題を轉じやうぢやありませんか」そして彼女は最近に出た小説に就いて論じ初めた。私は傾聴した。

「お話を承はつてゐると、作家でなければ批評家としてお立らになつたことがある様に思はれますね」私は云つた。

「所謂問題小説、對話小説なんて我國でできませんわ」彼女は言葉を續けた。「誰でも卑猥な問題を要求するなら、不健全極まるテーマを編み出して、寫實主義者など、自惚れてゐるフランスの一部の小説家の作品に二三シリングも投することですわ。英國の世紀末的作品にも感心しませんね。そんなものよりかも、愛を、又は冒險を、又は傳奇を取扱つた古典的な作品の方がどれ位優でせう。英國の作家達は、曾てフランス作家の文體を隨從して陥つたことのある過失を繰返さうとしてゐます。そして正統派の小説に就つて筋を運び、最初の二頁から最後の頁まで讀者を喜ばせ讀者を遣すまいとしてゐます」

彼女の云ふことは一々急所を突いてゐた。私は賛意を表した。が此の彼女の論は、ヒツタマンと他の二人の婦人達が私の向ふ側で話してゐる間の、小聲な内所話の交換を避けたために他ならなかつた。

私は、あの夜半の静寂を破つて女の叫び聲が聞えて来たところの、隣室の襦子が知り度でならなかつた。が、入つて行く何かの方法を請じやうと思つても、是れといふ好い考へも浮んでは来なかつた。客の身分、而も初めて招待された客の身分として、女主人公の家を迂回つき廻る、といふわけには勿論ゆかなかつた。又一家の潔切を裏切るといふことは、好んで嫌疑を受ける様なものであつた。靴れにしても、首尾よく詮議しおふせるためには何よりも先、極度な用心が必要であつた。

隣室の上の大時計が十一時を打ち終つた。すると、部屋のいま一つの時計が、それを真似るかのやうに續いて打つた。と、その時突然、アンソン婦人は一冊の本を手にしながら、娘の方を見わたしていつた――

「マアベル、眼鏡を書齋の机の上に置いて来ましたよ。御苦勞だけど取つて来て下さい」

その瞬間、私は機会を逸しなかつた。で飛び上りながら取つて来やうと申し出た。すると、最初彼女がそれを拒んだが、私の決心の固いを見て云つた――

「書齋つて隣室のことですの、その。机の上に置いてありますから。おつ母さんはいつでも机の上に掛つたらかしてありますの。でも貴方をお使ひするなんてほんとに不可せんわ、ベルを押してアーノルドに左様云つてやりませう」

「いよんです、いよんです」私は早速眼鏡を探しに行つた。

第十六章 奥の部屋

隣室といふのは家の表側にあつた――何方かと云へば狭い方の部屋で、一方には書物が並べてあつた。が、壁と壁といふよりも寧ろ婦人部屋とでも云ふべきで、五六脚の安樂椅子があり、仕事臺があり、一方の隅にはピアノが置いてあつた。あの夜、あの不思議な彈奏者がショパンの「夜想曲」を弾いてゐたのは間違ひもなくこのピアノに向つてであつたのだ。私は部屋中を見廻した。家具と敷物は塵れ色褪めてゐた。本は汚れて明かに使はれないまでもあつた。何も彼もが掃除もされない汚れくじつたままで、他の部屋のやうな行き届いた美しさは何處にも見られなかつた。眼鏡は、アンソン婦人の言葉通り、花梨木製の小机の上の吸墨器具の傍に在つた。私はそれを取り揚げて、一わたり廻つた後部屋を立去らうとした。と、その時突然、扉の隣の書齋の本の上に小さな本のあることに気がついた。

人名簿の奇妙な事件が私の心に浮んで来た。で私はその小冊子を取り下して開いて見た。推察は遠はずそれは實際の人名簿であつた。その中には、所有主の名前らしいものは一つも書かれてない代り、澤山の他の名前が記入されてあつた。私は大急ぎで私自身の姓名及び誕生日の記されてある頁を繰つて見た、が何處にも見當らなかつた。

私はその小冊子を手にしたまゝ、思案に耽りながら突つ立つてゐた。私の名前が記されて無いといふことは、甲か、でなければ乙のことを隠してゐた。即ち、私があの時署名したのは人名簿にはなかつたのであるか、又は人名簿にだとするなら、他のいま一冊の人名簿がないと云はれない。乃で、その上の思案は後、こととして、第二冊日の名簿の有無を取り調べやうと決心した。

斯う考へて、私は家具の位置を一々記憶に刻み込みながら再び部屋を廻つて見た。ピアノの傍らに一枚の樂譜が散

ばつてゐた。で拾ひ上げて見ると、それはあの悲劇の夜に弾かれたショパンの『夜想曲』の寫しであつた。表紙は半ば千切れ去つてゐた。が、裏紙の裏下に隠かしてよく見ると、その上には明かに小さな血痕らしいものが認められるのであつた。

最早此の家が怪しい家であることに疑ひはなかつた。盲目な運命の神が私を伴つて来たあの夜、四五人の人間がシヤンペンを飲んでゐたのは此の部屋であつたのだ。男の驚嘆の叫び聲に連れて女が(多分)殺されたのも此の部屋であつたのだ。此の部屋に對して何か嫌惡の情でも抱いてゐるかの様に、打ちやらかして埃だらけのままにしてあるのも、不思議だと云へば不思議である。が長く止まつてゐるわけにも行かないので、私は客間に歸つて来てアンソン夫人に眼鏡を渡した。

私の居なかつた間に、ヒツクマンはマアベルの所に遣つて来て、彼女の傍らに坐つて夢中になつて話してゐた。で、秘は仕方なくアンソン夫人とウエルス嬢の所に腰を掛けて話した。が、間もなく私は再びマアベルの所に歸つて来て、そして會合の約束を再び彼女に迫つた。

『お手紙を差し上げる方が私にはずつと好都合ですわ』彼女は聲を落して答へた。『既に申し上げた様に、訪問しなければならぬ所や、名刺を置いて來なければならぬ所が澤山あるものですから』

『お母さんのお話だと、土曜日の晩には貴女がウエルスの若様から招待されておいでになるから、一緒に從いて行つてはどうかといふのですけれど』と私は云つた。彼女の眼は輝いた。彼女は私の申し入れを喜んでゐるに相違な

かつた。が彼女は私が退屈してはいけなからと云ひ出した。

『退屈なぞ!』私は驚愕返しに云つた。『どうして、まあ、僕が貴女のお伴をして退屈なぞ覺えたことはありませんよ。でなくつて、反對に貴女を退屈にはすまひかと案じてゐるのです』

『そんな事はありませんわ』彼女はきつぱり云つた。『私は此方で退屈に思はれる人には直ぐ暇を呉れてあげますの。お母さんは非道いと云つて非難しますが、私しそんな人達と我慢して交際してゐますと、積極的に侮辱を蒙せずにはゐられないんですもの。お母さんが土曜日に一緒に招かれて行くやうにつて云つたのですか』

『左様なのです』私は答へた。『ですがその前にお目に掛けることは出来ないでせうか』

『到底も覺束ないことですね。そんなこと云はないで、土曜日の晩を面白く過ごさせよう』

『でも公園を歩つて行くのが何より愉快ですね』私は自暴になつて云つた。

『私も左様思ひますの』彼女は淡泊に肯いて云つた。『でも今週はどうしても都合がつかないんですもの』

この時過去二年間餘りの間考へ抜いたところの問題を彼女に質して見やうといふ考へが偶と私の心に浮び上つて來た。

『貴女は無識、すぐ近くに被居るのですから、アールス・コートの博覽會は御覽になつたでせうね』私は云つた。

『唯一度切り行きましたの』彼女は答へた。

『二年近くも茲に家を有つてゐるのですけれど、博覽會なんて餘り氣が進まないものですから。私の行つたのは』

したの、なんでも花園が美しく電燈で飾つてあつたやうに思ひますわ」
「左様、あれは美しいですね」私は云つた。

「花園は例外ですが、パノラマの景色も美事ですね。鋸歯状の山脈があつて、その上を自衛隊が走つてゐるところを御覧になつたと思ひますが。あの雪を戴いた青や灰色や紫色の山脈は、アルプス山脈や、ピレネー山脈や、ロツキイ山脈や、アトラス山脈や其れ五六の著名な山脈のつもりで飾られてゐるのでせうね」
彼女は肩を揺りながら笑つた。

彼女の返答によつて、私は彼女の口から最も重大な事實を、即ち此の家が二年近くも彼女の親家であつたといふ事實を獲た。するとあの悲劇のあつた當時も、この家はアンソンの夫人の所有物に相違なかつたのだ。

レースと装具との柔い服装をし、珊瑚色のけばけばしい化粧をした姿に見惚れて彼女の傍に坐りながらも、私は再び彼女が死んだ男の鉛筆の心容を知つてゐるといふ奇妙な事實を、振返つて見ないわけには行かたかつた。彼女は、その男が彼女の恋人であつたといふ私の暗示を承認してゐた。私達が今腰を掛けている、この場所に死んで居たのはつてゐたその男のポケットから取り出したところの、その小さな金製の鉛筆の心容は、その男に與へた彼女の愛の贈物の一つであつたのだ。

時を照るに連れて秘密は次第に眩ろしく常識なものになつて来た。が又それと同時に、彼女の傍に對つてゐる私心も、時を照るに連れて次第に深く彼女に感情を覚えるやうになつて来た。私は絶えず秘密を打明ける機を求め

てゐた。が又その一方では、もしも打明ければ、彼女が私から離れてしまひはすまひかと恐れもした。

あの厄介な通牒者から手紙を受取つた後でのグロスヴノー門での彼女との邂逅、悲劇が演ぜられた場所の發見、のみならずそれが彼女の家であつたといふ事實、而もこの部屋で、彼女の恋人であるといふあの上品な若い男が烈しく對つてゐる最中に一撃の下に打殺されたといふこと——是等は必死の闘ひがたい闘ひであつた。

けれども此の秘密故に彼女に對する私の愛情は少しも揺ぎはしなかつた。彼女に對する私の愛は既に既に熱烈なものになつてゐた。彼女を偶像として、私の全將來を懸つてゐるところの偶像として崇拜するためには、如何なる疑念が私の心に頭を擡げて來やうとも、私はその疑念を投げ遣つて、彼女の卓越した美の神祕の前に跪つき、懇げくことを辭さなかつた。

ウエルス嬢の迎への馬車が遂に遣つて來た。で彼女は腕飾りをチャラチャラ鳴らしながら大欠伸をして歸つて行つた。

それから十分餘りも居残つてゐた後、ヒックマンと私とは起ち上がつて離れの言葉を告げた。そしてマアベルに外套を着せて貰つた後、私は彼と連れ立つて戶外に出た。

空は牙え透つて星ばつてゐた。空気が爽々しかつた。家々左に曲ると、私達は間もなくボルトンと呼ばれる楕圓形の奥まつた此の界隈への入口の道に出て來た。標札にはギルストン街と記されてあつた。私が馬車に乗りこされたのは此の街角のあたりに相違なかつた。私は振り廻つて見た。そして私達が今出て來たばかりの家の食堂で

なら、此のあたりの御上のどんな出来事でも手に取るやうに見受けられることを知った。私はエドナが私の災難を食堂の窓で見たと云つたことのあるのを思ひ出した。

その夜の不可思議な運期しない神見のために、私の頭腦は種々雑多な概念で一杯になつた。でヒックマンと一掃に歩きながらも、彼の笑しげな出任せの嘯りは私には少しも聞えなかつた。彼は遂に云つた――

「貴方は確にどうかしてゐますね。マアベルさんのことでも想へてゐるのでせう、左様でせう」

「いえ、なに」私は彼の言葉にどぎまぎしながら答へた。そして附加へた「他の事を考へてゐたものですから。つい失禮して仕舞ひました」

「マアベルさんに就いての御意見を伺つてゐたところなのです。素的な美人だとはお考へになりませんか」

「無論」私は氣を取り繕ひて云つた。「美しいですね」

「素晴らしいピアノリストでもあるですね」

「素的ですね」

「彼女が結婚しないのはどうしても不思議ですね」彼は云つた。「あれ程の美貌の持主でありながら、三國一のお望みでも出来さうなものだと思ふのですがね」

「彼女はまだ結婚したことはないのですか」アンソン一家とは明かに對聊であるらしい此の男から、彼女の身の上を聞き出さうと考へて私はすかさず訊いた。

「いえ、一度も。一二回小戀愛事件があつたと聞きましたが、眞面目な沙汰ではなかつたのでせう」

「彼女と結婚する者こそ幸運兒ですね」私は極も非常な好奇心を裏み隠しながら云つた。

「幸運兒ですね」彼は躊躇返しに云つた。

「種々な點で私も左様思ひます。彼女の様な美貌と高貴な品性の持主に取つては、嘆美者なしに慕しく行くことは唯の一週間あり得ないこと、見えますね。でも、私は偶としたことから、彼女が笑顔も見せないでその嘆美者等を遠くへ行くと聞きました」

私は彼の言葉を聞いて微笑んだ、そして自分限り例外として取扱はれてゐることを喜んだ。が暗殺者の短刀に懸れた犠牲者が彼女の戀人であつたといふ承認の言葉を想ひ馳して、私は極よくその事實を確めやうと、話をあとに反して云つた――

「彼女が小戀愛事件を有つたといふその男は誰なのでせう――聞かせて置くわけには行かないでせうか」私は訊いた。

「知りませんね、といふのが彼女が英國に來て棲むやうになる以前に起つたことですから」彼は答へた。

「では外國でお聞きになつたのですか」

「ナラリとね。私達は偶としたことでリキイエラのボオで會つたことがあるのです」

再三私はマアベルの以前の戀人のことに話を戻さうとしたが、彼は實際に知らないのか、でなければ故意にか、その話を避けた。彼は又アンソン一家に對する忠實な心から友達として打明けられてゐる秘密を洩らすまいとするか

私達は彼の葉巻容れから新しい葉巻を取り出して火を点けた。彼は大肘摺椅子に腰を傾すと、眼鏡をつまみ上げて、感しきりに、落合つたことを喜ぶ旨を述べた。

「出来ることなら」と彼は附加へた。「度々お會ひしたいものです。が僕の心附も取つて呉れ給へね君、そしてマアベル・アンソンの戀の奴隷にならない様にして呉れ給へ」

チャンニング同様、何故彼が此の警戒の言葉に力を入れるのか、私には不思議でならなかつた。彼自身彼女に戀してゐて、私を新に現れて来た戀の手と見做してゐるのかも知れなかつた。實際此の考へは、彼の言葉を聞いて私の心に起つて来た最初の印象であつた。斯う考へると、私の心に漠然として憎惡の念が蠕まつて来た。初めて紹介された時の敏捷な不吉な視線は今猶ほ私の記憶を彷彿つてゐた。

「僕には何故貴方がそんなに繰返して私を驚しめるのか解りませんね」私はさも興味ありげな風を装つて、笑ひながら云つた。「彼女を戀するなんて、有りさうもないことぢやありませんか」

彼は返事をしなかつた。そして唯葉巻を口に嚙んで、煙のヴェルの中から皮肉に微笑んでゐた。

私は葉巻を再び口に嚙んだ——彼はハヴァアナの鑑識家であると思へて、素的に好い煙草であつた——が、それを口に入れて舌に巻き付けた瞬間、私の舌に觸れて来るものがあつた。何か雜草のやうなもので、私はその尖端にチクリと刺された様に感じた。直線私はそれを口から出して仔細に睨ながら云つた——

「この葉巻には針が入つてゐますね。これ御覽なさい——」私は、その尖端を護身用の短刀で切つて、その傷口を彼に

示しながら云つた。それは針ともピンともつかない細い尖頭であつた。

「訝しいですね——」私の手からそれを把つて注意深く吟味しながら彼は叫んだ。

が二分間も経たない中に、私は奇妙な感じがのろのろと這ひ絡はつて来つゝあるのを知つた。悪寒が背筋を走り下つた。私の舌は口一杯に腫上つて来つゝある様に思はれた。頭腦はぼろつと燃え上るやうに感ぜられた。

「ああ……—」私は驚いて跳び上りながら叫んだ。「さては、毒を盛られたんだな——」

「馬鹿な——」と彼は笑つた。彼の聲は遙の遠方で響いてゐる様に思はれた。そして私は彼の犬のやうな聲が、次第に惡魔の形相を帯びて来るのを見た、彼は藥つと私を見詰めてゐる様に思はれた。

不意に眩暈が起つて来た。烈しい痙攣が頭から爪先まで全身を射貫いた。感覺はぐるぐると廻り初めた。私は何物も瞭然と見ることが出来なかつた。ヒツタマンの醜い顔は、朦朧とした血のやうに紅い霧の海の中に、斜めに委お消して行くやうに思はれた。

この同じ瞬間、私の血液は恐怖で凍えて什舞つた。何故なら私は、此の舌の擦過傷が彼の兇惡な黒智で豫め計畫されてゐたものであること、而もその針の尖端には効果の迅速で確實な毒藥が置かれてゐたに相違ないことを確く信じたからであつた。總てのことが分つた、が今となつては、噫——既に晩かつた。

私は烈しい叫び聲と共に、両手を伸ばして身を支へやうとしたがひよろろと跟めきながら虚空を掴むに過ぎなかつた。

それから不思議な、全く説明することの出来ないことが私の身に振り掛つて来た——曾て人間の身の上にあつたとは思はれない不思議なことが振り掛つて来た。

第十七章 大理石の手

狡猾にも巻巻の中に隠された針にひつ撞かれて、微かな擦過傷を受けた後間もなく、私は全然意識を失つて仕舞つた。その事實に就いては疑ふ餘地はなかつた。私が今にして想ひ起すことの出来るのは、夢の中の影のやうに、曇された、微な思ひ出である。私は驚いて叫びながら、襲ひ掛つて来るところの腫氣と力無さに烈しく挑み掛つたことを覚えてゐる。私が記憶してゐる最後のことは、私の腫を悪魔のやうに獲手見詰めてゐたところのヒツクアンの醜い顔付である。彼の凄惨な笑ひは犬のやうな腫を一層見苦しくしてゐた。そして彼の克謗つた様な笑ひ聲は、彼に殺意のあつたことを明かに示して私の耳に響いて不調和に聞えて来た。

彼に接近して行かうとした瞬間、私は彼から手越し打撃を頭蓋骨の天邊に受けた様に思はれた。そのために感覚が鈍つて来たので、私には力なく、襲ひ掛つて来るところの不思議な眩暈にも抵抗することが出来ないで、あの汚い部屋の上の無感覚に、丸太のやうに力なく倒れて仕舞つたやうな気がしてゐる。

私の頭腦に打寄せて来たところの最後の考へは自分が敵の手中に力なく倒れてゐるといふことであつた。このヒツ

クマンといふ男に對する私の最初の評價は間違つてゐなかつた。私は自分の本能の警戒の觸きに耳を傾けて彼を避けなかつたことを後悔した。彼は悪い目的——出來得べくんば、私までも、あのザ・ボルトンスに於ける恐ろしい夜に斃され、若い男と同様な運命の下に置かうといふ目的で、彼處に誘き寄せたものに相違なかつた。

普通の針に舌を刺された位であれ程の電力的効果を得られる筈はなかつた、してみると、その尖端に何か劇薬かさもなくば毒薬が塗られてゐることは確かであつた。

その薬巻の装置といふのは斯うであつた。煙草が唾液で濡されるに連れて、中に入れてある針金が次第に舌の方に下つて来る様になつてゐる、一方又熱が加はるにつれて、針金に差つてあるものが液體になる様になつてゐる。で、私は疑ひもなく、狡猾な策略の犠牲になつたのであつた。

が、此の空虚な心の状態は、左程長い間のことではなかつた様に私には思はれる。私の知つてゐる總てのことは、周圍に起つた出來事に對しては一切無知であつたこと、従つて、その後そのうす暗い家の中で、或は何處か他の所で起つたことに就いても何一つ知つてゐないことである。而もその出來事といふのは、全く前代未聞の奇怪な性質のものに相違なかつた。

私は自分の感覚の暗黒時代は左程長い間のことではなかつた様に思はれる、と前に云つた。實際、今から平靜に振舞つて見ても、私は自分の無感覚である間が、時間にして二時間、長くて三時間餘りであつたことを茲に斷言したい位である。私達が睡眠から覺めたとき、陽の光りに依らずには時間は定め難い。目覺めた後も猶ほ四邊が暗いとするな

ら、時を計ることは仲々困難なことである。恰もそれが私の場合であつた。頭蓋骨の天邊に重苦しい疼痛を覺えながら、私は世界を出来るだけ瞭然意識しやうと悶悶した。

眼を睜いて先づ第一に私の心に浮んで來たのはヒツクマンに就いての考へであつた。次に長い間無感覺であつたことに對する驚愕の念が起つて來た。何故なら私が隠されてゐる針に舌を引掻かれたのは夜中の二時頃であつた。そして突つ掛かつて行かうとしたところをしたゝかに頭蓋骨の上を擦られたのであつたが、今、私の眼蓋の數物の上には太陽がキラキラと射し込んで、黄金色の光線の中を塵屑が舞つてゐた。

確にと私は考へた、十二時間近くも無感覺であつた筈はないのだが。

頭蓋骨の痛みは劇しかった。私は創口に手を遣つて見た、創口には血が出てゐた。大分手越く打られたなと思つたが間もなく、大した變傷ではないことが分つた。

最初、私の頭蓋は織花で裏まれてゐるかの様に、混雜し惑亂してゐた。途方に暮れて、私は漠然と經過した時間のことを考へながら數物の上に横たはつた。日光はざらざらと眩しく私の眼を射た、で私は眼を閉ぢた。そして微睡んだ。が果して微睡んでゐたのかどうかは判然としてゐない。私の覺えてゐる總てのことは、再び眼を開いたとき、頭蓋骨の痛みが多少快くなつてゐるやうに思はれたこと、五管の知覺感覺が大抵に正確になつて來たやうに思はれたことであつた。

私は數物の上に横臥しながら、知力の無意識な増進による注意深い努力を以て、しつしつと四邊を見廻した。

其處は見馴れない——全然見馴れない所であつ。私は本統に夢を見てゐるのではあるまじかと思ひながら、私は頭を擡つて見た。それから再び手を眺めた。左様だ。私が頭蓋骨に創を受けてゐること、又太陽の斜光の射し込んでゐる部屋に居ることは、最早疑ふ餘地のない事實であつた。

次第に四邊の物象が私の眼に見えて來た。が、視線を廻らす毎に私は微かな驚愕の叫び聲を發せざるを得なかつた。ヒツクマンの部屋といふのは倫敦人にはお馴染の、汚い見る影もない下宿の居間であつたのに、私が今居るのは、美しく飾られた立派な應接室で、長い二つの窓は廣い芝生に臨んで開かれ、芝生の彼方には高い木立の群が見渡された。私は其處から、咲き亂れた薔薇と、白い夏季用の外衣を纏つた婦人の姿とを芝生の向ふに見ることが出來た。

私が手足を伸して眺めたはつてゐるところの數物は、柔かな立派なものであつた。家具は黒檀で造られてゐて、佛蘭西の王朝時代の裝飾が施してあつた。又直ぐ傍には大ピアノがあつて、その傍の机の上には庭園用の婦人帽が置いてあつた。

私はその帽子を猜々と眺めた。それは疑ひもなく若い婦人のものであつた、といふわけは、柔かい黄い釋で出來てゐて、縁が大きく、垂れ低つて、頸紐が附いてゐるからであつた。私はその持主の美しい何れつばい姿を心に描いて見た。

部屋には又、カイロー製の絨や、アルチールズ製の象眼された小さな珈琲卓子や、中央露西亞邊りの百姓の手で造られた木彫のマドンナの像や、伊太利の彫刻や佛蘭西の近代の繪畫があつた。恰も世界漫遊の土産物が陳列されて

あるやうに思はれた。その所有主が誰であるにしろ、彼は明かに骨董品の価値を知つてゐる者で、遠く外國の市々から蒐集して来たものに相違なかつた。

扉が閉まつてゐた。そしてその上には、金織の青緋色の絹綿天鵝絨の幕が張つてあつた。が、唯一の私の不思議に思つた物があつた。それは私の眞跡の床の上に落ちてゐる、白い大理石で彫つた人差指を擲げた婦人の腕であつた。その腕は實物大で、明かに肘が折れてゐるのであつた。

私は探索を続けやうとして、たち／＼と起ち上つた。するとその時、直ぐ近くの壁の上に腕の折れたアポロの大理石の像のあるのに氣が附いた。

私は部屋の中央に立つて、四邊をぐるぐるに見廻した。チエルシーのあの怪しげな居間から、明かに田舎に相違ない此の家に移つて來てゐるといふことは、私にはどうしても解らなかつた。周圍の光景に驚いて私の頭腦は又もやぐらぐらと廻り初めた。私は帽子も冠つてゐなければ外套も着てゐなかつた。ズボンを見ると、それはどうやら私が前の晩に穿いてゐたのとは違つてゐるらしく思はれた。何か魔術のやうな秘密な方法に依る他は、あのチエルシーの臭い下着屋から此の田舎の別荘に運ばれて來た理由がない、と私は本能的に考へた。私に取つての緊急な重大な問題は、私が居るのは一體何處であるのか、又どうして茲に來たのかといふことであつた。

偶と私の眼は電鈴の押鈴の上に止まつた。私は早速部屋を横切つて行つて、象牙の釘を押した。何の物音も聞えなかつた。鈴は遠方の方で鳴つたに相違ない。して見ると、その家は大きな家に相違なかつた。

私は一心に耳を澄した。する／＼五六分間も経つた後電音が聞えて來た。扉が開かれて、灰色の鬚を生した相當な年配の下男が入口に現れた――

「お呼びで御座いますか」

「左様だよ」私は答へた。「僕は一體何處にゐるのだね、お願ひだから聞かせてくれないか」

彼はけ／＼な當惑したやうな顔付をしてデロ／＼と私を覗いてゐた。と見る見る驚いた様子をして、叫びながら私の方に駈つて來た――

「ど、どうなさいましたのです！ 頭に怪我を！ ぼら！ 血が一杯です！」

彼は、その瞬間、灰色の鬚を眞背にして、口を開けて私を見詰めたまゝ突つ立つてゐた。

「僕の質問に答へられないのかね」私は氣短に訊いた。「頭に怪我をしたことは知つてゐるよ。それを聞かうと思つてお前を呼んだんぢやないんだ。僕は一體何處に居るのかつて訊いてゐるのだよ」

私の鬚を見ている中に、その男の顔付は次第に恐氣立つて來た。と彼は一言も云はないで、臺地に部屋から飛び出した。彼が狂人のやうに叫びながら行くのが家の別な方面から聞えて來た。私は彼の狂態に驚いて立つてゐた。彼は妖怪でも見たかの様に私の前を連れて行つたのであつた。

149
が、それから四五分とも経たない中に、彼は三十位の立派な身装をした何方かと云へば容貌の美しい頭髮の黒い男と併れ立つて還つて來た。とその瞬間、後から來た男は私を見るや否や叫びながら駈つて來た――

「まあ、貴方、一體どうなさつたんです」

「頭は」と私は説明した。「あの痘痕面の無頼漢のヒックマンのためなんだ。彼奴は何處に居んだね」

「ヒックマン？」と後から来た男は驚き返して云つた。「ヒックマンて？ 誰のことなのでせう」

「ふん、何も知らない様だ振をしてゐる方が君の身のためではあるのだからさ」私は怒つて大聲に云つた。「が今に見給へ、殺人未遂の嫌疑、彼奴に逮捕状を突き付けてやるよ。昨晚彼奴は僕を殺さうとしたんだ」

「私には有仰ることが少しも了解できないのでございますが」とその見知らない男は應へた。

「無論僕は、君がその事件の遊覧者であるなどとは思つてゐるのではないよ」私は啞付く様に云つた。

「君に聞かせたのは、ヒックマンといふ名前で紹介された男に生命を取られかけたといふことなんだ。」

「此の部屋でゝはないのですか」
私は躊躇した。

「左様、此の部屋でゝはないんだ」私は首肯した。「チエルシーの或る家の中なのだ」

その若い男は下男と意味ありげな眼配せを取換した。

「チエルシーで？」とその若い男は繰返した。

「倫敦のチエルシーでせうか」

「倫敦のだよ」

「はて、それは訝しなことです」彼は云つた。それから下男を振顧つて云つた——

「ギル、醫者のブリテンさんの家に行つてすぐ呼んで來なさい。誰にもこのことを話しちゃいけないよ」

「宜敷うございます」下男は答へた。そして彼は早速部屋を出て行つた。

「君は僕の頭に縛帯を巻くために醫者を呼びに遣つたと思ふが」私は皮肉に云つた。「少し温い湯と、海綿と、汚れてゐないリンネルの布を持つて來、呉れさへするなら、僕の方が却つて適任者なのだから」

「いえ、いえ」と彼は云ひ張つた。「ブリテンが來るまで我慢してお待ちになつて下さい。すぐ遣つて來ますから。」

「いさき方家に歸つて行くところを見ただけですか」

「が、どうして僕は此處に來たのかね」

彼は驚きを混へた猜疑の眼で私を視ながらもちもぢしてゐた。

「私は本統に知らないのです御座います」

「そんな馬鹿なことが」私は不機嫌に叫んだ。「僕は半殺しにされた後で、傷つけられて出血で瀕り果て此の部屋に、此處に斯うしてゐたところを自分で氣付いたんだ。然るに君は白々しく僕がどうして此處に來たのかちつとも知らないといふ。君は嘘つきだよ——それだけは確だ」

「御挨拶です」彼は少し顔色を變へながら答へた。

「左様だよ、從つて君は時間を僕に聞かせるのも不費成なんだらう。あのヒックマンの無頼漢め、卑怯にも腹を飲

せたり頭を割つたりしただけでなく、懐中時計も割っちゃんだんだ」
彼は懐中時計を出して見た。

「二時半です」と彼は唐突に云つた。

「二時半！すると、十二時間以上も前に起つたことなのだ」私は云つた。

「ブリテンが早く来ればいゝに」その若い男は云つた。「俺はそんな創は見たくないな。そんな汚いところなど」

「暗闇の處が繁りむけてるに過ぎないんだ」私は気軽に云つた。「氣を付けて纏帯してゐれば一週間はすれば済むだらう。幸に骨は折れてゐないから」

「何にせよ貴方は大分湯煎しておいでになりますね」

「君だつて取り亂すだらうさ」私は云つた。

「僕のやうに保身に掛ければね」

遂に聲音が近付いて来て、老けた白い鬚の小さな男が入つて来た。軍人らしい態度と顔を嵌めたプロツクニートを着てゐるところを見ても、醫者であることが知れた。

「おやおや、これはまあ何としたことだ」と彼は騒ぎ立てて云つた。「さあ、腰を掛けて下さい」そして彼は私を椅子に引つばつて来て、自分でも私の椅子の端に腰を下した。

「頭を痛げられたのです。よく診て下さい」

「あ」と彼は、最初にまじまじと見て、それから起ち上つて頭を診ながら叫んだ。「悪い損傷ですね」彼は私が頭を痛みを覚える程も注意深く指で觸つて見た。「骨に傷みはありませんよ、骨には運が良かったのですね、運が。裂れる程の創ではありませんよ、——恐れる程のね。一體どうなされたのです」

「打たれたのです、今覚えてゐるのは唯それだけです」私は驚愕して彼の顔を覗き込みながら云つた。

「何か鋭く尖つたもので打たれた創ですね、乾皮」そして彼は避く暇もなかつてゐる處に思はれた。

「何で打たれたのか僕には分かりません」

「私の察するところでは、貴方はこれより前に、同じ場所に打撲傷をお受けになつたことがありますね。覚えていらつしやいませんか」

「いや、そんなことが」私は答へた。「一度馬に蹴られたことがあります、それは横の方だったのです」

「では子供の時にはお受けになつたので、覚えていらつしやらないのでせう」

それから、傍らに心配さうな顔付をして立つてゐる若い男と謎した眼くばせをしながら、彼の無精い視線は不意に彫像の折れた腕の上に落ちた。

「おや、これは何んです？」彼は叫んだ。

「是れを御覽なさい、ほら、此の大理石の指の上に血と髪とが附いてゐます。貴方は腕に通りがゝりに、此の大理石が裂れる程鋭く頭をぶつたのですよ。ほら、これを御覽なさい！」

私はその大理石の破片を見た。懸してその大理石の人間像には血が附いて、鬚毛さへもくっついてゐた。

「疑が解きましたよ」と彼は叫んだ。「證據をしなくちゃならない。そして靜かに懸んでいらつしやなくちゃいけませんよ。」

「が僕は、ヒックマンといふ男にチエルダーの彼の部屋で懸り倒されたんです。その男は僕を殺さうとしたのです」

「よう御座んすとも、よう御座んすとも」彼は私の氣味を取るかのやうに故とらしく云つた。「その事に就いては一伍し什の事をお聞きしてゐます。が兎に毎二階に行つて證據を致しませう。ギル」彼は下男を振附ながら附加へた「急いで當温い湯を持つて来てくれ」

そして彼は私の腕を把つて二階の化粧部屋に連れて行つて、其處で私の頭を洗つて大袈裟に證據をした。私には何も彼が分らなかつた。私は黙つて坐つてゐた。

第十八章 解き得られない秘密

「御心慰には及びませんよ。御心慰には」彼は證據を終つたとき囁まして云つた「靜かにお思ひにならぬのが何よりです、左様すれば早く快くなりますよ」

「が昨晚の出来事は一體何うなつたんです」私は云つた。「車に僕を騙し殺しにせやうとしたあの男は？ で、僕は證據を捕獲する手續をしやうと思ふのです」

「あ、あれですか、よく承知してゐますよ」彼はさも親しさに私の肩を叩きながら答へた。「が、あのことはお考へになつてはいけませんよ」

「御存じなら少し位説明して下さいませう」私は彼の態度に憤然として云つた。彼は私を小兒扱ひにしてゐるのであつた。

「私は、唯貴方がお話になつたことを知つてゐるだけです」彼は應へた。「全く不思議と云へば不思議な話です。ね。が貴方はお話の大部分が幻想であるとはお考へにならないのですか」

「幻想だと」私は怒つて起ち上りながら叫んだ「ブリテンさん——であらうと、貴方のお名前が何であらうと——これだけは確に云つて置きますが、幻想どころの騒ぎぢやありませんよ。脚の裏か何よりの證據ではありませんか」

「その癖は自分でなされたのです」と彼は落付き擲つて答へた。「貴方は過つて膨脹し圓突つたのです」

「それは信じられさうにもないことですね」私はうちつけに云つた。「何も彼も共謀なのでせうね。で貴方も仲間のものに買収されておいでになるといふわけですね」

彼は唇をすくめて、さも無念さうに灰色の睫毛を擡げた。

「私は貴方が災難にお遭ひになつたといふので呼ばれて來たのです」彼は云つた。「私は唯出來るだけの意見を申し上げ

げてゐるのです——安眠を保つて、過ぎ去つたことをくよくよと御心配にならないやうに。激烈な階級の闘争なので、貴方の頭脳は何よりも安眠を要するのです」

「ブリテンさん」私は驚乎云つた。貴方の曖昧なお言葉の意味が解つて来ました。貴方は私が正氣でないとはかり信じておいでになるのですか」

「いえ、いえ」彼は落付きはらつて云つた。「私は左様いふ着で申し上げたのではないのです。どうか誤解なさらないで下さい。私は階級闘争を保つておいでになるやうにお言葉添へをしたまでのこととして。實際四五日も臥せつておいでになれば、すつとよくなりになるのですがね——すつと快く」

「いや有難う、私だとして自分の心持位よく分つてゐますよ」と私は答へた。彼の態度が如何にも機に障つたからであつた。

「御尤もです。が貴方の忠告に取をお預けになるのは貴方のためではないでせうか」

「貴方の階級闘争は間違つてゐますよ——全然間違つてゐますよ」私は笑つた。「貴方は私のことを如何に解して責任の有てない男だと考へておいでになる。さういふ貴方の言葉に耳を傾けると有仰つたつて、無用ではないでせうか」

私は彼の語を注意深く耳詰りした、そしてあの薄黒い顔付をした若い男や、下町のギル、同僚、彼も文藝の頭脳が錯亂したものと考へてゐることを知つた。

「今一度申し上げますが、貴方は全く私を誤解しておいでになるのです」彼は言ひ留つた。「私は唯——」

「もう階級です、階級です」私は機を懸して部屋を出て行きながら怒つて叫んだ。錯亂してゐるとばかり私を思ひ込んでゐるところの、その階級家の老ぼれが眼でならなかつた。

階級の階級を下つて、家を賣いて走つてゐる階級に思はれる大きな廊下に来たとき、私はブリテンを呼びに遣つた。若い階級をしてゐる男に會つた。

私は此の自分のゐる不思議な家を探索して見やうと考へて彼と離れ違つて行つた。とその時、彼は私の方に近づいて來ながら云つた——

「ちよつと、階級まで來て暇くないでせうか」

「階級に？」私は面喰つて、彼を見詰りながら云つた。

「何處なんだね」

彼は直ぐ側の扉を開けた、で私は彼に従いて床から天井まで書物の並んだ、氣持好さうな部屋に入つて行つた。部屋の中央には紙片の散らばつた大机があり、そのすぐ傍には載めしげな事務用らしい小さな卓子があつた。「それで」と私は訊いた。「どんな用事があるのだね」

「今し方階級が参りました」彼は小さい方の卓子の撥斗を鍵で啓けながら昂奮して答へた。そして電報を取り出して私の手に渡した。

読まひながら、私はその傳寫紙を把つて文字に目を通した、次の様に書かれてあつた——

「今日大の姫き雷鞭をワンクローヴァアの支店より受取れり——ウキルフォード・ヒートン氏に夫の旨御報知ありたし、ドオソソ市のチャールス・モオソソは金銀を掘り當たり」倫敦、英國北米銀行。

「これが何うしたんだ？」私は驚いて眼を上げて彼を見ながら訊いた。「このチャールス・モオソソといふ男が誰であるにしろ僕には何故大急ぎでこんなことを通知して来たのか薩張り分らないんだ。一際僕に何の關係があるのかね」

「關係がと？ 御主人 關係がと」彼は吃驚したやうに私を凝視ながら云つた。「何か關係がおりになるに相違ないと私は思ひますがね」

「成る程、ではお願ひだから、どういふ意味なのか一つ説明して聞かせて呉れ給へ」私は云つた。「僕にはてんで分らないんだ」

「そ、わけと申しますのは」彼は極度な昂奮を裏切られながら云つた——「そのわけと申しますのは、ウッドフォードの報知が間違つてゐないこと、結局その鑛脈には黄金が澤山あるといふことなので御座います。要するに最も値打のある鑛脈の一つが手に入つたこととして、先づ百萬長者におなりになつたと云つても、間違ひのないところでございますよ」

「件々面白い話だね」私は興奮しながら云つた。彼は驚いてまじまじと私を見てゐた。

「今日は貴方は」彼は云つた。「いつもとは随分變つておいでになる様ですね。眼の痾のため大分煩はされておいでになりますね」

「いや、そんなことはない」私は跳びつく様に云つた。「僕の頭腦は君の頭腦同様明晰してゐるよ」

「では君は僕が誰だか知つてゐるだらう」

「知つてゐるどころぢやありません、貴方はウキルフォード・ヒートン様です」

「で君は僕を大金持だと云つたね」

「申し上げました。全く左様なので御座ります」

「お氣の毒ながら僕はちつとも金持ではないのだ」私は答へた。「君は始末におへない虚言者だね」

「でもモオソソは金銀を掘り當てたと云つて來てゐるのです」と彼は指示した。

「ふん金銀を掘り當てやうと、マイアモンドの鑛脈を掘り當てやうと僕に何の關係があるんだ」私は叫んだ。

「でも鑛脈の持主におなりになるといふことは、大したことの様に私には考へられるので御座りますがね」彼は落付き拂つて云つた。

「鑛脈を掘つて煩さいよ」私は急ぎ込んで云つた。僕にはその鑛脈つてことが一向解せないんだ。そればかりでなく、僕は鑛山師。それ係づらいたくないんだ」それから机の前の椅子に腰を掛けながら私は付け加へた。「君は僕の身の上を知つてゐるやうだね。で君の名前は何といふのだね」

「私の名前が御座りますか」彼は微笑つたやうな調子をして、茫然と私の顔を見詰めながら云つた。「おや、遠づくに御存じなと思つてゐましたのに。ゲツヂー——レヂナルド・ゲツヂです」

「で君は何を遺つてゐるのだね」

「貴方達の秘書役なのを御座ります」

「僕の秘書役だ」と僕は呆気に取られて返答返しに云つた。それから云ひ足した。「それ御覽君等は皆んなで僕を麻しに掛つてゐるのだよ。僕は秘書役なんて一人も置いてゐはしないよ——一度も置いたことはないよ。麻酔だの金銀だのつて喋つてるが、皆出鱈目にすぎないんだ」

「これはしたり」彼は小さな溜息を吐いて云つた。「左様お考へなら左様でもございませう。あの出来事以來少し驚におなりだとブリテンも申して居りました」

「ブリテンなぞくたばつちまへばいゝぢやないか」私は唸るやうにいつた。僕は君達ほどに氣が狂つてはいないよ。どうして僕が此處に、此の家に来たのか、それをまつづくに説明して呉れさへすればいゝんだ」

彼は憐むやうな微笑を浮かべた、少くとも私には左様思はれた。あの證據醫者が、下坂と秘書役だといつてゐるこの若い既見とに私の氣が衰たなどいひ聞かせたに相違ないのだ。して見ると彼等から何一つ眞實のことを聞き出すことが出来やう。

「遺憾ながらその證據は私には出さないで御座います」と彼は答へた。ですがモーソンには何う返答したもので御座つて」

「モーソンを煩いよー」私は怒つて叫んだ。

「君の好きな様に電報を打つたらいゝぢやないか、二度とその男の名なぞ云はないでくれ給へ。僕はそんな男は知らないんだ。又そんな男と知り合ひになり度も、その男の鱧山といふのに係はり度もないんだ」

「電報を打つて、そしてドーソン市に、追つての指圖の行くまでぶらぶら待つてゐる様に云つて遣りませう」

「この世の末日までも待つてたらよからうぢやないか」私の此の言葉を聞いて、流石彼も青白い顔に微笑を浮かべた。暫時の間、沈黙が二人に落ちた。始終のことを考へて見れば、何も彼も誠食らふ事ばかりで少しも謬が分らなかつた。前夜チエルシーで歸り倒された私が、その翌日は何うであらう、別荘らしい田舎の家に来て、私の秘書役だなどいふ男から大金銀の持主であるの、百萬長者であるのと聞かされてゐる。

私は頭に手を遺つて見た、繻帯がしてある。確かに空想でも何でもない。

すぐ前の吸墨紙の上には新しい書翰紙が置いてあつた。私は好奇心半分にそれを葉巻つて見た。するとその中には、パッドレー・サルタートン附近デンブリー・コートと麗しく刷り込んであつた。

「此處がデンブリー・コートなのかね」私は訊いた。

「左様で御座います」

「で僕は誰の招待を受けて來てゐるのかね」

「貴方は何方のお客様でもないで御座います。此の家は貴方達のお家なので御座います」彼は喫驚して答へた。

「ゲツチ君、君は氣が狂つてゐるんぢやないかね。僕はこんな家があるなんて一度も聞いたことがないよ、僕がこの

162 家の持主でないことも事實だよ。君は誰が他の者と僕を間違へて考へてるに相違ないよ——僕に酷く似た誰か他の者と」

「そんなことは決して御座いませぬ」彼は答へた。「貴方様のお名前がウキルフォード・ヒートンで、既に申上げました通り、私は貴方様に信任して頂いてゐる秘書役なので御座います」

私は頭を振つた。

「宜敷うございます」彼は逸さず云つた。「茲に何よりの證據が御座います」斯う云つて彼は私の傍に頭を屈めながら大机の抽出の一つを開けて、その中から便箋のやうな物を幾枚も持出して私の前に置いた。私は熱心にその刷込まれた頭字を讀んだ。それは「倫敦オールド・ブロード街、ウインチエスター百〇三番地ウキルフォード・ヒートンより」といふのであつた。

「ふむ、これを何に使つてゐるのだね」私は驚いて聞いた。

「市の方の事務所を使つてゐるのです」彼はその便箋を抽出に仕舞ひ込みながら云つた。

「君は僕に金があると云つたね」私は皮肉な笑ひを浮べて云つた。

「銀行の通帳が何よりの證據で御座います」そして彼は向ふ側の壁を切り込んで掘付けてある金庫の中から通帳を取り出して、それを開いて私の前に置いた。

私はその表紙を見た。然り、それは間違ひもなく私自身の通帳であつた。

私は預金の殘高に眼を落とした。そしてその金額の巨きいのに驚いて目を見張つた。

それは我々が夢想する以上な富であつた。

「で此れは僕のかね——間違ひなく僕の所有のかね」私は唾を呑み込んで云つた。

「間違ひなぞある等は御座いませぬ」彼は答へたそれから附加へて云つた。「貴方様の一札のことを私がお教へするな

んて、實際誤しなことでございますね」

「どうして僕は市に事務所なぞを有つてゐるのだね」私は驚感して云つた。

「貴方様のお仕事を處理するためにでございます」

「どんな仕事を」

「財政上の仕事で御座います」

私はその矛盾した話を嘲笑つた。事實私ほど節儉家でない、經濟といふことに無頓着な男は無いからであつた。

「僕を經濟家だといふなら貧弱極まる經濟家だよ」私は他に何も云ふことがないので斯う云つた

「貴方様は倫敦でも屈指の財政家として重きをなしておいでと御座います」ゲワヂは答へた。

「ふむ」私は通帳を閉ぢて彼に渡しながら云つた。

「僕はこの過去一時間ばかりの間ほど不思議な目に遭つたことはないね。君の云ふことは一言も——全く一言も僕には解らないんだ。今に本統に氣が狂うかも知れないよ」

「少しお顔みになつては如何でございますか」彼ははいよいよ冷淡な口調で云つた。「ブリテンが左様申して居りました。怪我のために少し転倒なされたので御座います。明日になれば屹度快くおなりになります」

「僕は此の不思議を明さない中は憩まうとは思はないよ」私は卓子から起ち上りながら決然として云つた。

が、その瞬間扉が開いた。そして骨つばい顔立の、ひよろ長い頭をした一人の婦人が入つて来た。私はその紅をつけ白粉を塗つて若造りをした顔を見て殆ど憤飯さんばかりであつた。彼女は五十歳位であつた。そして白粉の跡が落ちた顔の地膚は皺が寄つて褐色を帯びてゐるにも拘らず、二十歳前後の生娘の様に華美に身装を飾つてゐた。

「まあ貴方、ウキルフォードさん！ どうなさいましたの」頭に巻つけてある繻帯を見ると、彼女は幅のない干乾びた髪で驚いて叫んだ。

私は驚愕と好奇心を交へた眼差で彼女を見た。コテコテと白粉を塗りつけた彼女の顔は人形のやうでもあり、又脚も驚けても見えた。

「ヒートンさんは客間の彫像に運送くお頭りをお衝突になつたので御座いますよ、奥さん」ゲツヂが説明した。「ブリテンさんの有仰るのでは大した怪我でもなさうでございます」

「まあ貴方！ ウキルフォードさんたら！ どうして直ぐ私を呼んで下さいませんでしたの」

「でも奥さん」私は答へた。「まだ御別離に歸つてゐない私がどうして——」

「な、なんで御座いますつて！」彼女はわつと泣き出した。「まあ、あ、あなたは、よくも白々しくそんなことが云は

れますね」

「奥さん、きつぱりと申し上げますが、私はまだ一度も貴方にお目に掛つたことは御座いませんよ」私は毅然として云つた。

「貴方は本統に、私しの——貴方の妻のメーリーの顔も分らなくなつてお仕舞ひになつたのね」

「貴方が——」私は彼女を羨望めながら吃驚して囁いた。「貴方が僕の妻！ そんな馬鹿なことが——」

第十九章 見たこともない妻の話

「あなた、ウキルフォードさん！」骨ばつた顔の瘦せほとけたその女は云つた。「貴方本統に気が狂つてお仕舞ひになつたのね」

「奥さん」私は允諾して叫んだ、實際僕は彼女のお名前はちつとも知らないんです。今の今迄一度もお會ひした覚えは御座いませんよ。それなのに、彼女は押付けがましく僕の妻だなど、有仰る！ 少し情誼ではないで御座いますか？ 私は皮肉に笑つた。

「そんなことを有仰るなんて随かに気が狂つたんですよ」その女は幾分慰まれた顔で云つた。

「僕は少しも狂つてはいけませんよ、奥さん」私は云ひ張つた。そして随一言云ひ添へて置きますが、僕はこれまで結婚なぞしたことはありませんよ」

「まあ、そんな亂暴なことを！」彼女は云つた。「怪我のために貴方は理性を失くしてお仕舞ひになつたのです。醫者の命令通り憩んでおいでにならなくてはなりません」

「あの土俵の騒音者め、僕の氣が狂れてると罵つるんだ」私は笑つた。「皆が又それを眞顔に受けてるんだ」

「快くおなりになれば、そんな無茶苦茶なことを有仰る筈がありません」彼女は云つた。

「奥さん」私は憤然として叫んだ。「貴女のお話は馬鹿げてゐますよ、少くともね。貴女方は皆で共謀してゐてそんなことを有仰つてゐるのか、でなければ誰か他の者と僕を間違へておいでになるんだ。云つて置きますが、僕は河岸通りエセックス街のウキルフォード・ヒートンといふ者です、結婚しやうなど考へたこともなければ、無職左様いふ意志もない獨身者です」

「では私も申し上げて置きますが、貴方はウキルフォード・ヒートンで、私の良人で、此の家の主人で御座ります」彼女は昂奮して語を赤くしながら答へた。

私は此の厚化粧をした女の、自信ありげな決然とした宣言に全く驚かされて突立つてゐた。それは夢でも幻でもなく、嚴肅な實在であつた。

「貴女は僕が貴女のお話を——僕のお話などといふ貴女のお言葉を信じるやうになるものと思つておいでになる、昨夜ザ・ポルトンスで晩餐に招かれて、そのとき獨身者であつたばかりの僕に向つてね。そればかりではありませんよ、奥さん」私は彼女の言葉に感憤然として、多少口汚く云ひ添へた。「僕達の——左様、僕達の年齢の相違から見つ

て貴女と僕とが——などは誰も——」

「いえ、いえ」彼女は憤然として私の言葉を遮つて云つた。「年齢など別問題です。貴方は何うでも私を妻でないと有仰るのですね」

「云ひますとも、義然と云つて置きます」私は笑つた。隣りにも滑稽じみてゐるからであつた。

彼女は憤れむやうな眼差をゲツチと取換した。

「まあお氣の毒なウキルフォードさん、ほんとにお氣の毒な」彼女は同情深い口調で叫んだ、そして私の秘密役である自分でも云つてゐる男に話し掛て云つた。「お騒がせの言つた通りなのね。怪我をしたために本誠に氣が狂つたのね」「奥さん」私は毅然として叫んだ。「貴女はこの上僕を侮辱なさる必要はないやせう——そんな同情めいた言葉を聞くとは僕はほんとに侮辱を感じますよ」

彼女は手を組み眼を上方に擧げて祈る風をした。

「貴女は僕を狂人だとばかり侮れておいでになる。乃で僕を痛かさうとなさるんです」私は猛々しく云ひ掛けた。「が奥さん、御心配には及びませんよ、僕は貴女同様正氣であります、私が貴女の良人でないといふ証明を充分立て、お目に掛けますよ」

「ゲツチに訊いて御覽遊ばせ、私が虚言を云つてゐるかどうか」彼女は秘密役を顧みながら云つた。

「有仰る通りで御座います」とその男は私を正視しながら云つた。「奥さんの御言葉は一々暗かで虚言などは御座いま

やん」

「嘘を吐けー」私は彼を振り回しながら云つた。

「僕は此の女は全然知らないんだ！」

「成程」彼は皮肉に笑つた。「が兎に角貴方は此の御婦人を少しは知っておいでになる筈ですよ」

その句調から云つても、彼がその女を餘り驚等なものに考へてゐないことは明かであつた。

「僕は此の瞬間まで此の婦人と驚愕の人であつたことを喜んで斷言できるよ」

「ウキルフォードさん、貴方は大層御愛想のいゝことね」彼女は怨めしげに云つた。

「此の場合愛想にそんなことを云ふ必要はありませんよ。貴女は、私の考へで見ると、何か目的を控へてゐて、その目的を達するために無理強に僕に妻であるなど、信じさせやうとしておいでになる。が奥さん、折角ではありませんがそれは無駄な骨折りですよ。正直なところ、貴女を知つてもゐなければ、又僕の名簿に貴女のお名前を書き加へ度いなど、考へたこともないのですから」

「まあ」と彼女は叫んだ。「此れは不思議な話はまだ聞いたことがない！」

「奥さん、御同様私も聞いたことがありますよ」私は冷淡に云つた。「私はこれほど驚異な話を聞いたことはありませんね、私は昨夜驚愕者としてケンシントンの友人の所に招待されて行つて、遅くその家を出て来て、そしてエセックス街への歸途チエルシーの或る家に寄りました。だのに今起き上つて見ると、怒濤の男の夢以上な富の持主

168

だ、デヴォンシャイアの此の家の主人だ、おまけに貴女の法律上の良人だと聞かされる。で、若し私にこんな荒唐無稽な作り話がまる呑みに出来るとお考へなら、貴女が私を狂人とお思ひになつても無理はありませんよ、狂人の他にこんな虚言の連鎖を信じる者はありませんからね」

「いえ、いえ、ウキルフォードさん、貴方は自分で自分が分らないんです。私が説明して聞かせて上げます」

「數らでもお云ひなさい」私は馬鹿にされるのを覚悟しながら云つた。

「では最初にお尋ねしますが、貴方はブークスベリー附近の、ヒートン・メーノール家出のウキルフォード・ヒートンさんではないので御座いますか」

「いや、その通りです」

「で貴方は一度盲目になつておいでのごことはなかつたので御座いますか」

「不仕合せなことに盲目でした」

「では今貴方の市で政治家として事務を處理しておいでではないので御座いますか」

「僕は政治家などといふことは一向知りませんよ」私は答へた。「先刻も此のゲッチ君——だか何だか知らないが——から倫敦に於ける私の位置がどうのと、まるでお伽話のやうな矛盾した話を聞いたのだけれど、その點では到つて放埒な僕には、無意味以上の話なのです」

「では貴方はこの書翰紙をどう考へておいでになるのですか」ゲッチは卓子の上から何か把り上げながら訊いた。「こ

の手紙だつてどう考へておいでになるのですか、これは貴方の御手紙ではないので御座いますか」

私はその手紙を手に取つて見た。何か巨額な取引のことを書いたもので、驚くほど私の手紙に似せて書いてあつた。誰か君を騙しに掛つてゐるものゝ仕業だよ、人遣ひなのだ」

「そんなことはありません」とゲツヂは云ひ張つた。貴方の奥さんのお言葉通りです」

「僕の妻だ」と私は怒つて叫んだ。僕には妻などはないよ——神々も御座りあれだ」

「いえ、いえ」彼女は涙聲になつて、手巾で眼を拭りながら云つた。「そんなことを有仰らないで下さい。ウィルフォードさん、有仰らないで下さい。私の良人だといふことは御承知のくせに——よく御承知のくせに——」

「奥さん、私は自分がそんな榮譽のあの位置を占めてゐる者でないことはよく存じて居ります」私は毅然として云つた。

「でも私は證據立てます——それを證據立てることが出来ます」彼女は涙を零しながら叫んだ。

「成程。此の不思議な作り話が證據されるとは實に面白いですね」私は云つた。「多分左うすれば事實も明かになつて來ませうよ」

「事實は既にお話し申し上げた通りで御座います」とゲツヂは云つた。

「ではその證據を見せて貰はうか。この婦人の云ふことが間違つてゐないなら、何處かに證據書か何かとありさうだわ」

「證據書はウォータールーとエクセターとの間の列車中で、寶石を盗まれた時に失くして仕舞つたのです」と彼女は答へた。「でも、寫しならわけなく手に入ります。倫敦の貴方の辯護士に頼めば、直ぐソモセット・ハウスから寫しを取つて呉れます」

「證據書を盗まれたと」私は叫んだ。「實に巧妙な口實ですね。でもお氣の毒ながらその口實は見えてゐますよ。彫刻がそんなものを盗む筈がありませんからね。證據證據など、實に入れたつて一文も借せはしませんからね」

私の前のその女は、頓着したやうに部屋の四圍を見廻した。私は彼女が遂にやり込められたことを知つた。

「で又、何處でその不思議な結婚式といふのは挙げられたのです」私は多少辛辣な反語を含めて訊いた。

「ウエルス街の聖アンドリュウ教會に於いてです」

「倫敦のウエルス街？」

「左様です。貴方もよく御存じでせう。オックスフォード總主教の御教會です」

「その教會ならよく知つてゐます」私は答へた。「が、これだけは明かに斷言できませんよ。僕は生れてからまだ一度もその中に入つたことはないのです」

「其處に行つて結婚登録簿を御覽になれば、奥さんと一緒に、御自身の署名も御座いませう」ゲツヂは云つた。私は驚いた。

「故々そんな所に行つて探る必要は少しもないよ」私は云つた。「此の婦人の方で僕の妻だなど云ひ立てゝゐるのだ

から、彼女自身で証明するのが當然だらう」

「宜敷うございます」ヒートン夫人だと自稱してゐるところその婦人は叫んだ。『では三日以内にはその証拠書の寫しを取つてお目に掛けます』

「証拠書の寫しな何かが當になるものか」私は疑はしげに云つた。『原のお願ひしませう』

「原のは運悪く失くしたのです」

「盗まれたのですか、それとも盗りに何處かへ歩いて行つて仕舞つたのですか」

「証拠書をソマレスト・ハウスから取つて来るまでお待ち下さいませんでせうか」

「駄目です」私は答へた。『もしも貴女が本統に僕の妻なら、奥さん、僕が一時暇まで一度も見たことのないこの家に斯うしてゐる此の秘密を、説明して下さいませんか』

その婦人と秘書役とは再び眼くぼせした。

「私達の中の一人も、それを説明することは出来ないのです御座ります」とゲツヂは答へた。

「何か秘密があるにはあるのですが、それが果して何なのか私達には分らないので御座ります」

「秘密が」と私は翻り返しに云つた。『こんな驚かすべき立場にゐるところを見ると、其處に何か秘密が——極端に隠れ合つた秘密があるに相違ないと思つてたんだ。一度も見たことのない女と——而も自分の母親はとも老た女と結婚してゐるなど聞かされただけでも、大抵の者なら気が狂つて仕舞はうぢやないか』

「シッ、シッ」と明かに左様した言葉を避けたがつてゐるその秘書役は云つた。彼は私の言葉にハラハラしてゐるらしくつた。

「もしも僕が自分の家にゐるとするなら」私は膝を飛ばして叫んだ。『僕が此の家の何者か位は聞かせても差支はないだらう。僕は此の主人たのかね、それとも——』

「左様で御座います」と彼は急に卑下して云つた

「ではよく聞いて貰ひ給へ」私は云つた。『証拠書が倫敦から着くまでは、僕は此の僕の妻だと云ふ婦人には會ひ度くない』

それから彼女を振舞つて、一掃を興へながら皮肉に付け加へて云つた——

「奥さん、當分別々に居た方が、お互にいやな思ひをしないことになつて好いでせう」

「有仰る通りですわ、ウキルフォードさん」敬儀するやうな身振りをしながら彼女は手を差し出して云つた。『行つてお願ひなさいまし、ね貴方、お醫者さんの命令通りになさつた方がいゝわ、直ぐ快くなりますわ。でも行つしやる前にお願ひがあるんですけれど』

「お願ひですつて？」私は疑のある聲で訊いた。

彼女は私の方に近付いて来て、むかづく様な癖を伴りながら、顔をすり寄せて私の姿勢を待った。『馬鹿な』と私は憤怒に我を忘れて荒々しく叫んだ。『此の上焦々させないで下さい。私は二度と、奥さん、貴女に』

お目撃りたくはありませんよ——世の中が御座りになりますよ」

「まあ、こんななされ方をなさるなんて、私が何をしたらからといふのでせう」彼女はボロボロ涙を流しながら悲しく泣いて云つた。

「私が何をしたいといふのです、私しが？」

「貴女が何をなさらうと僕の知つたことちやありませんよ、面白くもない」私は屈へた。

「唯私の存じてゐますのは、私の妻だなど、有仰る貴女の言葉が念の入つた赤辣な虚言だといふことです」

暫時の間、彼女はもぢもぢして立つてゐた。それから止め度なく涙を流しながら、彼女は両手で顔を掩うて部屋を出て行つた。

彼女は果して離婚の怨みに泣く妻の役を演じてゐたに過ぎなかつたであらうか？ それとも……

もしも何か計費されてゐるとするならば、餘程變つた計畫が其處に隠たはつてゐるに相違ない、と私は考へた。

第二十章 昨日は、

「で君」と私はゲツヂを振りながら云つた。

「この僕の新領士といふのを案内して呉れ給へ。兎に角氣持の好さうな家ぢやないか」

彼はけよんな體格をして私を説いた。

「御自分の家を案内しろなんて、それは本統なので御座いますか」

「無禮な氣で云つてゐるんだ。まだ一度も見たことがないんだ。それには今が好機會だと思ふんだ」

「でも、御座るにいらつしやつて、お暇になつては？ 給仕のレネナを鈴で呼びませう」

「給仕なぞ呼ばなくてもいいよ、僕は暇みたくはないんだ」私は氣に答へた。「僕は此の秘密を探りたいのだ」

「それならお許しを願ひ度う御座います」彼は皮しく云つた。「秘密などは何處を探したつて無いので御座います。運

悪く運をお打ちになつて、人事不省にお墜りになつたので御座います。醫者の云ふので見ますと、打撲のために心の

能力が少し鈍つたのださうで御座ります。でも一週間の中には快くおなりになりますよ。お氣の毒に、呉さまはすつ

かり氣を取り直してお仕舞になりました。」

「呉さんなど、あの女を呼ぶことは止して呉れ給へ」私は憤然として云つた。「分つたかね。僕には妻なぞはないんだ

——あんな卑劣と醜態した記憶は毛頭ないんだ」

彼は傷ましげに眉を蹙めて溜息を吐いた。が一言も云はふとはしなかつた。

「さあ」私は云つた。「一つ案内して呉れ給へ。この見物はなかなか面白さうだ」そして私は、人間史に斷えてない

異常な機遇に身を置いてゐる自分を振りながら笑つた。

「が御案内申上げの前に、小切手に調印して戴けないでせうか」彼は懐中時計を出して見ながら斯う云つた。「三十分

以内には郵便配達の手紙を取りに来る筈になつてゐますし、それにその手紙といふのは今日出さなければならぬ手紙で御座いますので」

「どんな小切手なのだね」

「六枚御座いますので」彼は大きな小切手帳を取り出してそれを開いた。私はそれを見た。六枚とも巨きな額面で、どれも一千圓を超過してゐた。

「皆事變の取組に關係のありますので、非常な儲け口の資本なので御座います」

「成程ね」私は又もや笑ひながら云つた。「彼はこんな巨額な小切手に調印するのは此れが初めてだよ。君がして呉れといふなら調印しやう。儲けにならうとなるまひと僕の知つたことぢやないんだ」

私はペンを把り上げてその一枚々々に署名した。彼はそれを受取つて一々封筒に入れた。

「乃で」と彼は遂に云つた。「貴方様が本城に案内しろと仰有いますなら致しますが、始終のことが餘り茶番しみて矛盾してゐますので、失禮では御座いますが、貴方様が正氣でおいでなのかどうか疑はれるので御座りまして」

「ふむ。君はどうして僕が氣が狂つてゐると思ふのだね」私は彼を正視しながら云つた。「それとも狂人のやうな調付でもしてゐるといふのか」

「いえ、そんなことが。僕は調付をしておいてになるので、重傷を負つた人のやうに見えるだけで御座ります」

「あのブリテンの醫學者が無知無理に僕を狂人だといふことにして仕舞つたんだ！」私は云つた。「が、僕は全くや

無心持で、矛盾の懼れなしに君に云ふが、僕は今日に至るまで此處に入つて来たこともなければ、君やあの妖怪みたやうな老婦人に一度もお目に掛つたことはないよ、でもし、君が僕の立場に在るとするなら、見たことも聞いたこともない女から良人なぞと呼び掛けられれば君だつて怒らずにはゐられないだらう」

彼の辭は微笑に和らいだ。

「こんなことを申し上げるのは如何かと思ひますけれど」彼は云つた。「此の上そんなことを詮議なさるのは好くないかと思ひます。獨りでに解決が着くやうになるのも長いことではないと思ひますし。それにその中、貴方様の理性も次第に瞭然としてくるだらうと思ふので御座います」

「先刻も云つた様に、此の矛盾だらけな偽りの立場から身を脱ぐまでは思はないよ」私は決然として云つた。「僕は屹度誰か同姓同名の者と間違へられてゐるのだと思ふ」

「モーソンの電信にどう返事をしたものでせうね」彼は云つた。「これ程の素晴らしい運が向いて來てゐるのですから、少しはお取合になつてもいふと思ふので御座いますがね。金額を渡したと云つて來てゐるのに貴方様は眞實だとお考へにならないので御座いますからね」

「君は云つた。お願ひだからそんな奴のことを、金額などのことを云つて僕を憐れなさいで呉れ給へ。君の好きな様に返事をしたらいいぢやないか。君は一任一任好く承知してゐるやうだ。僕は何も知らないんだし、知らうとも思はないんだ」

「でもこんな場合に私一人の指圖で行らうなどは考へられもないので御座います」彼は云ひ張つた。「ドーソン市で返事を待つるので御座いますがね」

「待たして置いたらいゝぢやないか」私は云つた。「そんな知りもしないクロンダイクの金鑲のことよりかも、僕に取つては無理強い結婚問題の方が遙かに重大なことなんだ」

「でもあの御婦人は貴方様の奥様なのです。何でこの上氣をお揉みになる必要が御座いませう」

「ではどうして君はそれを知つてゐるんだ？」

「私は結婚式に列席したので御座いますもの」

「瞬間、私は彼を凝視した——一言も聽し得ないで。」

「では次に君にお訊きするが、君は僕の獨身時代からの秘書役かね」

「左様で御座います」

「で君は實際に教會に列席して僕が結婚したのを見たと言ふのだね」

「列席しました。貴方様はエルス街の聖アンドリュウ教會で結婚されたので御座います。實に盛大な結婚式で御座いました、と申しますのも、何分フォードイス婦人があの通り社交會でも知名なお方だもので御座いますから」

「フォードイスだと？」私は面喰つて歸返しに訊いた。

「左様で御座へます、貴方様と結婚なさる際の奥様のお名前なので御座います」

私は唖り唇を揚げた。彼自身私の不幸な結婚の實際の目撃者だなど云ふのでは、事件はいよいよ厄介なものになつて來た。

「私達は連れ立つて、その隣り田舎の館を部屋から部屋へと抜けて行つた。」

「貴方様御自身のお家を私が御案内しなければならいなんて、實に訝しなことで御座いますね」麗い階段を上りながらゲツヂは云つた。「誰が聞いたつて本氣にはしないで御座いませう」

「僕自身も君の話を本氣だとはどうしても考へないよ」私は云つた。「が其處らの家具は誰が命じて造らせのだね」

「貴方様で御座います。奥様の御意に成つたのも御座います」

「あの女の發案だらう。僕には、小さな居間にこんなに青色や綠色を減茶若茶に使ふ様な野蠻じみた趣味の持合はせはないからね」

「茶の間のことで御座いますか」

「確か左様だつたね。全體が恰で家具屋の様ぢやないか」

「でも友人の方は皆お讀めになつてゐます」

「友人つて誰のことだね」

「チャーレス・ステイムメル卿だとか、ラークーム嬢だとか、フレーザー夫人だとか、さういふ階級の人達で御座います」

「僕はその人達は聞いたこともないね。どんな人達なのだね」

「貴方様の御友人の人達で御座います。貴方様はよく御存じの筈で御座りますよ。フレイザー夫人は奥様の御親密な方で御座います」

「フレイザーだと？」私は反射的に云つた。

「そのフレイザーといふだけは知つてゐるよ、クレーアの市場の麵屋で、僕の召使ひのパーカーに麵を持つて来てみた女だ」それからちよつと躊躇つた後、私は附加へて云つた。

「で君はその人達が僕の友人だと云ふのだね、僕には友人が澤山あるのかね」

「澤山御座ります。富豪には幾帳のいゝ知己が澤山あるのが慣例で御座ります」

「その連中は、田舎の空気が吸ひたくて茲に遣つて来るのだね」私は笑つた。

「まづ、そんなところで御座いませうね。その中の大部分は眞面目な交際を求めにおいでになつてゐるのではないやうで御座いますね。金があつて、結構に暮せて、立派な卓子を備へ付けて、奢りに撰り抜きの酒を貯へておいでになる方は、幾らお友達がおありになつたつて、いやな顔をおさせにはなりませんね」

「君は仲々哲學めいたことを云ふね」

彼は如才なくほゝ笑んだ。

「貴方様の秘書役を勤めさせて聞いてゐるうちには、多少これで世の彫曲した途も踏えたもので御座います」

「何だとね？」私は叫んだ。「では僕は正直に遣つてはいなかつたのかね」これは全く私には耳新しいことであつた。

「誰だつて經濟家で正直な者は御座いませんよ」

「ふむ」私は彼の非難めいた言葉にむつと云つた。「僕はまだ人からたゞの一銭も巻きあげた覚えはないのだが」

「ワインチエスターの商館では一銭などいふ金は勘定になるので御座います。千圓が單位なので御座います」

「君の口吻で見ると、僕の財政上の取引といふのは——僕はちつともそれを知らない、だが——本職正當なことばかりでもなかつたやうだね」數物のある長い廊下を連れだつて行きながら私は云つた。彼は躊躇して私を見詰めた。

「無論事業で御座いますもの」彼は答へた——

「辣腕の要る事業で御座いますもの。でも私は、ワインチエスターの商館での取引が、市の他の財政家の取引に較べて、より不正だなど云つてゐるのでは御座いません」

「何だとね」私は立停つて彼をチロチロ見廻しながら叫んだ。「正直に云つて呉れ給へ、ゲラチ君。赤地に聞かせてくれ給へ、僕でも他人を騙したことがあるかどうか」

「そんなことは御座いません」彼は笑ひながら云つた。「今日の大を——何百万の財産をなしたものは貴方様の辣腕一つで御座いますよ」

「では僕は市中でも聞かされてゐるのかね、え？」

「貴方様のお名前はベネットの柱時計よりも有名なので御座います。又ラッドゲイト・ヒルとフエンチャーチ街との

「間で貴方様の御信用に及ぶ者はないので御座います」
 「途方もないことだ！」私は云つた。「君の云ふのを聞いてみると、まるでお伽噺でも聞かされてゐるやうだよ」
 「銀行の預金の残高が何よりの證據で御座います。趣意書の數ある中にはまるでお伽噺みたやうなものもありますが、貴方様の財政上の根柢はなかなか確りしたもので御座います」
 私達は部屋から部屋へとふらふら歩き廻つた。寢室客間等合計三十以上の部屋があつて、孰れも丹精を凝して華美に裝飾されてゐた。

「この次の部屋が」と廊下の端近く來たとき私の秘書役は云つた。奥儀の御屏間で御座います。先般小間使のダルトンが入つて行つたのを見受けましたからおいでになることと思ひます」

「後生だ、窃つとそのままにして置いて呉れ給へ！」私は踵を返しながら云つた。

書齋の方に歩いて行く途中、大廣間に鏡があつた。で私は通りがてらに姿を映して見た。私は思はず驚きの叫び聲を擧げてその前に立ち停つた。

頭の前帯のために恐ろしく病入らしく見えるのはまだしものこととして、前日の朝例ものやうに鬚を剃つた筈なのに、鏡で見ると私の鬚には程よく刈られた尖つた赤褐色の鬚が生えてゐた！

そればかりではなく、私は少し老けて見える様に思はれた。頭髮からは青春の光澤が消え、額には三本の筋が——苦勞の皺が寄つてゐた。

私は手で鬚を撫で、見た。さうだ、確にそれは鬚に違ひない、が何うして知らない間にそんな鬚が生えたのであらう。

開かれた彼方は青い芝生が眺められ、芝生には日光がキラキラと輝りわたり、草花が咲き亂れ、木立か樹ち並んでサラサラと涼しさに枝をそよがしてゐた。

季節は夏であつた——僅か昨日までは寒い寒い冬であつたのに。

私は昔譯のリップ・ヴァン・ウキントルのやうに眠つてゐたのであらうか？

「君、君」と私は背後に立つてゐる男を振り顧りながら亢奮して云つた。「一體今日は何月の何日なのかね」

「七月の十七日で御座います」

「七月の——」と私は驚き返して云つた。「で今は何年なのかね」

「何年つて、一八九六年では御座いませつか」

「九十六年！」私は吃驚して襟をじろじろ見廻しながら喘いで云つた。「九十六年だ——」

「確に左様で御座います。でも又何故——」

「では僕は本統に氣が狂つてゐたのか？」私は瞳を潰して云つた。「昨日が六年も前だなんて——」

第二十一章 ゲツヂの話

「昨日が六年前で御座いますつてー」彼は狐に抓されたやうな顔付をして私を見守りながら云つた。「それは又どういふ意味で御座いますせう？」

「君のいふ話が眞實だとするなら」私は呆氣に取られて叫んだ。「これほど驚嘆すべきことが何處の世界にあらう。君は恥ちがひしてゐるのではないかね」

「恥ちがひしてゐるかつて？ 無論、どうしてそんなことが」

「僕は何年か前を云つてゐるんだ」

「大丈夫、一八九六年に間違ひつこありません」

「では君は何年間僕の秘書役を勤めてゐるんだ」私は訊いた。

「約五年間で御座います」

「では僕何年位此處にゐるんかね」

「四年近くになります」

「そしてあの女は」私は息もつかずに尋ねた——「眞實に僕の妻なのかね」

「それに相違御座いません」

私は啞然として突つ立つた。

「併し」私は呆然として云つた。「昨日が何年も前だ、と云ふが、君は何を根據として左様云ふのかね。まさか、を欺いてゐるのではないだらうね」

「私は全く眞實のことを申し上げてゐるので御座います。私の名譽にかけて断言致します」

私は何か此の世の外の世界でも眺めるやうに、鏡に映した自分の姿を見詰りながら驚いて突つ立つた。顔付も體に變つてゐた。で、それを見て、ゲツヂの言葉には何等かの信が置けるやうに、へられた。

「すると、君の話を聞きだすと、僕は昨日此處で——此の家で暮したわけだね」

「無論左様で御座いますとも」彼は應へた。

「私と貴方様とはラフアンの事件で昨日一日殆んど掛り切りで御座いました。鑛山技師のウォーター・ハリバートンが貴方様に面會に遣つて來まして、午後三人で居たので御座います。ハリバートンは五時に倫敦に發つて參りました」

「で何處で僕は食事をしたんだね」

「此處で僕と御一緒に——」

「奥様などいふことは止して呉れ給へー」私は怒つて叫んだ。「あれは妻ではないんだ、そして僕はあの女にもそんな風に考へて貰ひ度くないんだ」

彼は肩を縮めた。

「で、君ゲツヂ君」私は初めて彼に心を打明けて云つた。「もしも君が僕の立場に在つて、偶と眼を疊して一夜の中に